
Double Life

Toki.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Double Life

【Nコード】

N5680D

【作者名】

Toki.

【あらすじ】

無神経な親に騙されて、学校一美少女と言われている秋本明日香と同居することになった香坂風紀。そんな誰もが喜ぶような生活…なのはずだが、風紀にはあまり喜べない事情があるのです。その事情とは…。そんな二人のドタバタ生活が今ここに始まる！**Double Life (Final Story) 投稿しました

**

1 - 1 (前書き)

こんにちは！ 盗鬼です。

このDouble Lifeという作品は、盗鬼の処女作です。
そして、昔ある事情で私が完成を待たず、投げ出してしまった作品でもあります。

最後まで書き上げることが目標です。

では、二人のドタバタ生活を見ていってあげてください！！！！
よろしく願います ペコ

「あつつい!」

親から貰った地図を片手に坂道を登る。

今は春というのに、この暑さ。最近の日本はどうなっているんだ。

そして俺、香坂風紀こうさかふうきは今日何度目か分からない言葉を発する。

「暑い~~~~~!」

俺は今、高校一年生となろうとしている。

と、言うか明日が入学式だ。

今年高校生になる俺は、親が無理を言って親抜きのことになった。

俺の親は、俺が高校に受かったその日にこう言ったのだ。

「父さんと、母さんはこの家売り、世界一周旅行に行ってくる。旅行は三年掛かるから、お前は私たち抜きで生活をしなければなら
ない」

その時は夢かと思ったよ。

そして今、それが現実になっている。

親父が言うには、俺が今から行く家には

『しっかりものの、頭の良い、優しい男の子』がいるらしい。

一人暮らしというのは少し不安だったが、同居人がいて協力し、暮らしていくのは頼もしい限りだ。

それにしても、この親から渡された地図の雑さはなんだ！

これじゃあ小学2年生が書いた地図と言っても誰もわからないだろう。

しかし、その地図を分かってしまう俺…。

やっぱりあの無神経な親とは親子ということなのか。

そして、これから新しい生活を送る家に着いた。

家と言うかマンションだ。

「405か…」

俺はそう呟き4階の405号室の前に立つ。

そして俺はインターフォンに手を伸ばす。

ピンポン

綺麗に音がなった。

「は〜い！」

と、可愛い声が中から聞える。

…ん？

可愛い？

ガチャッと勢いよく家のドアが開いた。

そこに居たのは髪が長く綺麗で、くりつとした目の女の子。

「ど、どちらさまでしょうか？」

第一声を発したのは女のこのほうだった。

ん？ 俺は部屋を間違えたのか？

確か、ここにいるのは俺と、すっかりものの、頭の良い、優しい男の子がいなくてはいけないのに

俺と、髪が長く綺麗で、くりつとした目の女の子がいる。

…何故？

「あ、あのお〜」

女の子が困っているのが分かる。

「え、えっと。ここってこの地図の場所の405号室ですよね？」

一応確認を取る。

女の子はその地図をじつと見た後頷いた。

この子も、この小学2年生の地図を理解できたらしい。

「俺、ここに今日から住む予定なんですけど…」

「私も、今日からここに住む予定…なんです」

…え？

「君もなの？」

「は、はい…。私は、女の子と同居するって聞いていたんですけど…男の方ですよね？」

そりゃ見て分かるだろ…。

「俺は、男の子と同居するって親から聞いてて…」

…はい。沈黙です。

俺はいつの間にか携帯を持ち、親父に電話を掛けていた。

『はい、もしもし。』

「親父！どうなってんだよ！」

『そう怒るな。結構可愛い子だろ?』

「そりゃ可愛いけど…」

俺はそういった後女の子を見た。

何かボーとしていて本当に可愛い。

『ならいいじゃないか』

親父の声で我に返った。

「それと、これとは関係ないだろ！ 一人暮らしでいいから部屋を用意しろ！」

『そのマンションにはもう部屋が無くて…。同居しても良いっていう子がその子しかいなかったんだ。まあこれからその子と同居するわけだから色々和我慢しろよな』

そういう親父の顔がニヤついているのが想像できる。

と、言うか色々とは何だ！色々とは。

『まあ頑張れよ！ じゃあ』

プープープー

「お、おい！」

「お父さん？」

女の子は首を横にまげて聞いてきた。

「うん。まあ頑張れっていった…」

「あ、あの家に入りませんか？」

「え？ あ、うん」

俺は今、家の前に突っ立っていることに気付いた。

中に入ると、ダンボールがいくつか置いてある。

やはりあの女の子は今日からここに住むらしい。

この部屋はぱっと見たところ、2LDK、バス、トイレ付の別だな。

しかし…一つ一つの部屋が大きいな。

二人で住んでもおつりがくるぐらいの大きさ。

部屋を眺めているのに気付いたのか

「結構大きいですね？ けど、家賃が高くて…。だけど、同居してくれるならその同居の方が一括払いしてくれるって聞いて…。けど女の子だと思っていて」

「そうなんですか…。」

親父か…。金の欲求ではめたな…。人間として失格だろ。

またもや沈黙。

「ああーーーー！」

「な、何！？」

女の子がいきなり大きな声を出したのでビックリ…。

「自己紹介がまだでしたよね？ 私は、秋本^{あきもと}明日香^{あすか}、15歳の今年から高校一年生です！」

いきなり何を言い出すのかと思えば、自己紹介か。俺もしたほうがいいな。

「えっと、俺は香坂 風紀、15歳で今年高校生一年生になります」

「風紀君ですか。こうなったのも何かの縁です。これから宜しくお願ひしますね」

「宜しく。あと風紀でいいよ。同じ歳なんだし。俺も明日香って呼ばしてもらいますから」

「はい！！」

笑顔のようなくわからん真面目な顔で返事をするので笑えてきた。

「な、なんですか？」

けど、その事はいえないよな。

「何でもないよ。あと、敬語はやめところ。これから一緒に住むんだし。」

「はい!!--!」

ホラ・・・笑えるよ。

「だから、何ですか~!」

さあて俺の生活はどうなるのやら。

1 - 1 (後書き)

Double Life 1 - 1を読んでいただいております！

更新ペースはなるべく早くするつもりなので、毎日覗きにきてあげてください。

いつきに、1、2、3話と更新する可能性があります。ご注意を。

あ、ちなみに…盗鬼としては、コメント、評価をいただけると、非常に嬉しい…です。（*ノ、）キャー！！

ドンドンドン！

俺の部屋が叩かれる音がする。

「もうちょっと…」

俺は寝言のような言葉を言った。

「風紀君！」

可愛らしい声が聞える。

なんとすがすがしい朝なんだ。

…って違う。

バツとベッドの上に座るように起きた。

周りにはまだ家具は置いていない。

置いてあるのは、このベッドと箆笥だけ。

テレビは面倒くさいので後にすることにした。

「風紀君起きて！」

そして、俺はぼつちり目が覚めた。

そう、俺は親のせいで女の子と同居中。

俺の高校生活どうなるんだ。

「はいはい」といいながら自分の部屋のドアを開けた。

「やっと起きたあゝ。早くご飯食べよ！」

「え？ 朝飯あるの？」

「当たり前じゃん！ 朝は大事だよ？」

「分かった。あと風紀君って呼ぶのは…」

「あつごめん！ つい…」

「まあいいけど」

「ありがと！ 風紀！」

そう満面の笑みを朝一番に見れる俺は幸せ者なんだろう。

そして、今日は高校の入学式。

…高校？

明日香の手料理と思われるご飯をほおばりながら俺は言う。

「俺らって傍から見れば同棲って事になるよな…」

高校にばれたら洒落ではすまないだろう。

…沈黙。

「そ、そうですね」

「やばくないか？」

「バレなきゃ大丈夫ですよ！」

こいつ…。

可愛い顔して大変な事考えてるな。

ご飯をさっさと食べ終わり制服に着替えて学校に行く準備。

高校のために引っ越したので、駅ひとつ分。徒歩20分程度の近さだ。

その道を俺たちは歩いて学校に向かう。

誰が見ても昨日初めて会った二人には見えないだろう。

「そつえば、風紀って何組？」

また、突然に明日香が聞いてくる。

「え？俺は2組。明日…」

明日香は？と聞く前に明日香が多いな声を出した。

「えー！ 風紀も2組！？ 私も2組！！！」

明らかに周りの視線が自分たちに向いているのが見なくても分かる。

「席が近いといいね！」

…考えてみる。秋本の「あ」と香坂の「こ」普通に考えたら近いだろ。

けど、ここまでは考えていなかった。

学校に着き自分たちの席を確かめる。

「なっ、っ、」

「やったああ！」

なんと席が隣。

またもやみんなの視線を明日香が集めている。

まあ、可愛いからというのも含まれているだろうが…。

「あんまり五月蠅いと怒られるぞ？」と、俺が明日香に言っていると隣から聞き覚えのある声が聞えてきた。

「おい！ 風紀！！ その可愛い子は誰なんだ！？ いつの間にか彼女を作りやがって！」

と、誤解しているのが中学校の奴で唯一俺と同じ高校を受験して受かった清水 亮平しみず りょうへい。亮平とは、小学校からの一番の友達。女好きな野郎で人の意見を参考にすると結構かつこいらしい…。

「風紀！この人誰？」

明日香は俺の服をちょんちょんと引っ張りながら聞いてくる。

そのしぐさが可愛くて仕方ない。

俺は、少し鳥肌がたつたが。

理由は、のちに教えよう。

「えっとこいつは…」と簡単に亮平を説明した。

「わ、私は、秋本 明日香です！風紀とー…ンゴ！」

その後の言葉を言わせないように明日香の頭をもっていたかばんで軽くはたいた。

俺たちが同居しているなんて亮平に言ったら、学校全体に言っているようなものだ。

「アハハ！何も無いよ亮平君。明日香と俺は今日初めて会った同士なんだ」

もう…駄目だ騙せない。

「へえ、そう」と言って亮平は自分のクラス（3組）に戻っていった。

…え？ 騙せたのか？

そう思いながら亮平の後姿を見送った。

「お前さっき『風紀と一緒に住んでいます』とかいいそうだったろ…」

「う、ごめんなさい」

そう言っ下を向く明日香の仕草。秋葉系じゃなくても一コ口だな。

「けど、さっきの人優しそうに見えて…」

「あいつはああ見えてすごい男だから気をつけろ」

そして明日香はコケツつと頷いた。

キンコーンカンコーンとチャイムが鳴る。

その音が鳴り終わると同時に20代前半と見える女の先生が入ってきた。

「みんな席について！ ってみんなちゃんと座ってるかあ」

と、よく分からないテンションで教室に入ってきた。

「出席とりまあゝす」

と、またもやよく分からないテンション…。

「1席 青木麻衣 2席秋本明日香…」

このクラスは、全部で40人。

出席をとった後は体育館に向かいらしい。

そして、入学式が始まるというのだ。

帰りには、もう明日香は友達を作っていた。

笑顔で友達に「さよなら」という明日香は…可愛い。

「風紀……！ ストップ！ ストップ……！」と俺を呼んでいる。

「な、何！？」

小走りでこちらに向かってくる。

「はあはあはあ……」

相当疲れたようだ。あの距離で…。

「大丈夫か？」

「すう…はあ… もうバツチリ！」

男を悩殺する笑顔とピースで周りの視線を集める。

「で、どうした？」

俺は問う。

「え、えっと…一緒に帰ろ？」

「オフコース」

そう俺が言つと明日香は笑ってくれた。

「風紀いいい！ これ可愛くない？」

と、店のイルカの絵が入ったコップを持ち、俺を呼んでいる。

「そんな大きな声出すなって」

「ごめんなさい…。でもこのコップ可愛いでしょ？」

その世界一可愛いと思える笑顔で言われたら否定は出来ないぞ。

「まあまあだな」

「じゃあお揃いね！」

と、鼻歌交じりで会計に行く。

もう分かっていると思うが、俺たちは生活に必要な物を買いに来ている。

二人とも昨日引越してきたばかりなのでコップやお皿が殆どないのだ。

傍から見れば俺たちは新婚さんのような雰囲気醸し出しているのだろう。

少しばかり嬉しい気もするが、俺たちは昨日あったばかりだ。

「風紀いい！！！」

…はあ、また明日香が俺を呼んでいる。

こんな幸せ生活に、ため息をつく俺は間違っているのだろうか。

「今度はどうした？」

「2円足りないのぉ」

「2円かよ…」

はいっと言つて俺は財布の中から2円を取り出す。

…え？ 俺がコップ代払えつて？

何を言いますか読者様。この店は今日行く最後の店。

その前の皿や、タオル、他12品全て俺が払ったんだぞ。

溜息交じりで帰り道を歩く俺。

隣では楽しそうに先ほど買ったコップを眺めながら歩いている明日香がいる。

これから一回家に帰つて、また買い物に行く予定。

今度は食べ物の買いに行くのだ。

今日は明日香が作ってくれるらしい。

二人だと家事を分担できて結構楽な予想が出来る。

ある意味二人でよかった。

そして、俺たちは一回家に帰った後また買い物へと行く。

「ねえねえ風紀。今日何がいい？」

隣を歩く明日香が聞いてきた。

「まあ…明日香が作れるやつで美味しいの。」

そう言う俺の言葉をメモする体制に入っている明日香。

「じゃあ、嫌いな食べ物はあるう？」

「特にないけど？」

「特にナシ…と。因みに明日香は納豆が食べれないよ！」

別に聞いてないけど…。

「ではでは第2問！」

何故、問題形式になっているんだ。

「風紀の好きな食べ物？」

「俺の好きな食べ物は…卵？」

うん。はっきり言って卵が好き。だけど、マヨラーではないのだ。

「ではでは第3問!」

と、質問攻めにされる俺であつた。

やつのことでスーパーに着いた。

玉ねぎとかきゅうりとつてきて! と命令を下される俺。

俺はパシリですか? 明日香さん…。

「はいはい」と言いながらパシリに使われている。

約10品目あたりの頃…。

「風紀! 次はねえ…」と言いかけた時近くから女の子の声が聞えた。

「おゝい! 明日香! じゃない!」

「ああ! 沙希! どうしたのこんな所で!」

「お母さんと買い物。明日香は…ってそちらさんは?」

そつ沙希という女の子が俺の方を指している。

「えつとこの人は香坂風紀。なんというかお知り合いみたいな?」

「…なんか明日香アタフタしてるう! もしかして我が高校で一番

可愛い明日香ちゃんの彼

氏？」

「まあ…そんな感じ」

そう言って明日香は笑っている。

と、言うかその前に彼氏ということを否定しないのはなんとも男として嬉しい。

だってあの明日香だぜ？

心臓がバクバクしている。

「えっと風紀？」

「な、何？」

「えっとあ…この人が水谷^{みずたに} 沙希^{さき} 同じクラスの子だよ」

その人の顔を見ても「ああ、いたなあ」って思うぐらい。

顔の良さは明日香には及ばないがなかなかの顔の持ち主と見る。

「よろしく」

一応言っておくのが義理。

「よろしくお願いします！ なかなかの顔の持ち主をゲットしてた

んだ。明日香は」

「いや、だからなんというか…」

「まあ深くは追求しないから！　また明日ね！」

と言って沙希はその場を立ち去っていった。

「なんか、誤解されていなかった？」

「けど、彼氏みたいな関係って言ったらそうでしょあ」

うんうん。と頷きながらいう明日香はやっぱり可愛い。

しかも沙希っていう子に「なかなかの顔の持ち主」なんていわれたし…。

少々照れてる俺はなんというやつなんだろうか…。

過去一人だけしか彼女ができていない俺にしてはなんという褒め言葉か！とは思ったけど…。

そう…過去に一人だけ…。

そっぴや明日香は彼氏いたのかな？

あの話だと今は彼氏いなさそうだし…。

後で聞いてみよ！

そして、買い物も終わりトボトボと家に帰る俺たち。

「今日は疲れたね…風紀」

無言で頷く俺。

はつきり言っただけに疲れた。

生活に必要な物を買に行ったり、食事を買に行ったり…。そういやテレビも今日の帰ってきたときに明日香に無理やり言われてつけさせられたな。

まあ、テレビは生活に必要なだからな。

しかもあの笑顔を見たら、どんな男でも「嫌」とはいえない…。

家に着いて、「ふはあ」と言いながら椅子に座る俺。

明日香は直ぐキッチンに向かい、鼻歌交じりで食事に取り掛かった。

その姿を後ろから見ている…。

その後姿がなんか色っぽくてなんかワクワクしている自分も居る。

けど、こういう状況になっても襲いたいとは全く持っていないし、男として失格なのか？

それにしても、明日香も明日香だ。

いくら天然だからって、初めて会った人とその日のうちに同じ屋根

の下で寝れるという無神経さ。

どいつが聞いても驚くに間違いない。

そっぴや明日香に一つ聞かなければ鳴らないことがあった。

「なあ明日香。明日香って彼氏いたの？」

突然の俺の問いにビクッとする明日香。

「前に一人だけ…かな？」

「へえーそう」

明日香程の顔の持ち主なら10人やそこらは普通に越していると思
ってたのに…。

まあ、そのぐらいが明日香の性格にはぴったりだな。

「どんな人だったの？」とは聞かなかった。

何故かは俺もよく分からないが、あのビクつき方では聞かないほう
がいいと本能が言っている

ような気がしたから。

それから1時間ちよい時間を掛けてご飯が出来た。

見た目結構。味結構のナイス料理だ。

というか、美味すぎる。

…今なら俺、ポエマーになれそう。

2 - 5 (前書き)

この話は、過去話となります。

俺は中学時代初めての彼女が出来た。

すごく好きで、死ぬほど好きで、俺は本気で恋をした。

あいつのことが好きで、会いたくて学校に行っているようだった。

そして、今俺は耳を疑う話を聞いている。

「え？　嘘だろ？」

俺は友達の亮平と喋っている。

「本当だつて！お前の彼女二股してるんだよ」

「まさかあいつが二股なんて…」

していない！　と断言したかった。

しかし、あいつの言動が最近おかしいのも事実。

俺と遊ぶ時間も少なくなつて、学校で喋る時間も少なくなつた。

今の俺にはしていないと断言できない。

「しかも…その二股の相手が…
みずの 水野 智也」

水野智也…その言葉を聞いたとき、もう何もかもが信じれなくなってきた。

そいつは俺の幼馴染でもあり、親友だ。

あいつらがそんなこと…。

と思いながら彼女に目を向ける。

智也と楽しく喋っている姿が目に入った。

亮平の噂は今まで外れた形跡がない。

100%外れない。

「この話も本当ということだ。

放心状態。

今の俺に合う言葉はこれしかないだろう…。

涙が出てくる。

その涙を拭く気力も残っていない。

そこまでして好きだったんだ。俺は…。

あいつを愛していたんだ。

場違いだろう。こんな場所で涙を流している俺は。

男泣きとは程遠い泣き方。気持ち。

胸が痛い。なんで痛い？

愛しているからなのか？裏切られたからなのか？

分からない…。

放課後、彼女と帰り道を歩く。

「今日、風紀泣いてたのぉ？」

「まあ…な」

いつもと同じ態度、言葉で接してくる彼女。

俺はそこまで好きなのか。

俺はそこまで愛してるのか。

何故お前は俺をここまで苦しめる。

お前は悪魔か。

お前は神なのか。

何故俺はそこまでお前に恋をしたのだろう。

「大丈夫…？」

彼女は小さく聞いてきた。

俺は何も答えられない…。

手に彼女の手が絡まる。

暖かくて、気持ちがいやすらぐ。

しかし、今の俺にはその暖かい手さえ冷たく感じるのだ。

「今日：お前の家に行つていい？」

「うん！ いいよ！」

笑つてこっちを向く彼女を抱きしめたかった。

そして、離したくなかった。

俺の元にいてほしい。そう思いたかったのだ。

だけど、今の俺にはそれをする勇氣すらない。

彼女のうちに着き、ゆっくりと彼女は家のドアを開く。

「今日は家に誰も居ないの。お父さんもお母さんも仕事で…」

そう言つて、俺を彼女の部屋の中に入れてくれる。

「じゃあ私は飲み物もつて来るね！」

そう言って部屋を出て行く、彼女の後姿を見送った。

携帯を残した彼女を…。

彼女のとは言え、勝手に携帯を除くのは罪悪感がある。

しかし、真実を知るために…ごめん。

携帯をゆつくりと開く。

メールボタンを押す。

…ロック。

あいつは大体、誰かの誕生日を入れるって言っていたな…。

暗証番号4文字。チャンスは3回。

まずは…彼女の。

「違うか…」

そう呟いた時にはもう違う誕生日を入れていた。

俺の誕生日だ。

お願い…これで開いてくれ！

「暗証番号が違います」と表示された。

まさか…。

そう思いながら次の番号を入れる。

「ロック解除」

そうやって、携帯の画面に表示された。

…まさかと思ったけど心の中では最初からこの番号ではないかと思っていたのだ。

智也の誕生日…。

放心状態に近い状態だが、まずはメールをみなくてはならない。

そこにはいくつかのフォルダがあった。

家族、女友達、男友達、薫、風紀、智也。

俺は躊躇せず、智也のフォルダを確かめる。

昨日のメール数、約120件。

メールの内容を見た瞬間、俺は一気に頭の中が真っ白になった。

何通も見た。

けど、こんなことが書かれているなんて…。

亮平が言っていたことは…事実なんだ。

そのとき、彼女が部屋に入ってきた。

その瞬間、彼女は飲み物を落しながらも、携帯を俺から奪っていった。

そのとき俺は本日2度目の放心状態。

彼女も放心状態のようだ。

その後、気がついたときには家にいた。

その日から彼女とは一言も喋っていない。

智也ともギクシャクした関係だ。

あの日から一度は智也に謝られた。

しかし、俺はその謝ってきた智也を殴ってしまった。

なんて酷いことをしたんだろうと今は思う。

あの女は俺にあるものを残して行った。

女に触られるとびくってなってしまう。

一部を除いては、女と普通に喋れない。

この二つを残していった。

しかし、高校一年生になる前、ある出来事が起きた。

その人とは初対面なのに、まともに喋れる。

俺が思うには何処かしら元カノに似ているのだろう。

だから普通に喋れたんだと思うんだ。

だけど俺は今…人に恋を出来ない体になっている。

2 - S (後書き)

今回の話で、風紀の体質が!! (、 ; A

女に触られるとびくってなってしまう。

一部を除いては、女と普通に喋れない。

…基本、女性恐怖症と思ってもらってOKです。

今、俺は晩御飯を作っている明日香の後姿をじっと見ている。

この風景は何故か懐かしい気分になるんだ。

料理にエプロン。料理中に鼻歌。

胸が痛む。頭が痛む。

ああ！ 痛い！！

「ふ、風紀？」

頭を抱えながらゴシゴシとしている俺に喋りかけてくる明日香。

「ん？」

俺は正常モードに戻り返事をする。

「あんまり見ないでよ」

いやいやお前が可愛いから。と冗談で言つつもりだったが、その相手は明日香。

恥ずかしくなって、明日香が料理をやめてしまつのは今の俺にはきつい。

「ごめんごめん。考え事」

俺はそう答えた。

「そっか。ご飯はあと少しだから待っててね！」

そっという明日香に笑顔を送った。

只今、同居してから約一ヶ月。

今のところは、学校にもこのことはばれていないし、噂好きの亮平もまだ気付いていない。

さすがに学校では「明日香の彼氏は風紀」という話は一応出ているようだ。

まあ、あの沙希っていう子が言ったんだろう。

あの日以来、いつも通っているあのスーパーでは生徒に会っていない。

あの沙希っていう子が言っていないとしても、俺たちは毎日登下校は同じ。

学校一可愛いといわれている明日香が、そんな行動をとっていたら黙っている男共はいないだろう。

因みにこの一ヶ月にはいろいろあった。

部活を決めるとき明日香が「一緒に部活にしようよ！」と言って、

少し変わった映画研究部に決まってそれにつられて亮平も入ってたし、

学校の裏投票では明日香が人気ナンバーワンに選ばれたという話を耳にした。

「はあ〜」と大きく溜息をつく俺。

「は〜い出来上がり〜!!!!!!」

そう言って、お皿に盛られたサラダとハンバーグを俺の前に置く。

「あとご飯と味噌汁ね!」

と言いながら、明日香はご飯と味噌汁を置く。

「ありがとう」

礼儀としてこの言葉は言っておかなくてはならない。

「さあ! 召し上げね!!」

前の席に座りながら明日香は言う。

「どう? 美味しい?」

「いやいや、まだ食ってないから」

「じゃあ早く食べてよ」

「へいへい」

ハンバーグを一切れお箸で切り、それを摘みながら口へと運ぶ。

ん…やっぱり明日香の料理は美味しい。

「…どう？」

上目遣いで言ってくる明日香に一瞬見とれてしまったが、正気を取り戻す。

「美味しいよ。なんか主婦みたい」

「本当に！？　ありがとう！！！」

それ以上褒めると明日香がよからぬ行動を起こしそうなのでそこらへんは流しておいた。

「どんな感じ？」

そう言って俺の箸を奪っていく。

そのとき、俺の手に明日香の手が少しだけ触れた。

ビクッ！

思わず後ろへと一步下がるような形になってしまつ。

「ほうしはのふうひ？」（どうしたの風紀？）

口にハンバーグを頬張りながら言うので少々何を言っているのか分からなかった。

「いや、なんでもない…。」

そういいながらもとの位置へと戻る。つてかその箸は俺のであつて、さっきそれは俺が使っていたのであつて…ということは

「おいおい！ 間接キスだぞ？」

間接キスである。

「なに？ 風紀恥ずかしいの？ 乙女だねえ」

「なに、おじさんみたいな事言ってるんだよ、お前。自分の箸で食べ！ 自分の箸で！」

そう言いながら、俺の箸を明日香から奪い返した。

「ちえっ」

と明日香の口から聞えたのは…まあ気のせいだろう。

それから俺たちはゆつとりとした時間を過ごした。

テレビを見たり、学校の話、友達の話など。

しかし二人とも過去の話には全く触れなかった。

「風紀！朝だよお！」

明日香の可愛い声が戸の向こうから聞える。

もう、このことが当たり前のようになってきた。

しかし、いつになってもこの声で目覚めるのは気分がいい。

さあ今日が始まる！

朝飯を明日香と一緒に食べて、学校へ向かう。

学校へ行く途中の道はあまり生徒が通らない。

殆どの生徒が電車で来ていて、そこからは自転車という感じだ。

まあ他の生徒と会ったとしたら校門前だろう。

教室まで明日香と同じ。

どんな運命をたどっているんだ俺たちは。

いつも通り、教室に入って30秒もしないうちに亮平が教室に入ってくる。

「おっはよお！ 今日も朝から元気ですな風紀君！」

我が右肩を強打。

昔から亮平は手加減というものを知らない。

「いったいなあ！」

「そうそう。風紀知ってる？ 3組の水越さんって…」

と、また亮平の噂話が始まる。

もうこいつの噂話なんて耳を通り越していくだけ。

全然頭には響いてこない。

しかし、その亮平も明日香のことは聞いてこない。

「風紀？」

明日香の呼ぶ声が聞える。

テクテクと歩いてくる明日香を眺めている。

「な、何？」

俺が正気に戻ったときには明日香は俺の前にちょこんと座っていた。

高校は制服なので、勿論スカート。

明日香はそこの不良よりかはスカートは長く、真面目ちゃんよりかは短い。

いわゆる、並みの長さ。

その明日香が俺の前にちょこんと座ると微妙にパンツが見えそうなのが見えない位置。

女の子の長年の経験なのだろうか？ 見えないようにしている。

「ちょっといい？」

そう言っただけの耳元に口を近づけて、小さく喋る。

ドキドキしまくりだ。

「あのね、友達が家に遊びに来たいって言ってるんだけど」

少しそのままの状態で無言。

椅子に座っていた無意味に俺は立ち上がった。

「その話は後でいいか？」

そう笑顔で俺は言っただけ明日香は大きく頷いた。

そして明日香は友達のところへ戻っていく。

さあ、どうしようなものか。

そついや学校では俺たちの住所はどうなっているのだろうか？

もし、同じ住所になっていれば、今頃はもうバレているはず。

まさか、学校がそんなことを認めてる？

そんなわけがないよな。

じゃあ、どうなっているんだ？

ああ！ 駄目だ。考えたら埒が明かない。

ここは、ばれていないことを喜ぶか。

「おい風紀！ 聞いてるか？」

亮平の声。

「え？ ああ、うん」

適当に答える俺。

「それでさあ風紀……」

また、亮平の噂話が始まった。

そして、今日の授業も全て終わり部活が始まる。

明日香と、俺と亮平で部室…というより、ある教室に入っていく。

そこはなかなかの大きさの教室で、普通の生徒には「特別教室」といわれている。

その教室の入ると最初に目に入ったのが映画研究部、部長の沢^{さわ}美^み保^ほ。

「こんにちは部長」と俺が言う。

そして、軽く頭を下げる俺たち3人。

「こんにちは明日香ちゃん！ 亮平君！ それと風紀」

部長、「それと」の意味は…俺はやっぱりおまけなのでしょうか？

そりゃ、亮平はイケメン組みに入るし、明日香は学校一可愛いですよ？けど「それと」は、あんまりでしょうが！

あと、俺だけ呼び捨てにされたのは気のせいでしょうか？

最後にもう一つ！ コレが一番大事。

…挨拶を言ったのは俺なのですよ部長。

教室の中に入ると、5名の部員がいた。

この映画研究部は11人で成り立っている。

映画研究部は、学園祭に自分達で撮ったやつを公開しているらしい。部員集めの部活紹介では、去年の予告を流しているらしい。

因みに、映画研究部になってからの初日は去年の映画を見せさせられた。

内容は、ある遊びが激しくなっていて人殺すのに至るというホラーな映画。

今時の高校生がそんなホラーを作るのだろうか？

やっぱり高校生といったら恋愛映画というイメージが強かったりする。

しかし、その映画はそこらへんに上映されている映画より素晴らしいものであった。

部活の大体は最近の映画の話をして終わっている。

帰りたいときには帰っていいが、一応、部活に顔を出さなくてはいいけない。

そっという決まりがある部活なのだ。

部室：「と言つか特別教室で俺達のはんびり、部活が始まる時間を待っている。

俺らがこの部屋に入ってから大体十分が過ぎた。

その間にサボリ癖の副部長を除いて全員来ている。

サボリ癖のある人を副部長にするというこの部活はどんな部活だろうか？

部活開始一分前となった時、特別教室のドアが開いた。

「こんにちは！ 金森先輩！」

と、俺と同じクラスで、映画研究部のムードメーカー山田幸助やまだこうすけが叫ぶ。

いつもこうして挨拶をしているのだ。

そして、先ほどドアを開いて入ってきたのが噂のサボリ癖のある副部長金森かなもり龍りゅう。

こう見えて、意外に素晴らしい作品を作る…らしい。

去年の作品の撮影を行ったのは前部長とこの龍先輩。

ほとんど、龍先輩の指示だったという噂だ。

しかし未だに信じられない。

あの、サボリ癖の面倒くさがりやの副部長、龍先輩なのだ。

何故か俺は龍先輩が入ってくるのを目で追ってしまっ。

「風紀どうした？ 何で龍先輩を目で追ってる？」

亮平にそう聞かれて正気に戻る俺。

「いや、あの先輩が…とか思って」

「へえ、そう。」

そう言っ亮平はまた噂話を始めた。

人の噂…亮平のは噂というより事実でしょう。

「そうそう、この学校で同棲している人がいるらしいよ。」

そのように俺の耳のなかに亮平の声が入った。

この話はすぐ頭に響く。

思わず俺は噴出してしまった。

「…ハハハ。まさかな」

「いやいや。これも確かな情報だっ！ まあ人物までは突き止め

ていないけど、

一緒に買い物している姿と、一緒に家の中に入る姿を見た人がいるんだってさあ。

けど、その人は遠い所から来た人らしくて場所まで覚えていないらしい」

…それって明らかに俺達だよな？

ど、どうしよう…。

と、言うか遠い所から来た人の話を知っているお前もすごい。

さすがは、噂話、成功確立100%の清水亮平。

侮れない。

「はい！ 部活始めるわよお！」

パンパンパンと手を叩きながら大きな声を出す部長。

みんなは『はい』と言いながら立ち上がって、前の方に並べられている椅子に座る。

「見たところみんな来ていますね？ まあそれならいいです。今日は、映画を見るので見たい人は残っていつてくください」

『はい』と言って部活終了。

いつも最後まで残って行っているのが部長と、俺達の一つ上の先輩で映画マニアの小川^{おがわ}光雄^{みつお}と、顔は亮平ほどでもないが、かつこいい組に入る、ただ映画が好きな俺らと同じ年の森下^{もりした}悠太^{ゆうた}。

俺も基本的には映画は好きなほうなのだが、明日香が「家に帰るゝ！」といつも駄々をこねているので、帰ってしまふ。

まあ、どっちでもいいんですけどね。

どうせ買い物とかで遅くなるし、普通の下校時間だったら誰かに一緒の家だということがばれてしまふかもしれない。

こついう中途半端な時間だと滅多に人がいないから安心して帰れる。

そして、今日も明日香と帰り道を歩く。

亮平は、電車通学なので俺達とは逆の方向。

俺達からは亮平にばれないようにしたいから都合がいいのかも…。

10分ぐらいで家に着く。

時々明日香とは寄り道して帰っているのだが、俺はそういうのが面倒なので寄り道だけはしないように説得している。

しかし、明日香のあの顔と上目使いで一発KO。

仕方がなく一緒についていってしまう。

なんて情けない男だろう…俺は。

いつもの通りマンションの4階まで上がって行って家のドアを開ける俺。

家に着いたらまず着替え。

着替えをしないで二人で買い物でも行ったら怪しまれるのは当然ことであって、学校にばれたら大問題。

ここまで心配するのはA型の特徴なのだろうか…。

まあ、明日香はおおざっぱだからO型だろう。

てか、のろまそうだからO型決定ね。

「風紀〜！ 早く買い物行くよ〜！」

明日香が俺の部屋の前で大きな声で叫んでる。

そこまで大きな声出さなくても聞えるって…！

ガチャッと自分の部屋のドアを開ける。

「じゃあ行こう〜！」

そう言っって明日香は財布（俺の）を持って玄関へと向かう。

「風紀遅い〜！」

手招きして目で「早く〜！」と訴えている明日香。

「…はあ。はいはい今から行きますよ。」

そう言つて靴を履き外に出る。

いつものコンビニへ向かう途中、明日香は何かを思い出したようにハツと頭の上にビックリマークが出た。

「そうそう。友達が家に来たと言って言っていたんだけどどうしよう？」

ああ、それね。今日の朝何か言っていたような気がする。

「ん…どうしようかね明日香さん？」

「どうしようかね、風紀さん？」

二人は歩きながら、考える人のような形をしている。

傍から見たら変な人だろうな。と思いつつもこの構え方はやめられない。

やっぱり考えている時。この格好なのだ。

「けどね…」

明日香が何か申し訳なさそうにこちらを見ている。

おいおい明日香様。もしや…もしや…

「友達に家の住所教えちゃったの。」

やっぱりかあ！！

「しかも遊べるよ！　って言っちゃったの」

…おい明日香。

「今日あの時俺は、『その話は後でいいか？』って聞いた後、大きく頷いたじゃんか！」

「あのときにはもう決まっていたり…」

じゃあ聞く意味ないじゃん…。

しかし、その言葉は俺の心の中に納まった。

それは何故かって？

明日香が今にも泣きそうな顔。そして泣きそうな声で「ごめんね。」と言ってくるから。

あの顔は犯罪級だ。間違いない。

そう考えながら頷く俺だった。

けど、どうしよう。

明日香の友達に住所を教えた。俺は友達に住所を教えられない。

ってことにならないか？

俺がもし、住所を誰かに教えてその人が何らかのきっかけで明日香の住所を知ったならば

…考えるだけでも怖いな。

「風紀く？」

明日香の可愛らしい声が聞えてくる。

「な、なに？」

「どうしたの？ ボーとして…」

駄目だ駄目。いつものように空想世界に入って、我を忘れていた。

「いや、何でもありませんよ？ 明日香嬢」

笑ってそういうと、明日香も笑ってくれた。

この笑顔が見られるなら何でも騙されそう。

そう思う俺。

完全に明日香の罠にはまっているな…。

そうとも思った俺だった。

買い物を済ませ家に帰る。

「うがぁ〜疲れたぁ」

買い物帰りのいつもの言葉を椅子の上で叫ぶ俺。

「今からご飯作るから待っていてねえ。」

エプロンを気ながらそういう明日香は若奥様に見えた。

「様になってるなぁ…。」

ついつい心の声が漏れてしまった。

「え？ 秋刀魚になってる！？ 私が！？」

超慌てて自分の体を確かめる明日香。

あいつはやっぱり…馬鹿のようだ。

「秋刀魚じゃない！ …二度も言うのは恥ずいからも言うわない！」

「なにそれ風紀！ 意地悪う！！！」

今回ばかり明日香のその顔に、負けてはならない。

俺は目を瞑って心を無にした。

「…もういいよ。まあご飯楽しみにしていてねー！」

そう言って、台所に戻っていった。

ふ、ふう、一件落着。

明日香の顔を見ると首が横に動かないからな。

あの顔で「教えて？」なんて耳元でささやかれたときには・・・。

って、俺はなんてエロイ発想をしているんだ！

駄目だ。空想世界へ行ってしまった。

ボーっと明日香を見ながらご飯が出来るのを待っている俺。

この行動は日常茶飯事。

最初は見られるのを恥ずかしかっていた明日香だが、最近ではもう何も言わなくなった。

ご飯が出来、皿に盛って俺のところへ運んできてくれる明日香。

この生活は一般男性なら天国のようなだろう。

まあ、下心丸見えですけどね。

俺だって女の子の裸に興味がないわけがない。

一応、男だからな。

明日香が可愛すぎて襲いたくなるときもあったさそりや。

しかし、女の体に触れたらビクツとしてしまうという一般男性から見てみれば地獄のような体質。

はあ、何で俺…。

箸でご飯を摘み、口の手前まで持ってきてぱくりとする瞬間で俺は空想世界へと行っていたようだ。

「風紀…大丈夫？」

明日香が心配そうな目でこちらを見ている。

「だ、大丈夫」

「風紀なんか今日ボーとしてるよね。熱でもあるの？」

そう言つて明日香の手が伸びてきた。

俺は思わず後ろへと下がる。

「ど、どうしたの？」

「いや、なんでもない」

そう言つて俺は定位置へと戻る。

それにしても俺は明日香を避けてしまった。

傷ついたかな…？

しかし、俺のその心配も虚しくいつものように自分の料理にベタ惚れしている。

ああ…俺の人生どうなるのやら。

「風紀くくく！」

いつものように、朝、可愛い明日香の声が聞えてくる。

だが、何かが違う…。

ガチャ。

「風紀くくく！」

部屋に入ってきたことだ。

俺の頭の中はこの後の光景は思い浮かぶ。

触られる。

そのように俺の頭は理解した。

必死に俺の体全てに布団を纏わりつけた。

「な、何！？」

予想通り、俺の体を揺らすため触れられる。

何とか間に合った。

そう心の中で安心している時、明日香の可愛らしい声が入った。

「昨日言うのを忘れていたんだけど、今度家に来る時友達が、明日香の彼氏と彼氏の友達も一緒について言ってたの…今さっき思い出して…」

俺の耳元で「ごめんね？ ごめんね？」と何度も繰り返して言う明日香。

って、おいおいちょっと待て。

「明日香彼氏いたのか!？」

その言葉が真っ先に出てきた。

「何言ってるのよお…風紀のことだよ!」

「え…俺？」

もしかして…俺たち付き合ってるのか？

そう思ったのもつかの間、明日香は俺の期待を裏切る言葉を…。

「みんな勘違いしちゃってるんだよねえ」

…ガビーン。

布団の中で大きく溜息をつく俺。

「それで、風紀友達2人用意しておいてね! 日時は明後日、日曜

日の12時に私達の家だから」

…っておい。

「まさか、俺の何の了解もなしにこんなことまで決まっただのか？」

「うん！」

流石天下の明日香。誰にもこいつを止めれないだろう。

「…はあ。2人も用意するのか？ そんなに…」

考える俺。

やっぱりその姿は考える人の構え。

一人はぱつと浮かんできた。

清水亮平。

俺の幼馴染だし、学校での友達って言ったらそいつしか思い浮かばない。

亮平は昔から「女が居る。」と言ったら遊ぶ確立100%だから、まあ間違いなく来るだろう。

あと、一人…。

「と、言うか風紀。あんまりゆっくりしていると学校に遅刻しちゃ

「うよ？」

「え？」

時計の方に指を指す明日香。

その指をどんどん追っていくと只今の時刻が分かった。

「…8時25分」

そう呟くと俺の行動はただ一つ！

「…明日香！早く出て行って、制服にきがえろお！」

手でしっしとしながら明日香を追い出す。

着替えて学校の準備。

トイレを済まして、明日香を待つ。

「…遅い！」

只今の時刻8時33分

学校にはホームルームが始まる8時40分までには着かなくてはいけない。

ダッシュで行けば4分30秒で着くが、あの明日香のスピードだ。

何分掛かるか分からない。

「ごめんごめん、支度してて…」

焦って着替えたみたいで少し制服が乱れてる。

明日香が俺より先に玄関へと向かう。

その後姿を見ると、明日香のスカートが曲がっていてパンツが見えている。

「あ、明日香…」

俺は咄嗟に後ろを向く。

「何？」

全く気付いていない様子。

「ス、ス、スカートがめくれてるぞ…」

「嘘おゝ！」

必死でスカートを直す明日香の姿が目に見え浮かぶ。

学校一可愛い明日香のパンツを朝から見てしまった…。

水色の点点が微妙に入っているパンツ。

「ぐお…」

何故かそういう風に口から言葉がこぼれてしまう。

男の自然現象が起きてしまったのだ。

朝からとは…情けない。

「風紀のエッチィ」

まあ…この自然現象は明日香にはれないでしょう。

そう思って俺も玄関に向かう。

靴を履いて、さあ学校へ！

そう思った瞬間の時刻8時35分。

俺が普通に走ってギリギリ間に合う距離。

ダッシュの準備をして走り出す俺。

「これじゃあ、間に合わないね」

後ろのほうからそのような声が聞えた…。

学校に着く。

「おい、お二人さん。二人仲良く遅刻の登校か？」

先生が冷やかしてくる。

「ち、ちがつ」

違いますよー！　って言おうとしたのだが明日香の声が俺の言葉を遮った。

「そうなんです。いいでしょ！」

こいつは…小悪魔か？

「や、やめろって明日香！」

教室では「ヒューヒュー」という声があちこちから聞える。

「若いね…お二人さん」

そう言っただけ俺の肩にポンポンとしてくる先生。

普通に走りすぎているならこんな風にはなっていないかったんだ。

あの時俺は明日香をおいていくことも出来ず、いつもどおり歩いて学校へ向かったのだ。

そして今この状態。

「確実に勘違いされてるな…」

冷やかされるホームルームも終わり、俺は椅子に座って、机の上に頭を乗せてぐったりしている。

明日香はいつものように、女友達とわいわいがやがや話している。

「平和だねえ……」

俺の今の心の声は全て口から吐き出される。

「よっ、風紀！」

そう手を上げて挨拶してきたのは幸助だった。

「おはよう……映画研究部のムードメーカー山田幸助」

「何でそこまで長く俺を紹介するんだ……」

それでどうした？朝から元気がないじゃないか！ラブラブ登校してきたのに！」

「ラブラブねえ……」

「俺たち男から見たらあの光景は夢のようだぞ？しかもあの明日香ちゃんと来た！あんな彼女持つて風紀は嬉しいだろ？」

「そうですねえ……って俺たち」

付き合っていない！と言おうとしたのだが今日二回目の遮り。

「俺も彼女がほしい！」

幸助が俺の元でそう叫ぶ。

…ピコン！

俺の頭の上にビックリマークが存在したのが分かった。

「おいおい。お前頭の上にビックリマーク出してどうしたんだよ？」

… 幸助見えているのか？

「明後日さあ 幸助暇？」

「え？ 暇…ですねえ」

「じゃあ俺と遊ぼう！ もれなく女子もついてくるから！」

「え？ 女子も？ 行く行く！ 何時に何処集合？」

ワクワクな顔しているなこいつ。

幸助は女好きと見た。

「じゃあ、明後日11時45分に学校校門前集合で。」

「アイアイサア！」

自衛隊の格好とでも言える格好をして俺たちの会話は終わった。

次は亮平だな。

昼休み。予想通り亮平は俺の元へ。

「おいおい。風紀今日遅刻したのか？」

「まあな。寝坊して」

「おまえの寝坊癖は今に始まったことじゃないが…」

そう。俺は中学時代、寝坊しすぎの問題児だった。

「それで亮平。明後日暇か？」

「明後日…誰が来るの？」

「幸助と女子3人」

「女子！」

明らかに女子のところに反応する亮平。

「そうそう。で遊べる？」

「勿論！」

「じゃあ学校校門前に11時45分に集合で」

「分かった！！！」

それからは亮平の噂話が始まった。

因みに亮平の趣味は当然人間観察だ。

「おゝい朝だぞ！ 明日香！」

只今俺は明日香の部屋の前。

あの、運命の日曜日の朝10時27分と言うのに、明日香は一向に起きてくる気配はない。

かれこれ、ここに居るのも20分ぐらいたつか…。

明日香の部屋に入ろうとノブに手を差し出したこともあった。

しかしここは明日香の部屋。女の子の部屋なのだ。

ここは礼儀として、何の了解もなしに入るのはいけない。

「明日香〜〜！」

ドンドンと戸を叩く。

諦めて呼び続けるのをやめようとも思った。

しかし、もし俺がほっておいて時間が来てしまったら大惨事。

リビングや、靴等俺のものはどこかに隠さなくてはいけない。

それに俺の部屋に入れないようにもしなければならぬのだ。

「おーい、明日香起きろって!」

ドンドン戸を叩いていると玄関の扉が開くのが分かった。

「ただいまあ!」

明日香の声だ。

「…何しているの風紀?」

明日香の戸の前でドンドン叩く形になっている俺を見て不思議になったのだろう。

「い、いやなんでもない」

もしかして俺、誰もいない部屋に呼びかけていたのか?

…恥ずかしい!!!!!!!!

「風紀、これお昼ご飯の用意」

そう言われてビニール袋を渡された。

「おう…って違う! それも大事だけど、俺の所持品をどうにか隠さなくちゃいけないんだよ!」

「…風紀の部屋に隠せばいいじゃん?」

「お前なあ…見られたらどうすんだよ」

「ん〜じゃあ見られないようにすればいい!」

そう言っつて、明日香は物置からガムテープを取り出した。

…まさか。

「これで風紀のドアを封鎖しよう!」

そういつてガムテープをビリビリっと伸ばして、ビリッと切った。

「っておいおい! ちょっとまで! まだやるのは早いって! しかもそのやり方! 明らかに不自然じゃないか?」

「…それもそうだね」

一応納得してくれたようだ。

あんなもん俺のドアに張られたら跡が残って嫌だからな。

溜息をつきながらなんとか俺が居ることを隠すことをしている俺。

明日香はご飯を作っている。

「よし! これでOK!」

自分のドアの前に立って頷く俺。

「どれどれ?」

と、言いながらパタパタ音を立ててこちらへ向かってくる。

「…へ？」

それがこの部屋を見た明日香の第一声だった。

「た、立ち入り禁止…。入った奴は私が殺すよ　って私のガムテープ作戦とそんなに変わらないじゃん！」

「はあ？　何言ってるんだよ？　明日香の『　』は読者にも男子にも最強だぜ？」

「…まあね」

いやいや認めるなよ。

「よし。まあ箆笥も移動させて、俺の部屋に入れないようにしたからまあOKか。」

「風紀どうやって出てきたのよ！」

「俺は、ベランダをつたって、隣に部屋に行って説明してこちらに戻ってきた」

そう、俺の部屋はベランダがついていて便利なのだ。

只今の時刻11時30分。

「うん。いい時間だな。では今日はあくまでも俺は客だからな？　分かってるよな？　絶対にボ口を出すんじゃないぞ？」

「分かっております！ 風紀大佐」

「ではわしは… ってどんな乗りだよそれ！」

「あはははは。風紀面白い！！」

「はあ…。まあお友達を向かいに行って来るから」

「いつてらっしゃい」

そう言って明日香は俺に手を振る。

「いつてきまあゝす。」

俺も手を振る。

よし！ 学校の校門にレッツゴー！

テクテクと道を歩いていく俺。

今日はどうなるのかな？

明らかにバレたらヤバイ。

…すごく心臓がバクバク言っている。

明日香のO型的な性格とは違って、俺はA型的な性格。まあA型なんですけどね。

あの無神経な親からこんな子が生まれるなんて信じられない。

溜息交じりで亮平と幸助を向かいに行く。

学校に着いたらそこには亮平と幸助二人ともがいた。

「あれ？お前ら早いな…」

「いやいや、お前が遅いんだって！ 普通10分前に来るだろ？」

亮平が俺の元に近寄りながら言う。

その後に続いて幸助が言葉を放つ。

「それで、女子の姿が見えないが…？」

亮平も頷いている。

「まあ、付いてこれば分かるさ。」

そう言つて俺は来た道に戻る。

「本当に女子が居るんだろうなあ？」

幸助がしつこく聞いてきた。

相当女が好きなんだろうな。

「ああ。だって今から女子の家に行くから当たり前だろ？」

「え〜！？ 女子の家？ もしかして…あの明日香ちゃんの家？」

「ピンポーン」

俺は親指を出してグッとやった。

「あ、あの明日香ちゃんの…」

まあ俺の家でもあるんだけどね…。

男三人虚しく道を歩く。

「男を家に呼ぶってことは…OKなんだよね？」

女好きの幸助が聞いてきた。

「…は？ 何が？」

この俺には何がOKなのか理解できない。

「だから…エッチなことか…。」

…エッチ？

「んごお！ そんなわけないだろう！？」

「で、ですよね？」

ちよつと幸助が落ち込む姿が見られた。

あいつは…エロか？

幸助と出会って一ヶ月ちょい。

俺の中であいつはエロの一言でまとめられそうになってきた。

「…やけに亮平が静かだな？」

「え？ 考え事してたから」

「へえ〜。」

そのまま沈黙。

沈黙のまま1分足らずで明日香のマンションに着いた。

まあ、俺の家でもあるのだが。

「こ、ここが明日香ちゃんの家…」

家の前でワクワクモードに入っている幸助が呟く。

亮平も早くしよう！ というのが顔に出ている。

ピンポン！

俺がインターフォンを押した。

「はい。」

明日香の可愛い声が聞えてきた。

「俺、風紀だけど」

「あがつてえ！」

そう機械の向こうから聞えたのでドアをガチャッと開ける。

俺たちが着いたときには、もう明日香の友達がいた。

「おじゃましま〜す」

一応、今は客人。

この程度の挨拶はしなくてはいけない。

後に続いて二人も「おじゃまします」と言いながら入ってきた。

「うわぁ…女の子っぽい家」

そう幸助が呟く。

そうか？ 俺にはシンプルにしか見えないんだけど。

「沙希〜お皿とって！」

明日香はまだ料理をしているらしい。

沙希って言うのはあのコンビニであつた友達か。

「はいはい〜」

と言いながら面倒くさそうに椅子から立ち、皿を取りに行く。

男子集団といえば、リビングの入り口で立ち往生。

これが、女と男の権力の差なのだろうか？

「ねえ明日香。このお皿誰の？」

そう言って沙希が取り出したのは俺の皿。

明らかに男物だ。

「えっとそれは…」

明日香、躊躇するな！

「お、叔父さんの…」

…なんで叔父さん。

「そつか。じゃあ使っていいわね」

って沙希って言う子もなに納得してるんだよ！

「えっと、その男集団！ そこらへんにでも座ってろ！」

沙希はそう言っつていつも俺が愛用しているソファ―に指を向けた。

「え？ ああ、はい」

亮平が返事をして俺たちはピシツとしながら座る。

「風紀！ お茶とご飯を準備して！」

「はいはい」と俺はソファーから立ち、コップ6個と皿6枚出して、ご飯を盛る。

すると明日香の隣で沙希が喋っているのが聞えた。

「…ねえ。風紀君ってすごいね」

「え？ 何で？」

「だって、明日香の家のもの殆ど知っているじゃん。ほら、コップの位置とか、しゃもじの位置とか？」

*しゃもじ＝ご飯を盛るもの

「まあ…あそこらへんにあるのが普通なんじゃない？」

何とか誤魔化してくれたようだが、危なく皿を落とす所だった。

大丈夫か？ 今日一日…。

「うわぁっ！ これマジ美味っ！」

明日香の手料理を頬張りながら、幸助は言う。

「本当だよねえ」

その隣に座っている沙希が言った。

明日香はなんだか照れていて、顔が赤くなっている。

なんだか可愛らしい。

「そうそう、まだ紹介しなかったわね」

沙希がご飯を食べるのを食べて隣に居る女の子を紹介する。

「この子は私と同じ中学校で……」

沙希の言葉を遮るように亮平は言った。

「3組の五十嵐 いがらし 五十鈴 いすず ちゃんだろ？」

「え？知っているの？」みたいな感じの顔をしていて幸助が亮平の言葉に言葉を足した。

「だって、その子映画研究部」

「え〜〜〜！ 五十鈴って映画研究部だったの!？」

「え？ ご、ごめんね…わ、わ、忘れてた…」

「まあ、五十鈴のことだから言う機会がなかったんでしょっね」

…沈黙。

「あ、明日香ちゃんの料理は美味いよな？ な？」

と、幸助が俺に向かって言ってくる。

「え？ あぁ美味しいな」

パクパクと箸が進む。

「そういえばお二人さんっていつから付き合っていたの？」

沙希が箸で俺と、明日香の方を指して言う。

「俺らはそういう関係じゃないんだけど…」

「そうそう。そういう関係じゃないよ!」

俺と明日香は二人で沙希を攻める。

「けど、この前一緒に買い物してたわよね？」

ギクッ! ! ! ! !

ここでコレを言われると亮平に…。

「へ？ そうなの？」

ほら、やっぱり亮平が話に乗ってきた。

「いや、ただあのスーパーでたまたまあっただけで…な？
？」 明日香

俺は明日香に助けを求める。

「そ、そうだよ！ たまたまだよね？」

俺達二人は確実に…冷や汗をかいているだろう。

その話もそこで終わり、ご飯も食べ終わった。

次は外に行こう！そう俺が言おうとした瞬間。

「明日香…何で洗面所に、歯ブラシが2個置いてあるの？」

いちいち五月蠅い沙希が明日香に聞いている。

「えつとねえ…私が二つ使っているから？」

「そ、ならいいんだけど」

沙希はそういった後俺の方を見てニコツと笑った。

…こいつは只者じゃない。

その笑みを見た瞬間そう思えた。

「次どうする？」

明日香が俺に聞いてきた。

これはチャンス！

「外に行かないか？」

俺がそう言つと後ろから幸助の声が聞えてきた。

「えゝ！ せっかく明日香ちゃんのうちに来たのに…」

「幸助は黙っていなさい！」

幸助をにらみつけるように俺は言う。

ここにはもう居たくない…。

だって、これ以上ここに居たら沙希にばれてしまう。

「私は、幸助君の意見に賛成！ 五十鈴もそう思うでしょ？」

沙希が手を挙げながら言う。

「沙希ちゃんがそういうなら私も！」

おいおいお二人さん…。

「亮平は外がいいよな？」

亮平なら…頷いてくれるはず…。

目で訴える俺。

しかし、亮平はそんなことも知らず、「中がいい」とかい出した。

うおーい！

明日香は当然俺の意見に賛成。

「何で二人はここが嫌なのさ」

沙希が俺たちに向かってそう言うてくる。

…痛い質問だな。

『俺がここに住んでいることをバレたくないから！』とかいえないし、変な嘘は逆にそう言うていることになる。

ここは一つ後ろに引くか…。

「まあ、外の方が楽しいと思って…みんなが中がいいなら中でいいけど。」

俺の部屋は一応開けられないようにしてあるし、このリビングに居れば、まずばれることはないだろう。

それから俺達6人は明日香の家…じゃなく俺たちの家で色々な遊びをした。

何故か合コンに近い遊びばかり。

王様ゲーム。

まあ俺は女の子と接触することもなく、無事王様ゲームを終了した。

その次に俺を待っていたゲームは…トランプ！

接触しなさそうないいゲームだ。

最初はばば抜き。

俺を取る人は明日香、俺が取る相手は亮平となっている。

一応、明日香との距離は70センチといった所だろうか？

そうでもしないと、触れてしまうから危険地域。

亮平の方にかなり寄って座っています…。

このばば抜きは特別ルールがあつて、声を出してはいけない、カードの順番を一回一回変えなければならないというルール。

何故か分からないが沙希が決めたルールなのだ。

そして、明日香が隣の五十鈴を取るといところまで順番が回ってきた。

ぱっと明日香がカードを取ると一瞬だけ顔が曇った。

…ババを引いたな。

明日香がそのカードを入れて下に隠してカードの順番を変える。

真ん中少し右より注意。

俺の頭がそう言っている。

少しカードを上挙げて俺に取らせようとしている。

…コレがババか？

それともフェイク…。

明日香の手持ちのカードは全部で6枚。

そのカードがフェイクだとしてもババを引く確立が5分の1。

…俺は一番右のカードを引いた。

「…。」

ババ。

明日香は少し笑いそうになって、下を向いた。

クソッ。

あいつ俺の心でも読んでいるのかよ…。

そして、俺はカードの順番を変える。

ババの位置、右から二番目。

亮平が一番右のカードを引こうとした。

そのとき俺はニヤツと笑みを作ってフェイクをかける。

亮平は俺の表情を見たのかその隣のカードをいつきに引いた。

クククク引つかかったな。

それは…ババさ。

亮平の顔がすぐ悔しそうに見えるが、誰も亮平がババを引いたとは思っていない表情。

意外とこのルールはスリルがあって面白い。

最終的にババを持っていたのがこのトランプをしようと言い出した沙希。

最後まで俺は沙希と残っていたのだが、心理戦で勝ち抜いた。

3度交互しながら渡ったのだ。

その後も、大富豪、7並べ、ダウトなどをやった。

そこでトランプ遊びは終了！

その後は皆疲れたようで、違うことをしている。

俺は今にも自分の部屋に行きたいが、いけない…。

明日香は沙希と話しているし、亮平と幸助は互いに話している。

俺が五十鈴ちゃんに話しかけられるワケもなく、ただボーとしている。

しかし、最近では喋る方は大分出来るようになってきた。

どこかの不良とかは全く無理なんだが…。

「風紀く？」

明日香が俺を呼んでいる。

「ん？」

「私達、私の部屋…じゃなくて部屋に行っているから！」

「え？ 俺も行きたい！」

女の子の部屋に上がろうとする何も考えていないやつは幸助。

「…別にいいけど？」

そう答える明日香も明日香だ。

あいつは「男が危険」とは思っていないのか？

む、む、無防備すぎる…。

「じゃ、早く行こうぜ！ な？ 風紀」

と、言って俺の袖を持ち、俺ら男集団まで明日香の部屋に入ろうとしている。

「いいのか明日香？」

一応紳士な俺は明日香に了解を取る。

「別に入ってもすることないけど…」

そういえば、俺は今までに完成した明日香の部屋に一度しか入ったことがない。

その一度とは、テレビの付け替え。

あの時は二人っきりで同じ部屋にいたからドキドキしたが、今度は6人も居るんだし…大丈夫でしょう。

「…おおすげえ」

またしても幸助が呟く。

別にそれほどすごくないような気もするのだが、気のせいだろうか？

棚の上には人形が置いてあって、机の上には勉強道具が少々。

テレビは最新のテレビ。

まあ、それはすごいか。

簡単に言つと一般の女の子のような部屋。

ポスターとかも張っていない。

学校一美女だからと言っても普通の女の子と変わらないのだ。

なのに、幸助は「…おおすげえ」なのだ。

可笑しい。可笑し過ぎるぞ幸助。

お前はやはり女好きのエロだな。

「何、お前…俺を見てニヤついてんだよ」

だって、幸助が可笑しいからしょうがないじゃん。

「なんか明日香の部屋…シンプルだねえ」

そうそう。沙希のような言葉があっているのだ。

シンプル最高！

何故か分からないが俺は心の中でそう叫ぶ。

「まだ引っ越してきたばかりだからねえ」

明日香が笑いながら言っつて、自分のベットに座る。それにしても、明日香の部屋は意外と片付けられている。

O型（俺が勝手に決めたのだが）の明日香は大雑把だともったのですが。

「結構広いね…」

亮介は周りを見ながら俺に呟いてきた。

「だな…」

はつきり言っつて俺の部屋より大きいかも…。

「いいなあ。俺もこれぐらいの部屋欲しいし！」

亮介は目を輝かしている。

それほど、この大きさの部屋が欲しいのですか…。

「そついや俺、風紀の新しい家に行っていないよな？ 今度行ってもいい？」

亮平が欲しいし！ の後に付け加えていった。

「家は無理！」

「何で？」

「まだ…色々あつてね」

「そつか…ならいいけど」

そう言つて亮平は机の方に歩いていった。

「まっ、私の部屋はこんなものだからね？ 6人もこの部屋には…きつくない？」

明日香が俺に目で合図をしてくる。

ん？

ああ、この部屋からはもう出て欲しいよ合図か。

よし。俺は明日香のために一役買つてあげようではないか。

「そろそろリビングに戻らない？」

俺は明日香に言った。

すると沙希が俺に向かって「何で？」とちょっと怒り口調で言う。

「だって…ほら、幸助が興奮してきてるから…危ないだろ？」

「お、俺は興奮なんかしていない！」

ふっ…ごめんよ幸助。

一応、本当のことだから我慢してくれ。

「それなら大丈夫！ 五十鈴は殴り合いなら強いから」

…あの天然でよく分からない五十鈴が？

殴り合いで強い？

「昔から…空手と、合気道と、柔道習っていたの…」

外見普通。足の細さ普通。腕の太さ普通。

…何処からそのような光景が思い浮かぶ？

「だから大丈夫だよ」

そう言っつて沙希は俺に向かってVサイン。

…やっぱり危険人物。

何を考えているか分からないな、沙希は。

しかし、まだ明日香は俺に目で出ようと訴えている。

この沙織を乗り越えろというのか…。

「じゃあ…俺外に出てるわ…」

そう言って俺一人外に出た。

そうした方がよかった…訳ではなく、ただ単にあそこに居たくなかっただけ。

女3人が居るあの部屋にあれば以上いたら頭がバグってしまう。

中ではどうせ「乗り悪いなあいつ」とか沙希が言っているんじゃない…。

お茶を自分で注いで、ソファに座り、グダーとしている俺。

それから2分後、亮平が出てきた。

「よっ」

「おお亮平。お前が一番に出てきたか」

「何かあそこには居づらくてな…」

頭をぱりぱりかきながら言っている。

「それにしても、風紀は自分の家のようにくつろいでるな」

「…へ？」

思わず、いつもより１トーン高い音で返事をしてしまった。

「…だから、自分の家のようにお茶を勝手に入れて、ソファアの上でくつろいでるよな。って言っているんだよ」

…まさにその通りだな。

一人だからついつい油断をしてしまった。

この風紀・・・不覚。

「まあ、俺は別にこういうやつだから」

無理やり笑みを作って俺は言う。

「それもそうだな」

納得したようで、俺の隣にズシッと座る。

少しばかり納得されるのも嫌なのだが。

ソファアで噂話ではない話を俺たちがしているとき、五十鈴と沙希と明日香と幸助が出てきた。

亮平が出てきてから約５分。

幸助は一人で何をされていたのだろうか？

それとも、幸助は何をしていたのだろうか？

…謎だ。

明日香はこちらを見ながら笑ってくれた。

その顔に見とれてしまって、亮平との話も中断。

全く頭に入ってこなくなつた。

さすがは学校一可愛い女の子。

俺もその笑いに笑みを返した。

…只今の時刻6時。

高校なので家が遠い子も居るからそこで今日は解散した。

俺は一応外に出て、五十鈴、沙希、幸助、亮平とは逆の方向に歩き出だした。

こうでもしておかないとあそこまで沙希に疑われたんだ。

大丈夫なわけがない。

一応近くのマンションに入るふりをして、4人が行ったのを確認した後、明日香の家…じゃなくて、俺たちの家に戻っていった。

エレベーターで4階まで上がって、405号室まで行く。

ガチャと勢い良く、ドアを開けると明日香の声が聞えた。

「おかえり〜〜〜！」

…なんか嬉しいな。

「ただいま」

俺はそう言っただけで家の中に入る。

「今日は疲れたねえ〜」

「本当に…」

笑いながらそういう俺達。

それからは今日ばれそうになった危なかった話や、幸助が男子一人で明日香の部屋に残っているときの話をした。

あの時幸助はじつと明日香たちの行動を見ていたらしい。

…ある意味危険な男だな。

「じゃあ俺は一回部屋に戻るから」

と俺は言って、自分の部屋を開けようとした。

ゴン。

鈍い音。

そうだった…箆笥をドアの前においていたんだっけ。

隣の家に行かなければならないのか…。

はあ。と一度溜息をついた後、俺は隣の部屋に頼みに行った。

ちゃんと許可を取って、俺の部屋のベランダに侵入。

窓はちゃんと開けておいたのですんなりと入れた。

「…面倒くせ」

その言葉が部屋に入ったときの最初の言葉。

そのわけは…。

部屋中に、リビング等に置いてあった私物が散乱しているため。

その部屋を直すのに1時間以上掛かったのは言うまでもないな。

あの明日香の家（俺の家でもあるが）を訪問しよう事件が終わってから、ばれそうな雰囲気はなかった。

沙希からは少し目をつけられていたが、俺たち二人が同居しているとは誰も思わないだろう。

あれから大きな事件もなく、高校生初めての夏休みがやってくる。

と言つか、明日から夏休み。

俺の親は夏休みでも家には帰ってこないだろうし、俺も会いに行くことは全く持って思っていない。

「風紀、私ね」

明日香と一緒に晩御飯を食べているとき、ふと明日香が言った。

「ん？」

俺は聞くつもりだが箸は止めない。

「私ね、夏休み少しだけ実家に帰ろうかと思っているんだけど風紀どうする？」

いや、どうするって言われても…何が？

「…どうするって？」

一応聞いてみる。

俺の頭の中では『一人でやっていけるのか?』を聞いているんだと
考えているのだ。

「だから、一緒に実家に行くのかって事。風紀、夏休み映画を撮り
に行くまで暇なんでしょ?」

そうそう、夏休みに学園祭で発表する映画を撮りに行くから、8月
から部活があるのだ。

台本は部長と、龍先輩が作っているらしい。

…どんな話になるのか?

って、違う~~~~~!

俺が何で明日香の実家に行かなければならないのかって言う話なの
だ。

「…え?何で?」

考えている最中に漏れた言葉。

「何でって…私の同居している子も一緒にいらっしやいってお母さ
んが言っていたから」

「…へ?」

「…へ？　じゃないもう一度説明しなきゃいけないのお？」

面倒くさそうに言おうとしている明日香を無視して俺は喋り始めた。

「だ、だから同居している人が男って親に言ったの？」

これで、俺の雰囲気を読んでくれ！

「…一応言っただけど？」

…本当ですか明日香さん？

普通の親なら「男と一緒に住んでいるの！？　そこにはもう住まないで、家に帰ってらっしゃい」とか言いそうなもんだがな…。

「明日香のお母さんは何て言っていたの？」

「『明日香ちゃんと男の子と一緒に住んでいるの！？　その子連れておいで！』って言ってた。すごい乗り気だったよ」

明日香それは本当か？

もし本当だとしたら俺の親並に無神経だ。

けど、その親から明日香が生まれてきたのは、納得できるような…。

「何考えてるの？」

明日香が不思議そうな顔でこっちをジーっと見てくる。

…あまり見られると恥ずかしいって。

「それでどうするの？ 私の実家に来るの？」

まあ、暇だしな。

「明日香はどっちがいい？」

「私は来て欲しいな」

にこ〜って笑ってそう言ってくる明日香。

その顔を見たら俺に迷いはない。

「じゃあ行こうかな」

「わかった！ お母さんに電話しておくね！」

そう言って、自分の携帯を取り出した明日香は電話を掛けた。

「もしもし明日香だけど。…うん。元気だよ！ それでね？ 風紀君が来てくれるって！ そ

うそうあの噂の風紀君。…わかったあ」

明日香の指が電源を切る場所に持っていかれ、ピツと音が鳴った。

…今、俺の事『風紀君』って呼びましたね？

それに、噂の風紀君って何だよ…。

俺は噂になっているのか？

「明後日からいらっしやいって言ってたよ。お母さんすっごく楽しみにしてそう」

「…そうなんですか」

今の俺にはこれしか答えられない。

「それから実家には4日間いるからね」

「…そうなんですか」

って4日間もいるのか！？

「あとね…沙希も来るの」

「…そうなんですか。って、えゝ！ 沙希も来るの！？」

「だから、風紀も一人ぐらいなら道連れにしてもいいよ」

道連れって…そんなに危ない所なんですか？

「じゃあ亮平にでも頼んでみるか」

今回も女の子付きなので、一応来るには来るでしょう。

俺はご飯を食べ終わってから亮平に電話した。

「女の子が来る。」といった瞬間「いいよ」と返事が。

さすが、噂、女好きの亮平。

待ち合わせ場所は一応明日香の家になった。

明後日が怖いな。

てか…明日香のお母さんは知っているんだよね？

ヤベ。

これは人生最悪の危機かも…。

明日香のお母さんが「風紀君と明日香は同居しているんだよね？」とか亮平と沙希の前で言われたときには…。

考えるだけでも怖いな。

「あ、明日香…」

リビングでくつろいでいる明日香に言う。

「何？」

「一応お母さんに口止めお願い。」

「何の？」

明日香は全く分かっていないらしい。

「だから亮平や、沙希に俺たちが一緒に住んでいることをさ」

頭の中で今の会話を整理しているのか分からないが、少し間があった後「わかったあ」と返事が返ってきた。

まあ、一応大人だからそこらへんは分かってくれるよな。

いくら明日香のお母さんでも。

もう、あの時みたいな危機はできれば味わいたくなかったのに。

嫌だなあ…。

3 - 1 (後書き)

本日は、三話更新です。

「遅いよ風紀！」

大きなカバンを片手に明日香が玄関で待っている。

「ちょっと待ってって！」

大慌てでカバンに荷物をつめる。

「早くしないと、沙希と亮平君来ちゃうよ？」

「ああ分かってるって！ あと少し！！！」

最後に着替えの服を入れて終了！

「よしOK！」

そう言っで、俺は自分の部屋のドアを開けた。

玄関で靴を履いているときに家のインターフォンがなった。

「やへ……」

思わず俺は声を漏らしてしまう。

「はいはい！」

そう言っで明日香が玄関のドアを開けた。

やはり、そこにいたのは沙希と亮平。

「風紀は早いわね」

「沙希も早いではないか」

「はいはい。早く行こう」

そう言っただけで俺たちの会話を止めたのは亮平。

「じゃあ行く？」

明日香がみんなにそう聞いて俺たちは頷いた。

バスで20分。

電車で1時間半。

バスで25分。

徒歩10分の合計2時間25分で明日香の実家に着いた。

田舎って言えば田舎か。

俺たちが今住んでいる所よりは田舎って感じた。

少々山があるが、別に不自由って言うわけでもない。

「ただいまあゝ」

明日香が一番に家の中に入って行った。

明日香の家は田舎のような木製で、中は結構広い。

俺たちが住んでいる所よりかは、はるかに広い。

家の中からドドドドと誰かが走る音が聞える。

「おかえり〜明日香!!!!」

その足音の正体は明日香のお母さん。

はつきり言つて…美人だ。

明日香が15歳と言う事は絶対30歳は超えているはず。

しかし、見た目は20代と言っても誰もわからないだろう。

「えっと、こちらが私のお友達」

俺たちのほう方を見て明日香がお母さんに紹介する。

「それで、それで噂の風紀君は？」

「噂の風紀君はこちら。」

明日香が俺の方を凝視する。

「こゝ、こんにちは」

俺は軽く頭を下げる。

何気に緊張。

やっぱ、初めて会う人とは緊張するな。

「ウフフ。まああがって、あがって!」

お母さんが笑いながら言うもんだから、冷や汗が出てきてしょうがない。

さっきは『同棲してる風紀君』とか言われるのかと思った。

明日香のお母さんの顔が、ニヤついているのが本当に怖い。

最初に俺たちが向かったのは泊めてもらう場所。

明日香の部屋の隣の部屋が空き部屋ということなので、俺と亮平はそこに布団を引いて寝ることになるらしい。

只今の時刻、15時。

「風紀! ちょっと!」

今、寝所に居る俺は明日香の声がドアの向こうから聞えてくるのが分かった。

「何?」

そう言つて、亮平を一人残して部屋を出る。

「お母さんが私と風紀だけで下に来てつて…」

少し心配そうな顔をしている明日香。

「分かった」

そう言つて明日香と一緒に1階へ。

ズズシと階段を下りるときに鳴る音。

これは破れないよな？

そう思いながらそつと階段を全て降り終えた。

それからは明日香の後ろについていく。

「こゝ、こんにちは」

リビングに着き、目の前に居たのがやはり明日香のお母さん。

「こんにちは。いつも明日香がお世話になっています。」

「いえいえ、こちらこそ毎日明日香さんに助けられてばかりで。」

と意味の無いような挨拶を交わす俺と明日香のお母さん。

「それでお母さんどうしたの？」

明日香が椅子に腰を掛けて言う。

目で明日香が座れば？という感じで見てきたので座ることに…。

「明日香はいつもどのような感じなのでしょう？」

お母さんが俺の前の席に座って聞いてくる。

「明るくて、面白い子ですよ。家事も良くやってくれますし、頼もしい子ですね。」

笑みを作りながら俺は言う。

「それで、あなたは明日香と付き合っているんですね？」

なんとなく心配そうな顔をして、明日香のお母さんが聞いてくる。

「お母さん！ 違っって言っているでしょ？」

「けど一緒に住んでいるということは、嫌いではないんですよね？」

はっきり言っただけ俺は誰から見ても困っている顔をしているだろう。

実際困っているのだから。

「まあ、好きですよ」

「風紀も何言っているのよお！」

少し赤面になっている明日香が俺の隣に居る。

お母さんはお母さんで「あらまあ。」と言っている。

俺は嘘は言っていない。

実際好きだ。

だけど、この好きは決して恋愛感情ではない。

それは…確信できる。

その瞬間、2階からギシツという音が聞えた。

俺と明日香はぱつと振り向く。

シンクロの人も驚きのぴったり差であっただろう。

「やっぱり、そういうことだったんだね」

沙希の声だ。後ろには亮平もいる。

「あの明日香の家に行った日以来可笑しいとは思っていたんだけど、証拠が無かったからね」

「そうか？俺は気付いていたけど…」

と、亮平が沙希に向かって言う。

さすが、危険人物の二人。

明日香の顔も諦めムードだ。

ここに来て…ジ・エンドか。

明日香の顔を見ていると目があった。

その後俺は亮平と先のほうを向いて

「分かったよ」

と、呟いて二人に今までのことを話し始めた。

「お前の親なら考えそうだな」

亮平は頷きながら言う。

「でも、それは高校生では危ないよね」

二人とも真剣に考えてくれているらしい。

「だから私たちのことを漏らさないようにお願いね？」

明日香の精一杯の落としフェルモン放出中。

これは、女子にも聞くらいしいな。

二人は大きく頷いた。

「今から何する？」

沙希が暇そうにそうやって答えた。

いやいや、俺たちの話はそんな簡単に終わるのか…。

もう少し、懸命に考えてくれても…

「んゝそうだねえゝ」

って明日香もその話に乗るなあ！

「どうしようかねえ？」

亮平も…ですか。

「風紀は何したい？」

明日香が俺の方を向いて可愛い顔で聞いてくる。

その顔で一瞬、頭の中が真っ白になるんだ。

「な、なんでもいいよ。」

やっとの答えがこれだ。

俺、情けない…。

「ん」

俺を抜く三人の悩み声と一緒に聞えた。

結局俺たちは明日香の実家でボーっとすることに。

明日香のお母さんと喋ったり、ゲームしたり、色々。

明日からは予定があるらしい。

明日香のお母さんが決めたことだ。

決して逆らえない。

そして、明日香のお母さんの手料理の晩御飯を食べ、その日はもう寝た。

意外とあの移動時間は効いたらしい。

俺たちは深い眠りに入った。

2日目の朝。

俺はいつものように明日香の可愛い声で起きた…かった。

「おい、風紀朝だぞ！」

その声は男くさいがよくよく聞いてみるとかっこいい声。

清水 亮平。

体を揺らされ徐々に瞼が開いていく。

「やっと起きたか」

ポリポリと頭を掻きながら、面倒くさそうにしている。

「おはよ…」

目を擦って伸びをする俺。

「早く着替えろよ。今日はキャンプに行くらしいから」

「そうだったっけ」

良く見ると亮平は昨日のパジャマとはもう違って、普段着に変わっている。

亮平を見た後時計の方に目を持っていく。

「１１時！？」

思わず声を上げてしまった。

そう、俺の記憶が正しければ１１時に下に集合なのだ。

「亮平！ もっと早く起こしてくれよ」

服を脱ぎながら言う俺。

「１０分ぐらい起こし続けたよ…」

呆れながらこちらを見る目。

痛い、痛いよその目は。

さっさと普段着に着替えて、下に直行！

階段のギシギシと鳴る音を無視。全体重をかけて、２段抜かし。

玄関の前に到着。

「あ…れ？」

そこには誰も居なかった。

「お前、まだ１０時だぞ？」

ゆっくりと2階から階段に座って見下ろしてくる亮平。

「…へ？」

玄関に置いてある時計を見る。

…10時。

もしかして見間違えたのか？

うわぁ、恥ずかしい！

「今からキャンプの準備をするから、明日香の部屋に来てって言うてたぞ」

そう言うてゆっくりと亮平は立ち上がった。

俺も俯きながら階段を上がる。

そして、明日香の部屋の前に来てコンコンとノックをし入る。

「おはよー！」

明日香が満面の笑みでいつものように言うてくる。

やはりこれが俺の朝だな。

「さっきすごい音がしたけどなんだったの？」

「…」

思い出させないでくれ明日香。

「なんでも…」

なんでもないよ。と言おうとしたが、俺のその言葉はあっけなく亮平の言葉に遮られた。

「風紀が10時と11時見間違えてさ。急いで玄関まで走っていった音」

3秒ぐらい間があって明日香と沙希が笑い出す。

俺も俺で笑うしか出来なかった。

「風紀って少し馬鹿だよな？」

沙希が笑いながら言うてくるから余計むかつく。

「うつせえ！ そついやキャンプの準備するんだって？」

俺は話をそらすために、キャンプの話を持ち出した。

「明日香、俺と風紀は何すればいいの？」

明日香は少し悩んだ後、

「お母さんに聞いて」

と言った。

その言葉を明日香が発した後、タイミングよく明日香のお母さんが入ってきた。

「うんうん。皆集合したわね」

頷きながら明日香のお母さんが言っている。

「じゃあ今から皆で車にキャンプの用意を入れましょうか」

「はい。」とみんなの声がそろった。

10分後、亮平が一番頑張って、車の中に荷物を乗せ終わった。

「つかれたあ…」

これがみんなの口からこぼれた言葉。

明日香のお母さんは人使いが荒いな。

自分は何にもしていないのに…。

「さあ、出発しますか！」

そう言って手を叩く明日香のお母さん。

どこか仕草が明日香に似ている。

そして、俺たちは車に乗り込む。

当たり前のように明日香のお母さんは運転席。

明日香は助手席で後ろの席に左から沙希、亮平、俺と言う順番だ。

ちよつと高校生が3人乗るときついのだが、乗れないことも無い。

「レッツゴー！」と言って明日香のお母さんは車を発進させた。

車の中では俺が一番大人しいかも。

沙希と亮平は二人で話しているし、明日香は明日香のお母さんと話している。

まあこの座席の席からすると自然にこうなるのだ。

亮平は女子と話すときは噂の話をしない。

昔、それを話したことで女の子に嫌われたことがあるかららしい。

「はあ……」と溜息をついて外を見た。

自然がいつぱいで空気がよさそう。

30分ぐらい車に乗って、目的地に着いた。

「到着！」

明日香のお母さんが車の外に出てそういった。

俺は明日香のお母さんの次に車から出て空気を吸う。

…うまい。

2回、3回と吸う。

やはりうまい…。

意味もないのに俺は何度も吸い続けた。

「…おい馬鹿」

俺の頭に衝撃。

亮平が俺を叩いたのだ。

「痛つてえな！ 何だよ！」

と、言つて後ろを向くと「おい馬鹿。」の意味が理解できた。

みんなはキャンプの用意を運んでいる。

「…はい分かりました」

そう呟いて、俺はみんなと同じように、荷物を運び始めた。

荷物も運び終わり、キャンプが始まった。

「キャンプをしよう」と言っていた明日香のお母さんはまたもや何もしていない。

明日香も沙希も「焼くのは男の仕事！」と言って食べる準備だけ。

俺と亮平は溜息をついて野菜と肉を焼き始める。

「…あまり食えないな。」

俺は肉を裏返しながら亮平に呟く。

「そうだな」

やっぱり亮平も思っているらしい。

何で俺たちがそういうこと思っているのかというと、

「風紀君！ お肉まだあ？」

明日香のお母さんが俺の後ろでスタンバイしているからだ。

「あと少し待つてくださいね？」

明日香のお母さんだ。キレることは出来ない。

そして、出来上がった肉を明日香のお母さんの皿に入れる。

「小母さん食べすぎですよ」

笑いながら亮平が言う。

亮平がそういった直後俺たちの顔は硬直した。

ズゴオオオオン！

熊も驚くフックが亮平にあたっただ。

「ぐおっ…」

亮平はそのまま意識なし。

うずくまって倒れている。

「あら、どこに小母さんなんているのかしら。」

その亮平を殴ったのはもちろん明日香のお母さん。

「お母さん！」

明日香が明日香のお母さんに近づく。

「大丈夫、骨は折れないところをつついたから」

…いやいやつついたじゃ収まらないですよ。

「まあ、そのうち目覚めるからそこらへんにでも寝かしておきましよう」

ニコッと笑って俺を見た。

「そ、そうですね」

としか言わさない顔をされ、俺は亮平を運ぶ。

大丈夫か亮平？

もう死んだのかと思うぐらいすごい音がした。

「風紀君！ お肉まだあ？」

…絶対に逆らえない。

俺は初めてと言う位、心の底から思ったのだ。

3 - 4

明日香の実家帰り3日目。

この日は全くと言っていいほど風が吹いてなかった。

本当に何も吹いていなかった。

この天気が逆に怖くて、嫌な予感がしたんだ。

「おい風紀！」

「んゝ、あと2分……」

寝言のよつに言う俺。

「早くしないと置いていくぞ？」

「んゝ、あと少しだけ……」

布団の中に蹲った。

ドンドンドン。

誰かがドアを叩く音がする。

「風紀！ おきているの！？」

明日香の声だ。

俺は一気に目が覚めて、明日香の声を確認する。

「起きてるってえ」

目をゴシゴシしながらあくびをする。

ダッシュで普段着に着替える俺。

昨日はあの後、夜の9時まで亮平が起きることはなかった。

あの衝撃のことを亮平は覚えていないらしい。

「へ？ そんなことあったっけ？」

と、不思議そうな顔をしていつていた。

痛みも、もう無いらしい。

恐ろしや、明日香のお母さん。

しっかりと着替えてからドアを開ける。

「おはよ」

俺がまず挨拶をする。

そうしたらいつも通り明日香は笑顔で「おはよお！」と言ってきた。

昨日に続き、これが俺の朝だなあと思う。

「今日はお母さん仕事でいないから、4人でどこかに遊びに行こっ
！」

「そうだな」

と俺は言って、亮平を部屋の中から呼び出した。

下に行つて、玄関まで行くと、そこには沙希が靴を履いて待っていた。

「お・そ・い！ 風紀」

額に怒りマークがついているのは誰の目から見ても分かるだろう。

「い、ごめん」

ここは素直に謝っていくのが安全策だ。

俺も靴を履いて外に出る。

まず庭があつて、そこを通ると小さな門がある。

明日香が手馴れた様子でそれを開けた。

そこで、明日香はぴたっと止まった。

何か悩んでいる様子。

1分ぐらいロダンの彫刻「考える人」の格好をしてようやく答えが出た。

「じゃあ最初はゲームセンターにでも」

皆さん苦笑い。

只今の時間が10時。

ゲームセンターの時間ではないからだ。

「じゃあ…」

とまた明日香が悩みだした。

これじゃあ時間がもつたいない。

「まあ、まずゲーセンにでもいくか！」

考えるのが面倒だったので明日香の最初の意見に俺は賛成した。

「はい」と明日香は言ってから歩き出した。

明日香の話によると、ここからゲームセンターがある所までは20

分掛かるらしい。

最初の10分ぐらいは話は続いたのだが、その後の10分は殆ど誰も喋らなかった。

こんなので、今日一日持つのだろうか。

少し不安になってきた。

そして重苦しい空気のままゲームセンターがあるところに到着した。

そこには色々な店が並べられている、

服も売っているし、電気製品も、食品なども。

映画館も一番上の階にある。

その一階下がゲームセンターとなっているようだ。

エレベーターでそこまで上がって行くと、音が五月蠅い場所に着いた。

「やっぱ五月蠅いな」

嫌そうな顔をして亮平が言う。

「ねえねえ見てみて！ このモグラ！ 超可愛い！！！！」

俺たちの気分も知らずに明日香はモグラ叩きを見ながらはしゃいでいる。

俺は一番に明日香に駆け寄った。

「明日香：相変わらず変なやつだな」

心に閉じ込めておくべき言葉が口につっかり出てしまった。

「何よ！ …罰としてこれやってちょうだい」

そう言われ、モグラ叩きの棒を持たされた。

「何で俺が？」

「罰って言ったでしょ！ 罰って！」

明日香の顔を見ると断れる自信がなくなった。

「はあ…」と大きな溜息をついて、ポケットに入っている財布から、100円玉を取り出し、機械の中へと入れる。

すると、モグラが一匹頭を出してきた。

そのモグラに躊躇することなく叩く。

2匹、3匹と出てきてだんだん叩けなくなってきた。

くそつ。

バシバシと棒を振り、モグラを一匹残らず叩きのめした。

「ふっ。見たか俺の棒さばき！」

そう言っただけをみたときには誰も居なかった。

「ってちゃんと見てろよ！」

明日香はUFOキャチャーのところに居て人形を眺めている。

また、俺は大きく溜息をついた。

そして明日香に駆け寄る。

明日香が人形を見ている姿は、誰が見ても美しく、安らいで、気持ち軽くなる。

それぐらい可愛いのだ。

沙希と亮平は、明日香の後ろにトコトコ付いている。

まるで、しもべのように…。

そんなことをあいつ等に言ったら、殺されるんだろうな。

その後、俺たちは映画を見に行った。

明日香が「この映画みたい！」と言い出したので、明日香の顔を見ると誰もが首を横にふれないのだろう。

やっぱり俺も、しもべの一人なのだろうか。

しかし、その明日香は映画の途中で寝てしまうという事件を起こしてしまったのだ。

映画が終わると明日香は十分に寝たようで、「ん〜〜!」といいながら伸びをしている。

映画の後は皆で服を見に行った。

そのとき、明日香の顔だけが変わったのだ。

今日は明日香の実家帰り3日目。

この日は全くと言っていいほど風が吹いてなかった。

本当に何も吹いていなかった。

この天気が逆に怖くて、嫌な予感がしたんだ。

「や、大和君…」

そう言って、明日香の足がピタリと止まってしまった。

「おい明日香どうしたんだよ？　大丈夫か？」

いきなり止まった明日香に俺は疑問と心配を抱く。

明日香が誰かをじっと見ているようだ。

その明日香の顔は今にも無表情のまま泣きそうな顔で、見ていられなかった。

明日香の目の先を追っていくとある男にたどり着いた。

容姿はカッコイイ。性格は見た感じではよさそう。

その人を明日香は見続けている。

なあ…明日香、誰だよ。

その男の人はこちらを向いてハッとした。

「あ、明日香！？　明日香か？」

タッタッタとリズム良くこちらに向かって走ってくる。

「や、大和君…」

「久しぶりだなあ！　お前遠い高校に行ってたって聞いていたから」

「もう、近寄らないで…」

明日香は俺の後ろに着いた。

「ん？　その人、新しい彼氏？」

新しい彼氏？　どういう意味だよ。

「そ、そう…だから近寄らないで！」

そう言って明日香は俺の服をつかんだ。

俺はビクツてしてしまったが、何故か明日香がここまでこの人のことを拒絶している。

そんな明日香を突き放せるわけも無い。

女に触れて心臓がバクバクしているのを我慢して、その大和という男を見る。

「そうか。元彼の俺が出る幕じゃなさそうだな。また、会えたら会えたで話してくれよな！」

そう言っただ和は元の場所に戻って行った。

「大丈夫か明日香？」

首を縦に振るだけ。

…相当ヤバイな。

俺と沙希と亮平は顔を見合っただ頷いた。

その日はもう帰った。

明日香は晩御飯も食べずに、部屋にこもっている。

…大丈夫なのかよ明日香。

大和という男は自分で元彼と名乗っていた。

そっぴゃ昔、「明日香って彼氏いたの？」とか、聞いた覚えがあるな。

そのとき明日香はビクついていた…。

明日香：お前の過去にも何かあったのか。

3 - 4 (後書き)

本日は、3話更新となります。

3・5（前書き）

明日香視点となります。ご注意ください。

私が実家に帰ったのは2つ理由があった。

ひとつはお母さんが帰っておいで。と言ったから。

もう一つは…大和君に会えるかもしれないと思ったから。

その2つ目の大和君になんと…出会った。

そのとき心が揺らいだ。

涙が出そうになった。

何も考えられなかった…。

私、傷ついているのに。

あなたのせいで。

「や、大和君」

と呟いた私はその後何も出来なかった。

放心状態になった。

誰かが私に「大丈夫か？」と聞いてくる。

大丈夫？

そんなわけが無い。

中3の終わりに、あんな出来事があつたのだから。

私は、2年生の夏休みから付き合っている子がいた。

その子とは幼馴染で、昔から好きだった。

私の初恋はその子で、彼の初恋も私だと言ったことが中2の夏知った。

「明日香…俺、お前が好きなんだ。付き合ってくれないか？」

大好きな大和君からその言葉を聞いたとき、私は天まで登りそうなくらい好きだったのに…。

あんなことが起きるなんて。

私達はなんにも危険も無くただ普通に付き合っていた。

しかし中3の終わりごろ、私は大和君に公園に呼び出された。

最近何か変。

それは気付いていた。

だから、今日は気分治しに一緒に喋ろうと思っていたところだ。

公園に着くまでの10分間私はいろんな妄想を広げていた。

何が起こるのかな？

大和君にまた会えるんだなあって。

けどその思いは公園に着いたとき一瞬にして飛んでいった。

そこにいたのは大和君…と女の人。

噂では聞いていた。

一つ上の美人な優しい先輩。

私が来たのを確認すると、大和君とその先輩は手を振ってさよならをしていた。

そのさよならをした後の大和君の顔が悲しそうに見える。

どうしたの…？

何でそんな悲しい顔をするの？

彼女が来たというのに…。

「よっ、明日香」

手を挙げてこっちによってくる。

「やつほ。大和君。」

3秒ほど沈黙。

「明日香今日は…」

その後をなんとなく聞きたくなかった。

「そうそう知ってる？ 2組の弥生ちゃんかね、県統一テストで一番の点数取ったんだって！ すごい？」

私はわざと、大和君の話を止めた。

「へえ…」

「それでね、弥生ちゃんったら…」

その後の言葉が出てこなかった。

何故か急に涙が出てきて。

「弥生ちゃんったらね、自慢…し、してく……くるの…」

涙が出てまともに喋れないよ。

「明日香…」

そう言って大和君は私の頭を自分の胸に引き寄せた。

だけど、私は大和君を突き放してしまう。

「…明日香」

何を言われるかは分かっている。

私はうつむいたまま、涙を流している。

「俺、他に好きな人が出来たんだ」

…分かってるよ。

分かってたんだよね…。

「だから俺と…」

私は、大和君の言葉を遮った。

「嫌！ 嫌嫌嫌！ 大和君と離れるなんて…嫌なの」

涙が止まらない。

「明日香…」

「嫌！！」

そのまま私は地面に座ってしまった。

足の力が抜けて立てないのだ。

「ごめん明日香」

大和君の声が聞えてくる。

「私は大和君の好きなのに！ 何で…何でよお」

「明日香…俺もお前が好きだけど。」

なんでそんなに大和君は私に優しくするの。

ただ…ただ辛くなるだけ。

「大和君の馬鹿」

そう言って公園は私の泣き声で埋まっていた。

大和君が近くににいるのはまだ感じる。

人生でこれほど泣いたことはないだろう。

今、天から地に落ちた…気分。

「明日香…分かってくれ」

そう言っただ和君は私の前に座った。

「明日香…」

私の頭を触る。

「何でよお…」

涙が止まらなかった。

止まるまで家には帰れないと何故か今だけ冷静になっている。

冷静になっているが、涙が止まらない。

今気付いた。

私はここまで好きだった。

大和君はそこまで好きじゃなかった。

…そう思っただけ自分を納得させた。

その日以来私は学校へは行かなかった。

大和君と喋りたくなかったし、会いたくも無かった。

受験勉強に集中して、第一希望の遠い学校へ進学した。

そこではある男の子と二人で暮らすことになってしまう。

その人を見るとなんだか落ち着くの。

大和君にどこか雰囲気似ていて…。

そして今日、大和君に出会った。

その近くにはあの女の人っていて、何も出来なかった。

本当に会いたかった。

だけど、大和君の幸せを邪魔しなくなかった。

「ん？ その人、新しい彼氏？」って聞かれたときは少し悲しかった。

平然とした顔でそのことを言うから。

悔しくて本当は彼氏じゃないのに「そ、そう…だから近寄らないで！」と言ってしまった。

その後、落ち着きたくて風紀の服をつかんだ。

…落ち着く。

「そうか。元彼の俺が出る幕じゃなさそうだな。また、会えたら会えたで話してくれよな！」と言って大和君は彼女の元へ戻って行っ

た。

涙が出そうになった。

だけど堪えた。

ここで泣いて、まだ心残りがあるなんて大和君に知ったら…。

我慢して、我慢して、やっと家に着いて自分の部屋で泣き崩れた。

3人は雰囲気を感じてか、私の部屋に入ろうとはしなかった。

あり難い。

今はどうしようもなく一人になりたかった。

3日目の晩御飯、明日香は自分の部屋に閉じこもっている。

あの『元彼』にあつたとき以来おかしい。

明日香が俺を彼氏と認めたときはいつもと何か雰囲気違った。

いつもなら冗談交じりだったんだけど、今回は強がっているように見えたのだ。

明日香の過去に何があつたかは分からないが、今の俺としては心配になるのは当たり前。

晩御飯の時も皆黙っていた。

あの明日香のお母さんさえ黙っている。

無理に盛り上げようとしてみたが、やはりそんな雰囲気じゃない。

明日香のテンションが上がっていない。周りのテンションもあがらない。

本当に明日香の存在は大きいな。

夜、沙希は明日香の部屋に入ってしまった。

鍵はついていないので入れることには入れる。

俺は座りながら、何か話をするのかと思って耳を澄ましてみたが、全く話し声は聞えない。

ただ、沈黙という音が流れるだけ。

外は夏と言うこともあり、俺達の気も知らず蝉や、鈴虫が鳴いている。

その音が無性に寂しくなり、あまり泣かない俺も涙が出そうになった。

『明日香の元彼』

優しくて、格好良かった。

何故か心の隅がチクチクとする。

気のせいとは思うが、気のせいとも思えない。

なんだろうコレ。

「はあ」

胡坐をかきながら外を見て、大きな溜息をつく亮平。

「どうしたんだよ？ 溜息なんかついてさ」

なんとなく久しぶりに声を出した感じがした。

「明日香が元気ないとさあ、何か違和感があるな。と思ってさ」

渋々と亮平が明日香の事を語っている。

「お前はどうよ？」

不意にこちらを向く。

その仕草が男前に見えた。

「俺も。明日香と一緒に暮らしてるじゃん？ 今までこんなことはなかったんだ」

そのまま俺は天井を見上げる。

「…羨ましいねえ」

「今、そんな事言っている場合じゃないだろ？」

「いやいや、今だから言えるのさ。どこまで進んでいるの？」

亮平が変な事を聞いてきたからブツツとしてしまった。

「俺達そいう関係じゃないし、俺の体質知っているだろ？」

女に触れない。ある一部にはまともに喋れない。

この体質を知っているのは亮平だけだ。

家族にも言っていない。もちろん…明日香にも。

「そうだったな」

へへへと笑う亮平。

「明日香さあ多分、風紀のこと好きだぜ？」

いやいや、それはないから。

心の中で亮平につっこみ。

「ないって」

「けどさあ、好きでもないやつを『彼氏』なんて言えないぞ？」

悪ふざけって言うもんがあるだろうが！

明日香はそういう性格なんだよ。

「ああ、いいなあ！」

亮平は心の叫びのように叫んだ。

しかし、今は夜。

できるだけ小声で。

「ああ、いいなあ！」

と二度目の心の叫び。

「だろ？」と少し亮平をからかって、二人で女の話をした。

噂話じゃなくて、女の話。

亮平は今まで付き合った人数とか、告白された人数とか。

因みに告白したことは無いらしい。

こんなにも長い付き合いなのに、そういうことは全く知らなかった。

無二の親友。

この言葉が俺の頭をよぎった。

こんなやつだけど親友なんだな。

心から許せる友達なんだろうな。

そう思った。

その日はその話をして就寝。

だけど、俺はなかなか寝付けない。

明日香のこと。

そればかり考えていた。

その時、廊下でガチャとドアが開く音。

その後にキーと部屋の向かいにある、ベランダが開く音がした。

俺の第六感が明日香だと言っている。

部屋のドアを少しずつ開けていって、ゆっくりと外を見た。

明日香。

やっぱり明日香だ。

そしてゆっくりとドアを閉め、明日香に近寄っていく。

一人にさせたかった。

だけど、心配でならない。

「よっ、明日香」

そうやって俺は手を挙げる。

「ふ、風紀…」

自分の部屋に戻っていこうとする明日香。

「なあ、明日香！」

明日香の腕をつかんだ。

この俺が、女の腕を。

気を失いそう。

失神しそうなのを我慢して明日香にこちらを向かせる。

「明日香。何か言ってくれ」

何度も言うが、心配なのだ。

どうしようもなく心配なのだ。

「風紀…」

そう言って明日香に抱きつかれた。

「あ、明日香？」

心臓がバクバク言っている。

と言っか、頭が持っだらうか？

そのまま明日香は俺から離れて外を眺めた。

「私ね…」

ゆっくりと明日香は話し始めた。

ベランダから見る景色は自然が広がっている。

庭とは逆の方向なので、山が近く。

今にも熊が現れそうだ。

明日香の話を全て聞き終えると俺は明日香を抱きたかった。

だけど、抱けない。

「まだ心残りがある。大和君のことが好きなの」

そのように明日香の口から聞いたからだ。

「そうか…」

その言葉しか出てこなかった。

他にも何か言いたい。

何か言いたいけど、俺と同じ体験を受けた明日香。

『浮気』

そんなものじゃない。

明日香がぼろぼろと涙を流し始める。

「俺もさ、昔彼女が居たんだよ」

明日香はこちらをハッと向く。

「そいつにさあ俺ベタ惚れで、束縛しちゃってたのかな？ 浮気されちまって」

「そうなの……」

明日香もその言葉しか出せないようだ。

「俺さあ、何も出来なかったんだよね。自分の無力さ。情けなくて、情けなくて……」

アハハと言いながら髪を掻く。

「だけど、自然とあいつのこと嫌いにならなかったんだ。そりゃ俺だって心残りはあったさ。だけど、こんな俺じゃ幸せに出来ないってそこで思っ……諦めた」

涙が出そう。

「風紀なら幸せに出来たよ」

無理に笑顔を作っ……てそういう明日香。

月の光が当たって、余計悲しく見える。

だけどその顔は美しく、俺の安らぎの場所。

明日香を失いたくない。

そう思えた瞬間なんだ。

風が吹く。

そよ風が当たる。

何故かその風で安心して俺も自然に笑みがこぼれる。

「明日香」

「なに？」

「明日でここも最後だな」

「そうだね」

「もうあの人は大丈夫なのか？」

「もう大丈夫。私ね今日ずっと考えてたの」

「何を？」

「自分の気持ちに嘘は無い。けど、大和君には幸せになってほしい。だから私は一歩引く」

「ならいいけど」

そう言つて明日香は「ありがと風紀」と言つて部屋に戻つていった。

次の日の朝。

「おはよおお！」

明日香がガン！と思いつきり俺達の部屋を開けた。

「お、おはよ…」

すると明日香は一瞬で顔を赤くしてドン！と思いつきりドアを閉めた。

俺達沈黙。

それは何故かというと、

「明日香…俺達が着替えているときに良く入つて来れたよな」

着替え中だったのである。

「そうだね…」

俺達は着替え始める。

「でもよかったな」

主語が入っていない亮平の質問。

「何がだ？」

これは当たり前前の疑問。

「だから、明日香が元気になって。お前らが昨日の夜いちゃついていたのが原因か？」

ニヒヒと言いながら聞いてくる亮平。

「お前な……」

と言って着替えは終了した。

今日はもう家に帰ることになった。

明日香と俺と沙希と亮平は玄関に行き、小母さん……じゃなくて明日香のお母さんにご挨拶。

「気をつけてね。」

そう言って明日香のお母さんは手を振った。

俺たち4人も「さようなら」と言って手を振る。

歩いて10分のバスの駅に着いた。

バスが来て、俺達は乗り込む。

その時明日香は立ち止まって、後ろを見て「お幸せに！」

そう言ってバスに乗り込んだ。

亮平と沙希は分かっているようだったが、俺は分かっている。

なんとなく優越感に浸って帰り道を楽しんだ。

「おはようございます部長」

「おはよう明日香ちゃん亮平君！　それと風紀」

只今9時。特別教室入り口。

いつものように中途半端な挨拶を部長はしてくる。

顔が可愛い明日香と格好いい亮平は可愛がっているのだが、俺はよく軽蔑される。

まあ、自分でもそこまで格好いいとは思わないが、そこまで格好悪いとも思わない。

いくら部長でも、そこまでされると結構ショックなんですけど。

「おはようございます部長」

明日香と亮平は愛想がいいのか俺だけ嫌われていることに気付いていないのか…。

何故かいつもハキハキと挨拶をしている。

今日の部活は夏休み始まってから初めての部活である。

休みの時に部活というのはこの映画研究部には珍しい。

まあ、これから時々あるのだが。

何故亮平と一緒にいるのかというと、亮平が意味もなく朝早くから俺たちの家に来た。

もう一緒に住んでいることはばれているのだから怯えることも無いのだが、朝8時だぞ？

俺はまだ起きていない時間だ。

明日香は朝食を作るために起きている。

その時間に亮平は人の家に上がってきたのだ。

迷惑な奴め。

お前のせいで俺の素敵な朝が台無しではないか。

特別教室に着いて椅子に座る。

「おい風紀。なんか機嫌が悪いぞ？」

「そうか」

朝、お前に起こされたのだからな。不機嫌なのは当然だ！

俺の朝は明日香の素敵な声と共に始まるというのに…。

はあ…と大きな溜息をつく。

「風紀溜息つくと、幸せが逃げるよ?」

明日香が本気の顔でこちらをみながら言う。

「ご忠告ありがとう」

笑みを作って俺は言う。

「どういたしまして」

悪意の無い笑顔でその返事が返ってくる。

「あのお…俺を挟んでイチャイチャしないでほしいのですが」

困った顔で亮平が言う。

考えてみれば俺たちの座っている順番は黒板に向かって明日香、亮平、俺なのだ。

ん?と言うかその前に

「俺たち（私達）はいちやついていない!」

なんと明日香と俺の声がはもった。

「うう…」

亮平はもっと困った顔をしていく。

はあ…とまた溜息をついて周りを見渡した。

只今この教室に居るのが

神藤 由美先輩。一つ上の先輩で去年のエースでもあり、女の子人気裏投票では2位という実力の持ち主だ。

それでその隣に居るのが

神藤 静香。由美の妹だ。俺たちと同じ年である。

結構人気はあるのだが姉とは逆で、大人しい感じなのであまり目立たない。

五十鈴は真面目な子なので俺たちより前に来ている。

まあ俺たちが、ぎりぎりすぎるのかもな。

幸助は未だに来ていない。

当たり前のように副部長の龍先輩も。映画マニアの光雄先輩と悠太は映画をじっくり見ている。

はあ…微妙な部活。

残り10秒で部活が始める。

その時、廊下からものすごい音がした。

そしてそれにつきガン！とドアが開く大きな音が。

「おはようございます！――！」

幸助だ。

「おはよう幸助君」

何事も無いかのように入り口で部長が挨拶。

残り3秒。

2秒。

1秒。

「はい、部活始めます！ 皆さん席について！」

部長が九時きっかりにそういった。

あの人は確実にA型だろう。

ガラ。

ドアが開く音。

「おっはよお」

「おっはよお。じゃないわよ龍！！ 7秒遅刻！」

「7秒ぐらいいいじゃねえかよ」

「…はいはい。早く席について」

7秒というのはドアが開いた瞬間の時刻だろうか？ …部長恐るべし。

「まず台本を渡すわね」

部長が教壇の上においてある、いかにも台本って感じの本を手にする。

そして俺たちに渡す。

「まずはつと目を通してみて」

初めての台本。

何気に緊張しているのは俺だけだろうか？

明日香は感動した目で見ているし、亮平は面倒くさそうに片手で持ちながら眺めているだけ

まずは誰がどの役かを見る。

…ん？

「誰がどれを演じるんですか？」

悠太が部長に問う。

そう、台本にあるはずの演じる人の名前が無い。

それに、登場人物の人数は11人以上。

この部活の人数をはるかに超している数だ。

「えっとそれはねえ、これから決めていくの」

「そうなんですか…」

「まあ悠太君は初めてだからね。あまり緊張しなくていいのよ」

部長が優しい笑みを作った。

あの顔なら結構もてるだろう。

…その性格がなければ。

「いつもどおり監督は龍に任せるから」

教壇の前に立って部長は言う。

その日の部活は台本を見て終わった。

部長は「どの役を演じたいか自分で決めてきて」

とは言っていたが、特にやりたい役も無い。

部活も終わり、今は明日香と食料の買い物。

その時、聞き覚えのある声が聞えてきた。

「明日香ちゃん？」

「部長！！」

部長だった。

「あら、風紀君も居たの。二人で何しているの？」

部長がニヤニヤして聞いてくる。

「たまたまそこで会って、ちょっと話してただけですよ」

俺は早く行け！ という感情を押さえて、顔全体を使い笑みを作る。

「そうそう、二人ともどんな役がしたいか決まった？」

「私はまだですけど」

「俺も」

「まあ、明日一通り役をやってみるからそれから決めてもいいわね」
うんうんと頷きながら聞いている明日香。

「部長はどれがしたいんですか？」

なんとなく部長に聞いてみた。

「私？ 私はねえ、コレかコレ。なんか面白そうだから」

ニヒヒと笑いながら自分のカバンに入っている台本を取り出して指を指す。

あなたはいつも台本を持っているのですか。

まあ、どちらとも内容的には脇役なのだが、大切な役だ。

「まあ部長に…あってますね」

これが俺の本当の感想。

「ありがとう。」

部長はそう言って俺の頭をつついた。

「じゃあ、私はお二人の邪魔をしないように、もう戻りますかね」

そう言ってタッタッタタと行ってしまった。

「俺たちも会計終わらそうか」

「そうだね」

ただ呆然に、部長の走る姿を目で追いかけていた。

4 - 1 (後書き)

本日は、4話更新となります。

「こんにちは。」

ある男が道にさまよっているようだ。

そこに可愛い女の子が親切に話しかける。

「こんにちは。ここってここですよね？」

男は話しかけてくれた女の子に地図を広げ聞いた。

「そうですよ」

可愛い笑みを作って返事をしてくれる。

その後ろで、気の強そうな女が

「じゃあ、ここらへんだよね？」

と、答えた。

「はいよく出来ました」

部長がパンパンパンと手を叩きながら言う。

そして、さっきのは映画のワンシーン。

皆が一通りしているのだ。

因みに、親切な女の子が明日香。

男の子は亮平で、気の強そうな女の子が五十鈴。

俺はこの前に一度、由美先輩と部長とで演じた。

だけど、俺は気の強そうな女の子役だったのだ。

何故…？

「明日香ちゃんと亮平君と五十鈴ちゃんやっぱうまいねえ」

マジで褒めている部長。

俺には何にも言っていなかったくせに…。

「じゃあ次は、悠太君と静香ちゃんと私でやろうかしら」

ウフフと言いながら部長は演技をする場所に入った。

俺はあれ以来出番が無い。

明日香と亮平等は結構しているのにな。俺は演技をする場所から少し離れた場所で眺めている。

その後、俺は最後の最後に演技することができた。

はつきり言つて人前でやるのは恥ずかしい。

何で皆あんなにも冷静で出来るのだろうか？

部活が終わる少し前。

「どうみんな？ 大体こんな感じで進めていくから」

部長が皆を椅子に座らせて教団の前に立つ。

「明後日の部活までには私達が決めておくから、希望があつたら今日言つてね？」

ニコツと笑つて今日は部活終了。

部長が「解散！」といった瞬間に2年生が部長の前に出て行つた。

それに続いて幸助、五十鈴、静香、亮平、明日香が部長の前に。

何故か俺は一人残された。

すると、横から声が聞えた。

「一人じゃないけどな」

龍先輩だ。てか、勝手に人の心読まないでください！

「いやいや大体お前の考えてそんな事が分かる」

…また勝手に読んでいる。

「龍先輩は言いに行かないんですか？」

「俺は適当なやつでいいから。3年生は絶対主役にはならないし」

「へえ、3年生は…って、え！！！」

「つうことは俺が主役に？」

「そんな訳ないか。」

「目立ちたがりな、幸助か亮平が主役でしょう。」

「それで去年のエースといわれていた由美さんがヒロインでしょうね。」

「まあ、由美はヒロインじゃないだろうな」

「…もうつっこみきれないです。」

「何ですか？」

「だってあいつ。主役は絶対ヤダ！　って、去年泣きながら前の部長に頼んでいたからなあ…。」

「へえ」

「じゃあ…明日香か五十鈴だろうな。」

「静香はまあ大体あの役でしょう。」

「お前は行かなくてよかったのか？」

みんなの役を考えていると幸助が喋ってきた。

「俺？ 俺は適当な役でいいから。特にしたいのも無いし」

「お前って馬鹿？ 当たり前のように最終的に残るのが主役だって」

「…」

「…」

「へ？ マジっすか？」

「マジ」

ズゴーーン！！！！ 頭の中の隕石が落ちた。

「おい、大丈夫か風紀？ なんかすごい音がしたぞ？」

俺もすぐさま部長の下に駆け寄った。

「ぶ、部長！」

「何？ 主役の風紀君」

「…」

「何よ？」

「マジっすか？」

「マジっすよ」

ズドドーン！！！！！

「あらら」

「冗談じゃないですよ！ 何で俺が主役？ てか、俺に主役は無理です！ 亮平の方がいいと思います！ てか、あいつにしちゃってください！」

もう土下座気味の俺。

傍から見たら情けない男なんだろうな。

それでもいい。俺は情けない男だ。

「因みにヒロインが明日香ちゃんだから…。はあ」

何で明日香！？ そして、最後の溜息は何！？

「明日香ちゃんが可愛そう」

あら、そういうことですか。

「明日香、よくヒロインがしたいって言いましたね」

「明日香ちゃんが女子の中で一番遅かったからね。しょうがないの」

よ
」

「…何!？」

思わず、特別教室の中に山彦ができる程の声を出してしまった。

俺たちの帰り道。

「はあ
」

「はあ
」

俺たちの溜息は止まない。

太陽の光に照らされ、俺たちは買い物へ行く。

誰もが見ても落ちこぼれたカップルに見えるんでしょう。

カップルじゃないんですけど。

「何で私がヒロイン」

そう呟く明日香。

まだ、明日香がヒロインなら分かる。

学校一の可愛さだからな。

考えられないのは俺だ。

主役！？

考えられない。

あんなにカッコイイ亮平や、悠太、龍先輩が居るというのに、何で
よりにもよってこんな俺
が…。

家に帰ってから俺たちの溜息は止まなかった。

明日香の、「溜息をしたら幸せが逃げていくよ？」の言葉が分かつ
たような気がする。

幸せが逃げていくというより、苦難が近寄ってきたのかもしれない
が…。

明後日になって、役の人が発表された。

…。

案の定俺は主役、明日香はヒロインだ。

亮平は俺の友達役みたいな感じで、部長はやっぱり自分の言ってい
た役になっていた。

俺の夏休み。

大丈夫なのだろうか？

…はあ。

また大きく溜息をついた俺だった。

只今、台本を読むという行動をしている俺。

明日香は何故か慣れているって感じがする。

俺はこの15年間、一度も台本を読むと言う行動をした事が無いのだ。

俺たちの中学校の文化祭にも、劇はもちろんあった。

しかし！ 俺は大道具係。

役者などしたこともない。

周り皆は賑やかで、「私達（俺達）こんなの余裕」みたいな顔をしてやがる。

それに…この台本には最大な欠点がある。

最初の方しかまだ書かれていない。

本当に最初だけなのだ。

部長が言うには、「映画撮る時に雰囲気で決める」って言っていたが…。

俺にはそのような余裕が全く無いのだ。

ただでさえ経験が無いというのに、このような事態。

「はぁ……」

大きな溜息をついた。

「こらそこ！　溜息しない！」

部長に指摘された。

「ういっす」

適当な返事をして誤魔化す。

「風紀君は少なくとも主役なんだからね！　自覚しなさい、自覚！」

「ういっす」

適当な返事で再び誤魔化した。

今日の帰り。

「風紀今日は一段と溜息が多いね。」

夕日ならぬ昼日を浴びながらいつもの帰り道を隣同士で帰る。

「だって俺が主役だぜ？　考えられないって」

「そうかなあ？　けど風紀でよかった」

「…なんで？」

「だって、先輩とかあまり知らない人だったら嫌じゃない？」

「まあ、そりゃそうだけど」

「だってこの話恋愛物でしょ？ ラブシーンとか出てきたらやっぱ風紀でよかったと思うよ」

「へえ、ラブシーンね…へ？ ラブシーン！？」

…グヘエ。

ラブシーンっていわゆる、キスシーンとか、抱き合うシーンとか？

…考えられない。

まあ、俺も良く考えてみたら、相手が明日香でよかった。

「何考えているの？」

くいつと明日香が前に出てきて、俺の顔を覗き込む。

こいつとラブシーン。

考えただけで死にそうだ。

「大丈夫？」

さらに顔を近づけてくる。

…ヤバイ。

「アハハ。大丈夫、大丈夫！ さあ進もう！ 輝く未来へ！」

俺は明日香の横を通り過ぎて、隣同士になるようにする。

明日香とラブシーン。

ああ！！ 頭から離れない！！

考えただけで顔が赤くなるぞ、こりゃ。

次の日

「じゃあ今度の土曜日から、7日間出発するから」

部活が始まった直後この言葉を部長が発した。

何処に？

それが俺の疑問。

「風紀君が何処に？　とか思っているらしいです〜！」

隣の隣の隣に座っている龍先輩がまた俺の心を…。

「はい！　何処に？　って思った風紀野郎！」

「は、はい！」

風紀野郎ってなんですか。

「それは、九州の田舎です〜！」

「は、はい？」

「だから九州の田舎だって！　なんで一度で聞き取れないんだよ、風紀野郎！」

だから部長、風紀野郎はやめてください。

「そうつすか…」

これ以上「はい？」とか「何で？」とか聞くとまたややこしくなるという雰囲気が出ていたので聞くのは避けた。

「また何で九州何っすか？」

亮平が俺の代わりに聞いてくれた。

「いい質問だね。それは…九州は私が好きだから！」

…おいおい。

そんな個人的な感情で、遠い所まで足を運ばなきゃいけないんだ。

「まあ龍も賛成したし、決定って事で。」

「はい」

俺以外の全員が答えた。

帰り道では、明日香は九州の話しかしていない。

飛行機に乗ったことが無いそうだ。

まあ、俺もないんだけど。

今度の土曜日まで、3日間日にちが空いている。

不幸な事に？ その日から7日間何にも用事がないということなのだ。

用事があれば…。

とか考えるのは無駄だった。

幸助が3日目に用事があるといったらしいんだが却下。

幸助の親元まで行って、用事を消したらしい。

なんと言っ部長。

恐るべし、部長。

3日後というのに明日香は家に帰ると即、行く準備をしている。

「すげえな」

明日香の行動を見ているとその言葉しか出てこなかった。

明日香はなんだか機嫌がいい。

そこまで機嫌がよくなるほど嬉しいのか？

俺は面倒なだけだと思うのだが。

そして土曜日の朝。

「風紀！！！！ 朝だよ！！！！」

ドンドンと俺の部屋の音がばるのが分かる。

「はいはい」

そう言って、俺はゆっくりとドアを開けた。

「おはよぉ」

「おはよ！ 風紀。」

笑顔で起こされる俺はやっぱり幸せ者だな。

人に起こされてこんなにも気分が良くなるのは明日香のおかげかも……。

「荷物早く用意して！」

そつと明日香を見てみると、来ているものばつちり、荷物の入れるケースばつちりでいつでもいける体制だ。

「なんでそこまで楽しそうなんだ？」

この3日間、疑問に思っていたことを聞いてみた。

「だって旅行だよ？ 楽しいのは当たり前じゃん！」

「……そうか」

明日香のあの笑みを見たら否定は出来なかった。

まあ、いつか。

俺は昨日のうちに準備しておいた荷物を取り、ドアを閉めてから着替えて、明日香の元へ行った。

「よし行くか」

「うん」

よく分からないが、九州へ今から行く。

映画を撮りに…。

さあ出発進行!!!

4 - 4

集合場所。

空港。

集合時間

9時2分。

只今の時刻

8時48分

こうして明日香と風紀の地獄な一日が始まった。

「おい！ 明日香遅いぞ！」

「そんなこといったってえ……。ちょっと待ってよ風紀い。」

グホオ。

明日香。その言葉遣いは反則だ。

一瞬気が緩んだせいか走っている最中電柱にぶつかった。

「痛ええええ！」

「だ、大丈夫風紀？」

「大丈夫、大丈夫」

なんとかまだ走れる状態みたいだ。

まあ、この状態に行くまでには色々深い事情があつて…。

まず、俺たちが家を出た後の出来事。

「風紀…どうやって行くの？」

「はあ？ そりゃタクシーとかバスとか交通機関でいいんじゃないか？」

「タクシー乗れるお金がないよ？」

「じゃあ、タクシーはやめるか」

「…」

「…分かったよ。調べりゃいいんだろ！」

俺は仕方なくあらゆる情報を駆使して電車とバスに決定した。

そして、バスの方が506円（二人で）高いことが分かった。

しかし、バスの方が電車よりも10分早く着く。

さあどっち？

「電車」

即答ですね。

その行き方を決め終わった時間が7時半。

出発。

電車までは歩いて30分。

まあまあ時間だ。

30分かけて電車に乗り込む

「明日香。7駅後の阿倉駅になったら起こしてくれ」

いつもより、1時間以上早く起こされた俺はすごく、すごく眠たかった。

「わかったよあ」

明日香は笑顔で返事してくれる。

…このとき明日香に頼まなければ良かったのだ。

ガタンゴトンガタンゴトン。

電車が激しく揺れて俺は起きた。

「ん…明日香？ 後何駅？」

眠気がまだ残りながらも明日香に聞く。

「明日香？」

明日香の方をぱっと向く。

「…は？ マジ？」

熟睡。

その顔が可愛すぎて抱きしめたかった。

だけど、ってそんな場合じゃない！

今は何処？

その時プシューとドアが閉まる音。

外を見てみると、阿倉駅より3駅後。

まじか。

「明日香？」

呼びかけても全く起きようとはしない。

その時、明日香は電車に揺られ、俺の肩に頭を・・・

って上手く行くはずもなく、俺は明日香の頭をよけた。

ドン！

頭がシートに叩きつけられる音。

「明日香大丈夫か？」

「ふにゃ・・・」

なんとか起きたみたいだ。

「明日香次の駅で一応降りるぞ？」

黙りながらもコクコクと頷く。

多分、今の状況を理解していないだろう。

この状態になっても明日香をかわいいと思ってしまう俺。

…駄目だ。

頭を横にぶんぶん振った。

そして、俺は明日香が寝そうなのをなんとかして寝かさず、次の駅までもった。

「明日香…」

「ごめんね？」

「遅刻するぞコレ？」

「だ、大丈夫だよ」

時計を見してみる。

ギリギリにも増して、ヤバイ。

3分ほどで電車が来た。

阿倉駅に着いたら乗り換え。

まあそこはスムーズに行き、電車に乗れた。

その電車を降りて、走り続けると今のこの状態になるわけだ。

「くう…痛え」

「大丈夫なの？ 風紀？」

ってこんなことしている場合じゃない。

「おい明日香！ 走るぞ！ 全力疾走だ！」

「うん！」

一緒に走り出す。

1分後。

「はあはあはあはあ。」

ピタ。

明日香の足が止まった。

…え？

「もう駄目…」

ふらふらしながら地面に座る。

忘れてた…こいつが体力無いことを。

クソッどうする？

9時2分まで12分。

大体空港まで2、2キロ。

まあ俺なら余裕なんだが、明日香はもう走れない上体。

俺が普通の男ならば背負いながら走るのだが…。

仕方なく携帯をポケットから取り出す。

プルルルルル、プルガチャ。

中途半端な取りかたをするもんだ。

「部長。風紀ですけど」

「…ああ、あの風紀野郎ね」

あのとて他に誰が居るんですか。

と言つかその後の風紀野郎はもうおやめに…。

「どうしたの？」

「いや、明日香と途中でばったり会いまして、なんか死にそうモードなんですよ」

「へえ、死にそうモードね」

「どうでしょう？」

「今どこら辺なの？」

「ん、あと2、2キロって所ですかね」

「じゃあ余裕で間に合うんじゃないの？」

「へ？」

「へ？　じゃないでしょ…集合時間は忘れたの？」

「いや、忘れていないですけどもう明日香が走れないので」

「歩いてても間に合う時間でしょ？」

「いやいや、後１０分しかないですよ？」

「何言ってるのよ…。あと２８分もあるじゃないの？」

「へ？」

「だから『へ？』じゃないって！　集合時間は９時２０分なんだから」

「そ、そうですね？」

「分かったなら責任もってしっかりと、明日香ちゃんを連れてくるのよ？」

「は、はい」

ピツと音が鳴り、通話終了。

… ９時２０分？

俺はどうしてこつも時間に遊ばれるんだ！

あの明日香の実家に行ったときもそうだったし…。

よくよく考えてみたら2分なんて微妙な数字出てこないだろ。

馬鹿だ俺。

「早く行こ風紀！」

明日香がゆつくりと立って笑みを作り俺にそういった。

「おう」

ゆつくりと歩いて、集合場所に着いたのが9時13分。

着いたときには一年生全員と、部長、由美さん、光雄先輩、が来ていた。

簡単に言くと、来ていないのは龍先輩だけ。

まあ龍先輩はいつもギリギリか少々遅れで来るから大丈夫でしょう。

案の定、龍先輩は19分に来た。

それから搭乗口に向かう。

変なセキュリティも抜けて、いよいよ飛行機へ。…初めての飛行機。

緊張するなあ。

4 - 4 (後書き)

本日は、4 - 1 } 4 - 4 まで更新となります。
ご注意ください。

読んでいただき、ありがとうございました。
また、明日も更新しますので、よろしければ読んでください。

「うおゝすげえゝ」

飛行機を降り、空港の外に出ると幸助が呟いた。

その言葉に続き亮平が喋る。

「んゝ思っていたより普通だな」

うん。

見た限り、田舎という田舎ではない。

「まあこれから1時間掛かるけどね」

ハフウ。

もうツカレタヨ。

「まずはバス停までね！」

そう言って部長は先頭をきる。

それにしても荷物が重い。

歩きたびに肩に負担がかかり、痛くなってくる。

絶対今日一日で身長2cmは縮んだな。

うんうん。と頷きながら俺は歩く。

「風紀どうしたの？」

明日香がひょこつと前に出てきて、俺の顔をのぞく。

その仕草はやっぱり可愛い。

「ん？ ああ考え事ね」

ニコつと笑って明日香を誤魔化す。

殆どこうすれば大丈夫。

明日香もニコツと笑って「そうなのか」と言ってまた歩き出した。

バス停まで約5分。

重たい荷物を持ちながらやつのことで着いた。

バスの中では皆騒いでいる。

騒いでいるというか、自分勝手な行動している。

何故かこのバスに人が俺達以外に乗っていないのだ。

だけど、俺は亮平の隣の席で窓をボーっと見ながらどんな所か感じている。

ここでロケをするのか。

そう思うと何故が変わった景色に見えた。

バスを乗ること20分。

「やっとついたあゝ」

またしても幸助が呟く。

そしてまた、亮平が言葉を足す。

「なんか、いつきに田舎っぽくなったな」

周りを見渡すと、田んぼ、畑、山、林。

簡単言つと緑がいっぱいなのだ。

「はいはい！ 皆着いてきて！――！」

部長が先を歩く。

今から行く所は、これから泊まる所らしい。

それと、撮影現場にもなる所だ。

それにしても、道がややこしい。

少し迷うと、完全に迷ってしまいそうな所。

やっぱり田舎なのだ。

「部長まだあ？」

幸助が聞く。

「ん〜とあと少し」

部長…後少しって言うのはどのレベルなのでしょう？

それから徒歩20分。

…着いた。

あと少し〓20分掛かる場所。

俺の頭にメモしておこう。

名前を見ると「太陽壮」

へえ〜なかなか田舎っぽくて感じがいい。

「こんにちは〜」

部長がドアをガラツと開ける。

「ようこそ〜」

30歳ぐらいの女の人ドラマに出てくるような挨拶をする。

しっかりと商売の笑みを作って、

「沢様ですね？　こちらへ」

と言い、歩き出した。

3階に上がり、男子は203に、女子は204の部屋に入る。

入ってみると、なかなか大きな部屋。

男6人でも大きいぐらいだ。窓の外には夏という輝かしい海。

蝉の音。

海の音。

風鈴の音。

「うわぁ、夏らしい！」

やはりここでも第一声を発したのは幸助。

「やっぱり田舎いいな」

亮平がポツポツ喋る。

「おいお前らちよつと204に集合」

龍先輩がドアを開けてそういった。

何をするのだろうか。

ん、わかんないな。

龍先輩のじきじきの命令なので、仕方なく女がいる204号室へ。

中に入ってみると、俺たちの部屋とそれほど変わらない。

変わっているといえば、女達が半円になって座っている。

この形を見ると、男は残った半分に座れ！見たいな感じだな。

俺が一番女子から遠い場所に座った。

部長がゆっくりと話し始めた。

「集まってもらったのは他でもない！ 映画撮影協力者が必要なのです！ そ・こ・で！ ここに紙が22枚ある。一人二枚引いて、それに当てはまる人を探してきてね。」

え！！ 何で俺たちがやらなきゃいけないんだよ…。

「何でやんなきゃいけないんだよ！ と思った奴はもちろんいないよね？」

部長の怖い怖い笑みをみてしまった。

「じゃあ、取ってちょうだい！」

裏側に向けられている紙を女子から取っていく。

男子は地位的に最後になるのだ。

女子が取り終わったら、先輩達から。

その後に幸助、亮平、悠太、俺という順番で取った。

…まあ、地位的に俺が最後なんですね。

俺の紙に書いてあったのは

『雰囲気の良い小母さん』

雰囲気の良いおばさんって言うのは愛想の良さそうになってことかな？
もう一つは、

『雰囲気の良い、見晴らしの良い場所』

…むしろ人じゃないな。

その分、楽かもしれないけど。

少し時間がたつと、部長が喋りだした。

「まあ頑張つて探してきてね。期限は明日まで。今日は撮影はしないから！ 明日からハードスケジュールだけど」

ウフツミみたいな笑みを作つて立つて手を叩く。

「解散！」

部長のその言葉に反応して、俺を含め全員が外に出て行った。

外に出て、まずは雰囲気のいい、見晴らしの良い場所を探しに行くことにした。

玄関へ向かうと明日香がよってきた。

「ねえねえ、風紀くなんて書いてあった？」

「ん？俺は『雰囲気のいい小母さん』と『雰囲気のいい、見晴らしの良い場所』だけど。明日香は？」

「ん」と明日香はね。コレとコレ

明日香は俺に紙を見せてきた。

「…嫌がらせか？しかも、こっちには何も書いて無いじゃん」

そう、明日香の片方の紙には何も書いてなかった。

「多分、あたりだと思っただよね」

因みに、もう一つの紙には『演技頑張ってね』と書いてある。

「まあこんな変な事が書いてあったし、この明日香ちゃんは風紀を手伝ってあげようかと！」

袖をめくって力強さをアピールしている。

腕、ホソホソだな。

「お！ 本当か！ ありがとう！」

これはラッキー。

さすが明日香。持つべきものは同居人だな！

「それで今から何処行くの？」

「最初は場所を探しに行こうかと…」

「え〜！ 私、最初は人探しがいい！」

…一応これ俺の役目なんですけど。

手伝ってもらうわけだし、最初は雰囲気の良いおばさんを探すか。

「わかった。小母さん探すか！」

「うん！」

明日香がブイッと指を二本立てる。

よし。

最初は人探しか！

頑張るぞ~~~~~!

「さあ何処行く？」

明日香が外に出て20歩ぐらい歩いてからそう呟いた。

「え？」

「だから何処行く？」

…何処行くってまさか明日香。

「お前、何処行くか決まっていなかったのに、小母さん探しに行こうなんていったのか？」

すぐくゆつくりと頭を上下に動かしている。

「本当かよ…」

その上下運動は止まらない。

「じゃあ…何処行きますかね」

「まあ、まず雰囲気の良い小母さん探そうよ」

「…当たり前だ」

「で、何処行く？」

だから、さつきからそれ話しているんだろうが。

「じゃあ、旅館の小母さんに最初聞くか」

さつきの頭の上下運動より、少しスピードが速くなって、頷いている。

来た道に戻って、靴からスリッパに履きなおし、旅館のおばさんが居る場所に向かった。

…ん？

ちよつと待て。

旅館のおばさんなんて何処にいるんだ？

「風紀いゝ、こつちこつちい」

明日香が手招きをしている。

「え？ そつちなのか？」

「らしいよー！」

…何処の誰に聞いたんだ？

明日香の居る方向に歩いて行って、そこからは明日香任せ。

明日香が右に曲がれば右に。

明日香が左に曲がれば左に。

明日香が回れば俺も回る。

って…。

「明日香ふざけてんじゃないぞ？」

「だってえ、風紀が私と同じ所歩くんだもん。面白いじゃん」

へへへと笑いながらまた一回くるっと回った。

「ああ！ あった。あった」

あの明日香が小母さんがいそうな場所を発見してくれた。

中のこっそり覗くと、休憩しているおばさんを見つけた！

お仲間さん達とワイワイ話している。

やっぱり、商売の顔とは違うんだな。

その時、後ろから冷たい視線が感じられた。

ゆっくりと俺は後ろを向く。

「…はい？」

「…はい？ って、言われてもね。風紀は何しているの？」

部長だった。

「あ、えっと。雰囲気の良い小母さんを発見したのですよ」

「あら、雰囲気の良い小母さんを引いたのは風紀だったんだね」

「そうですよ?」

「いや、そこに疑問の記号はいらないわよ」

「はいはい。それで今からあの人にアタックしようと思って」

「アタックするって言っても、明日香ちゃんがあそこに…」

「ん?」

俺は部長が指を指す方向に目を向ける。

その視線の先には、あの小母さんと愉快的な仲間達の中で一緒に喋っている明日香。

これは俺もすぐさま行かなくては。

「では先輩また後で。…おい明日香!」

できるだけ小さな声でその中に入る。

「あつ、小母様たちあれが風紀です」

俺の方に明日香が指を指す。

…え？ 小母様？ と言うか、あれって言い方はよろしくないのでは？

少々キレ気味のこの気持ちを落ち着かせて明日香の元に駆け寄る。

一応小母さんと言っても女だ。

女は苦手。アンダースタン？

「君が風紀？」

いやいや、初めて会った人に呼び捨てで呼ばれるのは良い方に考えられないのですが…。

「は、はい。そうですね」

この小母さん達は何者だ？

明日香…この短時間に俺のことをなんと話したんだ。

「私、別に出てもいいわよ」

なんと俺たちが狙っていた小母さんがOKコール。

「その代わり、女将に聞いてみないと分からないけど」

「いいんですか!？」

「まあ、女将さんがいいと言ったならね」

おお。やった。

さすが明日香。時には役に立つな。

「あつ、女将さ〜ん！」

小母さんが俺の後ろにいる人物を呼んだ。

いかにも女将さんって感じだな。

「この子達がね、映画に出て欲しいって言うのよ。出てもいいですか？」

女将さんは3秒ほど考えた後

「駄目」

という言葉を投稿返してきた。

「な、何ですか？」

俺はこの人をGETしなければならない。

でないとノルマ達成できないのだ。

…殺される。

俺のノルマ達成できなかったときの映像が頭に浮かんだ。

さ、寒気が。

「私が出る」

女将さんは商売の笑みを作ってそういった。

「『『『『『本気ですか？』『』『』『』『』』」

みんなの声がはもった。

「本気ですもの」

…一同沈黙。

まあ子の人に逆らえるわけもなく「宜しく願いします」といってその場を去った。

さあ次は雰囲気の良い場所で見晴らしが居場所か。

この自然の中だと、何処を見渡してもありそうだな。

俺は明日香に「行くぞ」と言って足を運ばせた。

「風紀くく！ どうするのく？」

「そんなもん知らねえよ」

只今、迷子中。

俺たちは何の計画も立てずに旅館を出た。

何も計画していなかったのが駄目だったんだ。

こんな迷路のような田舎。

土地勘が無いやつが外に出たら迷うに決まっている。

しかも俺は、方向音痴。

明日香に任せても、明日香は変な場所に向かっていつているような気がするし。

どうすればいいんだ俺！！

「まあ…このまま旅をする？」

明日香の無邪気な笑顔が目に入ってきた。

この顔をみてしまうと誰もが首を横に触れない。

てなわけで、俺は無意識に首を縦に振った。

「えゝ！ 冗談だったのに…」

その言葉で俺は意識が正常モードに。

「へ？ まあ、ついでにぶらぶらするか」

と言うか、今はそれしか出来ない。

道に迷っているのだから。

「ねえねえ、あそこ行ってみない？」

俺が「いいよ」という前に明日香は走ってしまった。

「おゝい、明日香！」

ビューーン！

…早。

と言うか、あいつ体力ないんじゃないかなかったっけ？

あれから7秒後。

…バタ。

明日香失神。

「お…い、明日香…」

俺は何をすればいいんだ？

一応は近づいてみたものの、明日香が無防備な姿で倒れている。

ん〜。俺が普通の男なら、背負ったり、なんなりして、休ましてあげられるのだが、俺は女に触れないしなあ。

これはピンチ。

そのうち車が来るだろうし、ああどうしよう。

何も出来ずに5分後。

「ん…」

明日香が目覚める。

「おお、明日か大丈夫か？」

「ふ…うき？」

「そうそう、風紀だよ」

「私…何しているの？」

「ん、あえて言うなら失神？」

「…あらそう」

明日香は「よいしょ」って年寄りのような声を出し、立ち上がる。

「お前はおじさんか」と俺が言うと明日香からの拳が飛んできた。

ピコピコピコピコ。

左頬ダメージ89。失神の確立76%

避けれる確立…82%

俺は頭を腹の辺りまでいつきに下げた。

明日香は拳を止めれるわけもなく、俺の頭の上を通り過ぎる。

俺はそのまま一歩、後ろに下がる。

「あ、危ないな明日香！」

「風紀がへんなこと言うから悪いの！」

「し、ごめんって」

「分かればよろしい」

ふう…。

はつきり言っただけな。

気がつけば明日香が言っていた「あそこ」に着いた。

そして、あそこに着くと明日香が疲れたのか、地面に座る。

それに続いて俺も座った。

んーなんか雰囲気はいいんだが、見晴らしがいまひとつ。

もう少し違う所探すか。

「明日香！ 次、行くぞ！」

「うん！」

俺達二人は立ち上がる。

そのとき明日香は「よっ」と言った。

多分「よいしょ」と言いそうだったんだろう。

それを途中で無理やり止めた。みたいな感じだろうか。

明日香らしくて面白い。

俺たちはまた、ぶらぶらと歩き出す。

明日香といろんな話をしながら歩いていると、あの旅館の203の部屋から見えた海が大分近

くに見えてきた。

「明日香！ あれ見てみるよ。海だ！」

「海だねえ〜！」

のほほーん。としながら明日香は言った。

もう少し、俺的には感動して欲しかったのだが。

何かいいところないかなあ。

雰囲気がよくて、見晴らしのいい場所って…。

いろんな種類がありすぎて、よく分らん。

「ねえねえ、風紀。あそことかどう？」

明日香が指を指した。

その先を目で追う。

そこには雰囲気が良くて、見晴らしがいい場所。

まあ少し違うような気もするが、俺的には好きな場所だ。

「いいんじゃない？」

俺がそう言って、隣に居る明日香の方を向く…はずだった。

…明日香がない！

心の中で無意味なつつこみをいれてしまった…。

はむう。

なんか変だな俺。

と言っか、こんなこと考える前に明日香が何処行っただのか探さなければ。

俺は前を向き、走り出した。

だけど俺の足も50メートルぐらい先に進むと自然に止まった。

「またかよ」

はあ〜と大きな溜息を着く俺。

明日香は何故か、先ほどのいきなりダッシュして、疲れて、倒れるということを経験していなかったようだ。

「バフツツ!？」

明日香が前回と同様に仰向けで倒れている。

だけど今度の明日香の格好は見たいけど見れない。

と言っか、心の底から見たい！

だってあの学年一の明日香のスカートがめくれている。

だけど、相手は明日香だし…。

いや、明日香だから見たいというのもある。

俺はクマさんのパンツを3秒ほど凝視した後、俺は近くにおいてあった木の枝でそつと明日香のスカートを直した。

これでこそ男。

男の中の男だ！

自分にそう言い聞かせ、明日香が起きるのを隣に座りそつと待った。

3分後。

「行かないで！！！」

…は？

因みにさっきの「行かないで！！！」は明日香がバツと起きた瞬間に発した言葉。

寝ている途中もボソボソ何か寝言は言っではいたが、起きた瞬間にこのような言葉を発するとは。

「どうした明日香？」

「ん…。嫌な夢を見たの」

明日香はエヘへと笑いながら「よいしょ」と言って立った。

その瞬間明日香の顔は「あっ」とした感じで、俺は笑いを堪えるのに必死。

「さ、さあ。あそこへ行こう！」

明日香は誤魔化すように歩き出した。

俺はその後ろについていく。

嫌な夢とはなんだったんだろう。

何故かは分からないが、俺の頭はそればかりだった。

5 - 3 (後書き)

更新時間が遅れてしまい、本当に申し訳ございません。
最近、プライベートの用事で無駄に忙しくなってきました。
出来るだけ毎日更新しますが、どうしても出来ないという状況が出てくるかもしれません。

「うわぁ…綺麗」

明日香が雰囲気良くて見晴らしがいい場所に着いた。

そこから見える景色は綺麗で。

明日香と一緒にいると余計綺麗に見えるような気がするのも事実。

「ねえねえ！ 風紀ここに座って！」

明日香が地べたに座って、隣をベシベシと叩いている。

俺は拒否できるわけもなく、頷いた。

「風紀。ここ眺めいいよね」

「うん」

俺たちが見ている光景は海の果てまで見えそうなところ。

ほとんど、邪魔をする障害物も無い。

まさにこれが『見晴らしがいい』というもののなのだ。

それに、ここで明日香と二人で座つてると…。

ロマンチックな感じになっちゃおう。

まさにこれが『雰囲気がいい場所』というものなのだ。

明日香を横目でチラッと見る。

可愛くて、一途で…。

明日香ほどいい奴はそうそういないよな。

「私、風紀がいてくれてよかったよ」

…へ？

何を言い出すんだ明日香。

「今更何を…」

「本当に…よかったと思ってるよ」

エヘ！ と笑みを作って、俺の方を向く。

その笑顔が一瞬悲しげにも見えた。

このまま、どこかに行っちゃいそうなの…。

「どうしたんだよ、明日香」

「ううん。何にもないよ」

風が吹く。

ゆっくり、ゆっくりとした風が吹く。

その風は俺たちを通り過ぎて、また新しい障害物へとぶつかるのだろっ。

「何があつたんだ？」

明日香の様子がおかしい。

明らかに今までとは違う…雰囲気。

「何にもないって！　だってここにいると本音を言ってしまうよう
な…感じだよね」

エヘへと今度は笑った。

そして、明日香は無言で立つ。

俺はそれに続いてたった。

先を歩く明日香。

その後をとぼとぼとついて行く。

無言。

その雰囲気俺は嫌だ。

嫌だけど、それを変えられるような俺じゃない。

その時、明日香がふと呟いた。

「…ねえ、何処に向かつてるの？」

何処って…。

明日香が先を歩いていたら俺はその後をついていっただけなんだけど。

「何処だろう？」

「もしや、私達…迷子？」

頷く俺。

「そりゃ、あのときから迷っていたからな」

「どうするのぉ？ 私ここで死にたく無い！」

「…多分死なないと思うから大丈夫」

「そっか」

…まあ、そんな会話をしても俺たちの状況は発展しないわけで。

さあ、どうする？

部長に電話？

いや、部長に電話した所で何も変わらないと思う。

じゃあ誰かに太陽壮の場所を聞くか。

と思ったものの、人が通りそうな雰囲気も無い。

「はあ……」

と大きな溜息をついて歩き出す。

行く道は決まっていらないが、目的ならある。

人を発見する！

うん。

大丈夫だ、俺。

「風紀何処行くの？」

明日香がタッタッタと走って俺の横につく。

「人探し」

そう呟き、キョロキョロとする。

右、人……0人。

左、人……明日香が1人。

後方、人…0人。

前方、人…1人。

おお！ 人発見！

「すみません！」

と言つて、俺はその人に近づいた。

徐々に近づいていくと顔がはっきりしていく。

ん…？

「部長！」

「あら、明日香ちゃん！ それと風紀」

…その言い方は変わらないんですね。

「部長お…太陽壮の場所が分からないんです」

明日香はもじもじしながらそういった。

先輩はその角を指差し、「その道」とだけ言った。

「有難うございます」

明日香が丁寧な頭を下げて、その方向へ足を運ぶ。

…意外とすんなり行つたな。

ドラマなら、夜になるまで探すというパターンなのに…。

すんなりと行きすぎだな…こりゃ。

その日の夜。

誰が言い出したかは覚えていないが、枕投げをした。

…枕投げ。

どれだけ昔の遊びだろう。

今となってはやっている奴等は少ない。

おれ自身、初めての枕投げだった。

次の日

ガチャとドアを開け、ジュースを買いに行く。

そこには明日香の姿が。

「おはよ…」

「おはよあ！ …風紀、どうしたの？」

心配そうな顔をしている。それもそうだ。

昨日の枕投げのせいで俺は身体中が痛い。

クソオ。

「それにしても昨日の夜は騒がしかったね。そっちの部屋は」

「だろ？」

「何していたの？」

…。

「ひ、秘密」

枕投げなんていえないって。

「そっちは何していたの？」

「ん」と、私達の部屋は女のお話をしてた」

「…ほお」

少し興味あるな。

明日香の話は。

「それでね、それでね！」

明日香がその言葉を発した後、聞き覚えのある声が後ろから聞えた。

「明日香ちゃん？ 昨日の話はコレよ？」

部長だ。

部長は、口の前に右手の人差し指を持ってきて、『シー』の格好をしている。

「そ、そうでしたね！ じゃあ風紀また後で！」

「お、おう」

そのまま明日香は走り去って行った。

部長はこっちの顔を見ずに明日香のあとを歩いて行った。

「…俺は一人ぼっちか？」

そう呟き、俺はその場を逃げた。

その後は、また何かミーティングとか言って男共は204へ呼び出された。

「はい。皆さん呼び出された理由は分かっていますね？」

部長がいきなり皆に向かってそういった。

俺たちは、昨日と同じように座っている。

と言っか全く同じ。

「まあ…ね」

龍先輩がなんとなくそう言った。

「じゃあ、皆紙に書かれていたもの見つけたのかしら？」

部長があたりを見渡す。

一応俺は頷いておく。

と言っか、そうしていないといけないような雰囲気だからだ。

「じゃあ、いいわ」

部長が腕を組む。

「じゃあ今日は撮影しに行くからね」

…え？

もう！？

「じゃあ出発するから、皆ここに入っているものに着替えてきてちようだい」

そう言われ、部長から怪しげな紙袋を貰った。

「男共はさっさと着替えてきて」

しっしっしと邪魔者扱いみたいに部屋の外に追放された。

204のドアが閉まる。

その直後に、部長が一言言った。

「着替え終わったら下に来てね」

バン。

大きな音がしてドアが閉まった。

203に戻って、紙袋の中をしてみる。

「…普通」

思わず俺はそう言ってしまった。

しかし、あの部長ならなんらかの仕掛けをしてくると思ったんだがな。

俺は今時の服に着替えて皆を待つ。

龍先輩はまだ着替えていない模様。

と言つか、着替える素振りもない。

「龍先輩。着替えないんですか？」

「ああ、俺は今日出番無いから」

そついい、他の4人を待つ。

俺に続いて悠太、光雄、幸助、亮平の順番で着替えが終わった。

悠太はなんかお子様っぽい感じ。

まあ、あの台本からして想像はしていたが、なんか悠太だと、この格好は…似合い過ぎかも。

エレベーターを使わずに下に向かう。

階段で降りると、コツコツと良く響く音が鳴る。

20秒ほどかけて下に行くと女子はまだ居なかった。

俺は立つのが嫌いな方なので、近くにあるソファーに座った。

ドシツと座ると、俺の横からもドシツとした音が聞えた。

「風紀。お前、それ似合っているよな」

「亮平は…なんかキャラじゃないけど」

まあどちらかと言うと、亮平と俺の服が逆の方が似合っていると思うのだが。

「亮平…」

俺は真剣な顔をして亮平の名前を呼ぶ。

「何だよ」

その雰囲気を感じたのか亮平は真剣な顔をした。

「主人公、変わ「無理！」ってくれ…ないんだ」

亮平の遮る言葉も、俺には通用しなかったようだ。

「風紀が久しく真剣な顔をして、何を言い出すかと思えばそんなことかよ」

「他に何があるんだよ」

「例えば…」

「例えば？」

「…やっぱりなんでもない」

おいおい。

そこまで言っておいてなんでもないは、ないだろう。

その話が終わるのを待っていたかのように、女子は下にやってきた。

「やっぱり男子は早いわね」

部長がそっけなく言う。

いやいや、女子があまりにも遅いんでしょう。

…と言うか明日香の格好。

なんと言つか…なんと言えいいのか。

一言で表すと

美人。

うん。いつも以上に美人だ。

日傘なんか持って。

…大人って感じかも。

いつもの明日香じゃない感じ。

…マジで男なら惚れるな、こりゃ。

「ふ、風紀。私、変かな？」

明日香がいつの間にか俺の目の前に来ていた。

ここは落ち着いて、冷静な返事を。

「変じゃないよ。すごく綺麗だよ明日香」

…う。

なんか落ち着きすぎて逆に恥ずかしい言葉になってしまったような。

周りからの視線も何故か感じるし。

「そうかな？　ありがとう！」

あの服、あの顔で満面の笑み。

…絶対死ぬぞ俺。

映画撮影。

死ぬ覚悟は出来ているのでしょうか。

明日香との…ラブシーン。

絶対無理。

…。

落ち着け俺。

大丈夫。

いつも通りすれば、大丈夫。

緊張なんか無い。

そう、緊張なんか…。

「はあ…風紀。何回ミスっているんだよ」

龍先輩がカメラを回しながら呆れた風に言った。

何も言い返せない俺も馬鹿みたい。

「…まあ、最初だから誰でも緊張するだろう」

うんうん、と頷きながら言う龍先輩はどこか自分に言い聞かせているようだった。

「テイク9…スタート」

俺は一生懸命演技に入る。

今、出ているのは俺と、静香と、亮平。

「はいOK！」

ふう…。

やっと俺の出番が終わった。

「じゃあ次は、明日香ちゃんと、静香ちゃんと、亮平と、風紀だね」

…またか。

もう主役なんて嫌だ！

心の中で叫ぶ。

その叫びも虚しく、もうすぐ始まる。

今度は明日香と俺が話すシーン。

近くで見ると余計綺麗だな。

「おい風紀、見とれてるんじゃないぞ」

龍先輩の櫛が飛ぶ。

「はい」

「じゃあ、スタート！」

カメラがまわりだした。

俺たちの合宿は、7日間。

今日は2日目。

2日目に撮る予定だったシーンは全て撮り終えた。

3日目と4日目とも順調に撮影が進んだ。

…事件は

5日目に起きた。

「風紀」

「ん？」

「なんか風が強まってきたねえ」

「そうだな」

AM9時。

俺と明日香は、下でゆっくりとしている。

ここに来たのは203に女子が割り込んできたからだ。

部長と由美先輩。それに続いて、妹の静香も一緒に来て、寂しくな

るのが嫌だからと五十鈴と明日香も一緒にやってきた。

最初の5分は我慢できた。

しかし、部長が変な事を言い出すまでは。

「今日どうせ、12時集合だから何かゲームしましょう!」

…俺、逃走。

ゲームなんてまっぴらだ。

明日香は俺を心配したのか探しに来てくれた。

そして、今に至る。

「今日の撮影どうなるんだろうね」

「さあ? これぐらいの風ならするんじゃない?」

「そうかなあ?」

ガタガタと硝子が靡いている。

やはり、明日香も女の子。

こういうことは怖いのだ。

顔がこわばっている。

「大丈夫だつて」

俺は笑みを作つて明日香に言った。

「そ、そうだよね」

とは言つた物の、やはり怖がつている。

俺にできることはないが、そつと「明日香」と呼んで微笑んでやつた。

その後の会話が続く。

「ラブラブだねえ」

後ろから亮平の声がした。

「う……。お前は何してんだよ」

「俺？　俺は上が暇だからさあ、こっちの方が面白そうだったし」

「ふーん」とだけ言つておいた。

「それにしても……」

亮平は外を見た。

一応亮平も気にしているらしい。

映画の撮影も詰め詰めの状態。

一日も有余がないのだ。

「まあ、これくらいの風なら」

亮平も俺と同じ考えのようだ。

なんだかんだ言って、11時まで話していた。

約2時間、下に居たのだ。

11時になると上に行って、着替えを済ます。

ここまでの行動はもう3日やっているから部長に言われなくても行動しなければならぬ。

そうしなければ、部長を怒らせそうだから…。

今日の服はいつもと同様、今時の服。

こんなお金何処から出ているのだろうか？

やっぱり学校だよな。

それとも部長の自腹？

…それはないな。

まあ、深く考えると埒が明かないから、考えるのはやめておこう。

無言で俺は頷く。

その様子を部屋の皆さんは不思議そうに見ていた。

12時になり、下に集まる。

さつきより風が収まっている。

俺たちより先に女子が着いていた。

「遅いわよ、男子!」

龍先輩は「ごめんごめん」と言って部長に謝っていた。

明日香の姿。

今日も可愛い。

…。

明日香と目が合った。

すると明日香はニコッと笑う。

部長に呼ばれたのか、部長の方をぱっと見て話をした。

今日は明日香と二人で写るシーンがあるらしい。

あの海の場所で。

俺たちが見つけたあの場所で。

う…頭痛い。

ここは…。

周りを見渡す。

どうやら浜辺のようだ。

隣には水浸しになっている明日香。

「おい、明日香大丈夫か？」

耳元で言ってみた。

「ん…」

と言っているので生きてはいるんだろう。

…周りには何も無いな。

そっぴゃああの時。

「風紀、風が強いね」

「そ、そうだな」

中に居たときは分からなかったが、外に出てみると案外すごい風だったのだ。

部長は悩み、悩み続けて、拳句の果てに悩んで、することになった。

「まあ、大丈夫だろう」

龍先輩のこの言葉がきっかけで。

あの崖に着いた。

その上はすごい風。

雨は降っていない。

曇ってもいない。

しかし、立っていられるのもやっとだ。波が風のせいで荒れている。

太陽がその崖の向こう側に綺麗に咲いていた。

その崖の端っくらへんに座るように命じられた。

俺たちは恐る恐る近づいていく。

明日香は俺の服をひっぱって歩いている。

気が狂いそう。

崖の端の方に着いた。

明日香の体制が崩れる。

…危っ。

気付いたときには遅かった。

俺たちはその崖から海のほうへと落ちていったのだ。

死ぬ…。

そう思った。

…しかしながら、俺たちは何故か生きている。

明日香の強運か。

俺の悪運か。

この二つがごちゃ混ぜになって今の状況になっているのだろう。

…見る限り人の気配なし。

微かに肩と、右足が痛い。

折れては居なさそうだが、打撲と捻挫。

多分そんなところだろう。

「う…」

明日香の目が微かに開いた。

「明日香」

「風紀？」

「そうそう風紀。お前大丈夫か？」

「なんとか…」

明日香もまず、周りを見渡す。

「ここ何処？」

やはりそう思うだろう。

実際俺も思った。が、はっきり言って分からない。

こんな景色見たことも無い。

ああ、無人島か？

「無人島か？　とか思ったる風紀。」

その言葉に反応して後ろを向く。

「龍先輩！」

「大丈夫か？ あんな所から落ちて…」

「まあ、少し身体が痛みますけど」

「そっか」

そう龍先輩が言うと後ろから部長が顔をひょこつと出してきた。

「部長もいたんですか」

「何？ 風紀野郎。居ちゃ悪いわけ？」

かなり不機嫌そう。

あまり刺激しちゃヤバイな。

「明日香ちゃん大丈夫？」

「は、はい！」

「そう、良かった！ ヒロインが死んじやったら話しに成らないものね」

ということとは部長。俺ならいいのですか？

ふと疑問に思った俺でした。

「けど…風紀野郎のこと少しは見直したわ」

…ん？

先ほど部長の口から

「信じられないものが」

龍先輩が俺の心の中を先読みしたのか、俺が言おうとしていたことを言っている。

「龍先輩！ 人の心を読まないでください！」

「だって、風紀スケスケ過ぎ」

スケスケですか。

そついや、何で部長は俺のことを？

「何で部長は俺のことを褒めたのだろう？ とか思っただろ？」

また…読まれた。

「そんなこと思っただんだ風紀は。教えてあげるわ」

「何か聞かなくてもいいような気がする」

「今、なんといいました？」

殺意のこもっているような笑顔が俺の眼に写る。

「い、いえ。何にも」

「だって風紀野郎明日香ちゃんを抱きしめて、かばいながら落ちたんだよ？」

…へ？

俺が？

「え…風紀が？」

明日香は少し戸惑ったような顔。

いや、そういう顔されても困るんですけど。

「風紀有難う！」

「う、うん」

…全く覚えてない。

まあ、そういう行動をとったのなら、俺はその時気絶したであろう。

「皆はもう太陽壮に帰しておいたから」

「そうつすか」

明日香のびちょびちょの服もどうにかして欲しい今。

男の理性を保てるのか。

…うん。

俺たちは太陽壮にゆっくりと戻った。

「大丈夫だった？ 明日香ちゃん！」

まずは由美先輩が俺たちに駆け寄った。

「明日香！？ 大丈夫か？」

その次に亮平。

「明日香ちゃん。俺、心配したよ」

そして幸助。

その後、全員が明日香に駆け寄った。

「明日香ちゃん大丈夫？」とか…。

ポツンと孤独な俺。

はつきり言つと、俺も同じような危ない目にあったのですが…。

悠太が俺の方にはっと気付いてくれたようだ。

「ふ、風紀も大丈夫？」

その言葉をきっかけにして皆がシーンとした。

見た目上、俺のほうが重傷に見えるのだが。

足を引きづっているのだから。

「うん」

そっけなく返事をして俺は部屋へと戻る。

「風紀！ 今日はず」

部長が言っている。

その言葉を遮って俺は「わかってる」そう言って階段を上がっていった。

203に入る。

光雄先輩が一人、本を読んでいた。

俺は無言で着替える。

そして、無言で座った。

光雄先輩と二人って言うのは、何故か緊張したりする。

「拗ねてるんか？」

「そ、そんなことないですよ」

光雄先輩と喋ったのはこれが初めてかもしれない。

「まあ、拗ねてる原因はなんとなく分かるんやけどな」

何処か関西弁が混じっているような言葉。

「そんなことないですって」

「…」

「…。本当ですよ？」

「…気にすんなや」

そう言つて、また光雄先輩は本を読み始めた。

だから拗ねてるとか、そんなんじゃないって。

空いているスペースに俺は仰向けになる。

目をゆっくりと瞑つてみた。

風の音がする。

他は何も音がしない。

がたがたと音が響くだけ。

光雄先輩の本をめくる音がたまに聞えてくる。

その音が何故か俺の心を癒して、眠気を誘った。

「お…ふ…だぞ？」

誰かの声がつつすらと聞える。

「おい風紀！ ご飯だぞ！」

亮平が俺の肩をものすごいスピードで揺らしている。

「ん…。もうそんな時間か」

時計をチラッと見る。

7時18分。

部屋には俺と亮平しかないようだ。

「お前本当に起きるの遅いよな。そうそう、起きるって言ったら、3組の…」

また、亮平の噂話が始まった。

いやいや、ちょっと待て。

俺の記憶が正しければ、晩御飯は下の食堂で7時からじゃなかったっけ？

こんなゆっくりしていいのか？

「亮平。ご飯」

俺は噂話をしている亮平に話しかけた。

「…ん？ ご飯？ ああ食べに行く？ もう皆行っているけど」

「そうだな」

『行っているのは見れば分かる』と突っ込みたい所だったが、今は寝起きでそんな力も無い。

ゆっくりと立ち上がり、ドアの前にある鏡で一応髪を整えた。

よしっ。

と心の中で気合を入れてから歩き出す。

食堂に着くと、ほとんどの人が食べ終わっており、もうその場には居なかった。

じゃあ何処に？ って、話になるのだが、大体は風呂だろう。

ご飯を食べた直後の風呂。

俺にはちよつときついな。

そこには、明日香と静香と五十鈴が何も手をつけずに待っていてくれたみたい。

「大丈夫風紀？」

そういわれたのはまだ足の運び方が可笑しいせいか。

「まあ…大丈夫」

安心させるように明日香に言った。

「もしかして、俺たち待っていてくれたの？」

亮平が分かりきったことを聞いている。

「うん。明日香ちゃんが待ってようって…ね？」

五十鈴は明日香の方を向き、そういった。

恥ずかしそうにする明日香。

「ありがとな」

俺は礼を言う。

「どういたしまして」

明日香は笑みを作りながらそういった。

その日の晩御飯は皆でワイワイ喋りながら食べた。

ご飯が美味しかったのは覚えている。

明日香の笑顔が可愛かったのも覚えている。

亮平がいつも以上に元気だったのも…覚えている。

7日間の合宿は一日延びて8日間の合宿となった。

あの事件以来、大きな事故は起きず、俺の脚も次の日になれば通常状態に戻っていた。

帰り道は行き道より短く感じて、部活の皆とも前以上に仲良くなれた気がする。

あの事件は誰も口には出さない。

まさか、皆俺が拗ねたとでも思っているのだろうか。

…。

考えないで置こう。

俺たちは、地元に着き解散という形になった。

俺と明日香は同じ道を歩く。

部長も同じ道だということを今日初めて気付いた。

しかしそれは、ほんの10秒ぐらいのことだけ。

部長は自転車で通っているらしい。

俺たちは歩きで、道も違うから滅多に会わないのだ。

…今日は疲れた。寝よう。

夏休み。

もう部活は無い。

色々あったけど、夏休みという天国であり、地獄であった時間が終わりを告げた。

ピンポーン。

9月1日。

朝、7時。

今日から学校というのに、朝早くから家のインターフォンが鳴っている。

明日香の声はまだ聞えてこない。

布団の中で今、出来る限りの頭を動かせる。

え〜と、誰？

え〜と、どうしよう？

まあ…。

「無視決定」

そう呟いて頭の回転を止めた。

しばらくすると、明日香のいつもの声が聞えてくる。

「風紀〜朝だよ!」

いつもと同じ時間。いつも通り、ドアを開く。

ただ一つ違うのが、

「おはよう明日香。と…亮平？」

「おう、亮平だ」

「りよ、亮平か」

…なんだよ？

何で亮平がいるんだよ？

「羨ましいぞ。風紀」

亮平はそう言い、俺の視界から消えた。

「どうしたの風紀？」

明日香が心配そうな顔をして、俺を見ている。

「…幻か？」

一応、決まり文句のその言葉を発しておいた。

着替えも終わり、学校に行く準備を鞆に詰めると、俺は部屋を出ていつも通りご飯を食べに行く。

当たり前のように、幻なんかじゃなくて本当に亮平はいた。

明日香の手料理もいつもより一品多い。

あの優しい明日香のことだから、亮平の為に作ったのだろう。

フツ。

それが亮平を調子に乗らせることも知らないで。

これがきつかけとなり、亮平は毎日のように食べに来るだろうな。

俺は無言で席に着き、明日香の到着を待つ。

明日香も準備が終わったようで、いつも通りの席に着いた。

「「「いただきます」」」

3人の声が綺麗にそろった。

パクパクと箸が進む。

亮平はいつものように、ぺちやくちゃ喋りながらご飯。

明日香は、人を無視できないたちなのか、亮平の言葉にも反応をする。

亮平がここに来たのは何らかの理由があるのだろう。

ただ、邪魔をしに来てだけとかなら抹殺決定だ。

一度箸を止め、右手を机の下に隠す。

そして、抹殺準備OK。

本題に差し掛かる。

「亮平、何のために家に来た？」

「…それ」

「…なんだよ？」

「それを言いに来たんだよ！ …凛^{りん}が転入してくるんだって」
右手に準備をしていた抹殺を解除した。

「……」

「どうすんだよ風紀？」

「…どうするって」

「お前には隠していたが、智也とはお前と終わったときに別れたらしいぞ」

知ってるよ、それぐらい。

何で今頃…凛が。

そう、木村^{きむら} 凜^{りん}とは風紀の元彼女。

「いや、まだ分からないんだ」

亮平がボソという。

「どういうことだよ？」

「実は名前しか分かっていないんだ」

「そうか」

「同じ名前はこの世に五万と居るはず。あの凜じゃない可能性もあるんだ」

「そうか」

「風紀、そこは突っ込む所だぞ」

「…ごめん、ごめん。同じ名前の人がこの世に5万といたら怖いです」

「はい、よろしい」俺は、箸を取り食事に戻る。

「風紀…けどもしあの凜なら…」

俺は思いっきり机を叩いた。

「亮平！ その話はやめろ。明日香の前だぞ」

明日香がさっきから口の前で箸がとまった状態になっている。

「ごめん」

亮平がそう言つて、重苦しい空気の中、俺の目の前においてある明日香の手料理は徐々に減つて行つた。

あの凜が転入してくる。

この時期に？

まだ高校入つて間もないじゃないか。

何故、転入？

明日香と亮平と同じスピードで歩く。

学校に向かっている最中、誰一人として喋ろうとはしなかった。

俺は、明日香に話していない。

凜が原因で女性恐怖症になっていることを。

明日香に言つと、明日香が俺を心配して家を出て行くかと思つたからだ。

…それは嫌なんだ。

何故か分からないが嫌なんだ。

俺の生活には、もう必要な人物になっている。

8時40分から始まる学校に8時7分に着いた。

凜とは会いたくない。

せめて、違うクラスに…。

いや、まず凜ではないことを願おう。

あいつの顔を見ると駄目なんだ。

涙が出てくるんだ。

声が出ないんだ。

実際、明日香が凜の雰囲気似ていたから喋れた。

…けど、実際の凜には声さえかけられないし、顔も見れやしない。

自分の席に座る。

明日香は俺の席の隣。

二人だけ…この教室に今居る。

「風紀？」

心配そうな声を出して、明日香は俺に話しかけてきた。

「どうした？」

いつもの顔に戻り、明日香に返事する。

「…何にもない」

明日香はそういい、また口を閉じた。

ガラッとドアが開く音がした。

担任の伊豆野^{いずの} 小百合先生と、見覚えのある人が入ってくる。

俺はすぐさま立ち上がり、教室から姿を消した。

後ろの方にある教室からは

「今日から貴方は、ここで勉強するのよ」

そう聞えてきた。

俺は…今にも涙が出そうだった。

フラッシュバック。

頭の中で中学の時、凜の携帯を見た瞬間の凜の顔を思い出している。

吐き気、頭痛、腹痛。

いろんな症状が一気に、俺にのしかかってきた。

…保健室へ行こう。

俺は一步一步、階段を下りていく。

一階にある保健室へと足を進ませた。

風紀が、この教室から姿を消した。

担任の小百合先生が入ってくるなり出て行った。

… 先生が原因ではないだろう。

多分、この生徒が原因なんだ。

美人。

その言葉が似合うような顔持ち。

私は、その子をじっと見ていた。

「ねえねえ」

その子が私の方を向き、何か聞いたそうな声… いや、発言をしている。

「さっきの、風紀… 香坂君だね？」

「はい」

初対面の人にタメ語とは何事だ〜！

「付き合ってるの？」

「付き合っていないですけど」

「そっかぁ」と呟き、その生徒は廊下を見た。

風紀を探しているのだろう。

先生が先ほどの話をまた話題に持ってくる。

「けどねえ、香坂と明日香ちゃんって仲いいんだよ?」

クラスの自慢のように話す先生。

「そういえばまだ紹介してなかったわね。こちらが、今日から転校してくるようになった、木村 凜さん。明日香ちゃん仲良くしてあげてね!」

ウッフッフン　と言わんばかりのテンションで私に話しかけてくる。

「は、はぁ・・・」

溜息なのか、返事なのかよく分からない声を出してしまった。

時は過ぎる。

今の時間は8時38分を示している。

未だに隣にいるはずの風紀が戻ってこない。

凜って言う人は、担任室で待つように言われたらしい。

沙希はいつも通りの雰囲気。

そういえば、夏休みも3回しか遊ばなかった。

今更、後悔。

皆も、久しぶりに会えた嬉しさなのか、夏休みに入る前とは全く違う雰囲気。

「どうしたの、明日香？」

ふと、沙希の顔が私の視界全体に入る。

「ううん。何も無いよお」

エヘへと笑って誤魔化した。

その笑いと共に、チャイムが鳴る。

結局…風紀は戻ってこなかった。

先生が来ると同時に、皆は自分の席に戻る。

ガラッとドアが開く音。

それから3秒後には「おおおお！」と男子の声が聞えてきた。

委員長が「起立！ 礼！」といい、一日が始まる。

「え〜と、この人は木村 凜さん。親の用事があつて、転入してきました。じゃあ、凜さん何か自己紹介を。何でもいいわよ。好きな子でも、好きな部分でも」

好きな子…好きな部分を紹介してどうするんですか先生。

つて！ 好きな部分つて…え？ どういう意味ですか！！

「え、え〜と。この学校のある一部の人は知り合いです。例えば…香坂君とか」

そのとき、クラスからはザワザワとした声が聞える。

先生の「しっ！」と言う言葉と同時にシ〜ンとなった。

「これからよろしく願います！」

ペコツと頭を下げて誰から見ても可愛い挨拶の終わり方。

先生は、凜さんの席を一番後ろの右から2番目の席を指定した。

そんなことよりも、風紀が心配だ。

ホームルームも終了し、先生に風紀の居場所を聞いた。

保健室。

私は次の授業に間に合わないと思うが、保健室へと走った。

…うう。

直ぐ息が切れる。

1階に着く頃にはもうばてていた。

保健室のドアを開く。

「こんにちは…」

今にも倒れそうな声を出す私。

恥ずかしい！

「明日香ちゃん！ 今…ちょっと取り込んで」

いつも保健室に遊びに行くと居る先生が、私に中を見せないようにして外へ追い出してきた。

「ど、ど、どうしたんですか？」

「あのね今、中に香坂君が居るんだけど、何か様子が変なの」

「風紀が…ですか？」

先生は頷き、「もう家に帰すつもり」と言っ
て教室に戻るようと促した。

私は、保健室の前で立ち往生。

「風紀大丈夫なのかなあ」

そう呟いた後、私は一限目の授業をする場所に向かった。

その日一日。

とてもつまらなかった。

いつも私の視界にいた風紀がない。

そんな寂しいことは今あって、現状にあって…。

心に穴が開いた感じがしたんだ。

下駄箱に向かう。

下駄箱を開き、靴を取り出す。

毎日のように入っている手紙。

まず、名前を見て誰かわからない。

そういうものは捨てると親に教えられた。

ゴミ箱にそれを捨て、いつもより歩幅を広げ、歩くスピードを2倍にする。

風紀に会いたい。

その一心で。

自分の家に着く。

右手でゆっくりとドアノブに手を掛け、ドアを開ける。

「ただいまぁ！」

シーン。

…。

シーンって何なんですかシーンって。

風紀のドアを開ける。

「風紀！」

…誰も居ない。

家の中を探し続ける。

「…風紀」

すごく寂しい気がした。

気がつけば、手に携帯を握っている。

亮平君なら何か知ってるだろう。

アドレス帳を開き、亮平君に電話する。

「はい、もしもし?」

亮平君の声だ。

「りよ、亮平君! 風紀の居場所知らない?」

しばらく沈黙。

「んゝ、知らないな。何かあったの?」

「家に帰ったら見つからなくて」

「まあ…そのうち帰ってくるだろうから、家の中で待っていてよ」

「うん」

「じゃ」

プープープーと携帯の悲しい音が流れる。

家の中で待っていてって言われてもそんなに待てないよ。

自分の部屋に行き、私はベットにドシッと倒れた。

風紀の元彼女の凜って言う人。

美人だった…。

風紀は過去に何があったのだろうか。

風紀の力になりたい。

そう考えても埒が明かなかった。

…私は涙を流した。

力になれなくて。

6 - 3 (前書き)

亮平目線です。

俺は放課後にかかってきた、明日香からの電話を切った。

心配しすぎなんだよな、明日香は。

やっぱり風紀のことが…。

とはいえ、切るとき、ちょっと強引過ぎたかな？

だけど、どうせ泣いているであろう今の風紀の姿を明日香に見せる訳にはいかない。

風紀の行きそうな場所はつかんでいる。

一応、これでも趣味は人間観察だからな。

それに風紀とは幼馴染だし。

あいつのことなら何でも知っていると断言していい。

なんでもって…その…まあ、細かいことは気にするな。

俺は財布と、携帯をポケットに入れて2階の自分の部屋から降りていく。

「亮平！ 何処行くの？」

って親に聞かれたけど「ちょっと」としか答えられない自分が居る。

只今の時刻、16時25分。

自転車に乗り、風紀が居ると思われる場所に向かう。

多少壊れているのか、キコキコと痛々しい音が聞えてくる。

明日香はちゃんと家に居るだろうか。

無駄に探してはかわいそうだし。

早く見つけよう。

明日香の今の心境は、風紀を待つに相応しく無いだろう。

早く見つけなければ。

まずは、風紀が昔住んでいた場所に向かう。

自転車で5分といった所にある。

中は真っ暗。

近くの窓から中を覗いた。

こりゃ、いないな。

自転車に戻り、乗り始める。

「やっぱり、あそこしかないな」

右足で思いっきりペダルを踏んだ。

徐々にスピードが上がっていく。

立ちこぎまでして、スピードを上げる。

風紀がいつもどん底に落ちたときはあそこに行かなかった。

凜と別れた時もあの場所で一人泣きしていた。

あのときの光景は忘れない。

俺には、その光景が闇に浮かぶ放浪人に見えた。

「はあはあはあ」

ブレーキを引き、ゆっくりと自転車を止める。

ペダルから足を離して、地面につける。

鍵をしっかりとかけたのを確かめ、坂を下る。

その場所は、公園のような川。

昔から俺達の隠れ家として使っていた場所へと向かう。

そこから眺める景色が絶景で、昔俺と風紀と智也と3人で最高の場所と名所をつけた。

そこにつくと、噤り泣きをしている風紀を見つけた。

その光景を見てしまった俺はじっと眺めていることしか出来なかった。

風紀が俺の存在に気づく。

「亮平……」

目が真っ赤にはれている風紀が俺に話しかけてきた。

「また、お前ここにいたのかよ」

風紀は俺のほうを見るのを止め、また前を向く。

「この場所が好きなんだ」と呟いて。

俺はそっと、風紀の隣に座った。

「明日香が心配してたぞ？」

「そうか。…あいつには悪いと思ってるんだ。明日香は俺に、大和と言う人のことを話してくれた。俺は凜の事、女性恐怖症のことをまったく話していない」

空を見上げるようにして風紀はそう言った。

俺は何も答えることができない。

「凜の顔を見ると、今でも泣けてくるんだ。もう直ったかな？　つて、思ってたんだけど、亮平の口から凜の話を聞いたとき涙が出そうになった」

……。

あの時から風紀はおかしくなったんだよな。

「学校行くとあいつが居てさ、顔もまともに見れずにその場を立ち去ってしまったよ。吐き気がしてさ。あのときの事思い出すと……」

なんと答えればいいのかだろう？

親友を隣にして何も返答できない俺は情けない。

『思ったことを言えればいいんだ』

そういえば昔、智也にそんな事言われたっけ。

「風紀。あのさ、俺はこういう言える立場じゃないけど、昔のことを気にしてたら、前に進めないんじゃないかな？　今のお前には立派な支えが居るだろ？　家に帰ってしまえよ。な？」

風紀のほうを見ると涙を流していた。

さっきよりも早く、無表情に。

風紀は涙を袖でひと拭きし、いつもの笑顔で大きく頷いた。

久しぶりの二人乗り。

風紀を後ろに立たせ、俺がこぐ。

いつもこのパターンだ。

駅まで見送りに行く。

自転車をいつもの1・5倍の強さでこぐ。

息を切らして、俺は進む。

…へっ。なんてお人よし何だ俺は。

明日香の元に帰れ、だって…。

あいつを好きなのはそこの男だけじゃないのにな。

風紀が意味不な言葉を発している。

二人乗りすると、風紀はこうなる。

「お前はなんでそんなにいつも叫んでるんだよ!？」

って聞いてみると、

「だって、そうなる気分じゃん!？」

と風紀らしくも無いことを言っていた覚えがある。

「亮平？」

後ろからひんやりと冷たい言葉が聞える。

「何だよ？」

いつもより、真剣な声。

この前もこういうことがあったな。

こういう声をする、何を言い出すか分からない。

「ありがとな」

暖かい言葉が俺の背中に感じた。

「おう」

これが男の友情って言うやつか。

久しぶりに、風紀からありがとって聞いた。

最後に聞いたのも、凜が関係していたな。

そうしているうちに、駅に着いた。

ちゃんと風紀は立ち直れるだろうか。

大丈夫だろう。

風紀は強い男。

それに、明日香がついている。

…なあ、風紀？

お前の彼女は思っている以上に、モテるらしいぞ。

特に、お前の親友からは。

6 - 4 (前書き)

凜目線です。

この高校。

風紀が居る高校なんだ。

たまたま、クラスの名簿を見たときに香坂風紀という名前を見つけた。

たまには、親も役に立つよね。

あの悲劇から私は一度、どん底に落ちた。

あんなことをしなければ…。

後悔しているのは、もう遅いかもしれない。

初めて教室に入った日。

風紀がいた。

最初、入るのを躊躇したの。

だって、あんなに可愛い女の子が隣に立っているんだもん。

何やら話している。

先生が「どうしたの？」って聞いてきた。

「なんでもないですよ？」

と笑みを作って教室のドアを開けた。

一瞬、風紀がこちらを向いた。

それにつられて、女の子も私を見る。

風紀の顔…。

何ヶ月ぶりだろう？

はつきりとこの目で見たのは…。

その顔が、酷い表情だった。

私を見て、酷い表情を…した。

その数秒後、ドアが開く音。

風紀がこの教室から居なくなった。

…気になる。

女の子と風紀の関係が。

一歩一歩近づいてみる。

女の子は私を見たまま呆然としていた。

「ねえねえ」

はっと我に返ったようで、何！？　みたいな顔をしている。

とりあえず、一応確認。

「さっきの風紀：香坂君だよね？」

一応彼女だったら、名前で呼ぶのは失礼と思ったから、上の名前で。

「はい」

冷たい返事。

なんか嫌だな、この子。

「付き合ってるの？」

一審気になっていることを聞いた。

その子は「付き合っては無いですけど」という。

…けど　なんだ？

結構、その曖昧な返事が気になる…。

「そっかぁ」

そう言って、その子との会話を終わらした。

また廊下に向かい、風紀を探す。

居たら、なんて言おうか。

「けどねえ、香坂と明日香ちゃんって仲いいんだよ?」

…せっかく終わらそうとしたのに、またこの話題を持ち出すんですか先生よ。

それにしても、仲がいい…か。

実は、付き合ってたりするのかな?

こんな可愛い子だったらライバル多そうだし、内緒の関係っていうのもあるかもしれない。

私は一度、担任室へ行った。

この先生はよく分らない。

担任室に行き、ソファーらしきものに座った。

なんとなく居心地が悪い。

落ち着かない。

…この学校に風紀が居ると思ったら。

はつきり言うと、私はまだ風紀への気持ちを吹っ切れていない。

智也とも喧嘩して関係が終わった。

…なんで、私は二人に手を出したのだろう。

もう、嫌だった。

いろんなことを考えていると涙が出てきた。

「ど、どうしたの木村さん!？」

近くにいる、何組の先生か分からないが私の名前を呼ぶ。

「な、何もないです!」

涙を拭いてしっかりと答えた。

タイミングよくチャイムが鳴った。

担任の…なんていう名前の先生だっけ？ その先生が私を引き連れて廊下を歩く。

まだ多少生徒が居るのだが、先生を見ると直ぐ教室に入っていく。

一応不良っぽいのだが、そういうところは可愛らしいね。

教室をガラッと先生が開けた。

それに続いて私が入る。

やはり転入生。

「おおおお！」と言う歓声が起きるのは当然か。

確か、風紀はあその席だったような。

空席。

その隣にはあの女の子、明日香という女の子が居る。

先生にいきなり、自己紹介しろという命令が下った。

最初、この予定は無かったはずじゃ？

しかも、そんな中途半端なフォローはいりません。

好きな子を言うとか、部分とか…。

って、部分ってどういう意味ですか！？

みんなの注目が私に集まる。

う…厳しい。

「え、え」と。この学校のある一部の人は知り合いです。例えば…香坂君とか」

ザワザワとしたのは気のせいだろうか？

その中に、「また、可愛い子に手を出しているのかよ」という声が

聞えたのも…気のせいだろう。

ホームルームが終わり、先生に「風紀君は？」と尋ねると「保健室だよ」との返答があった。

保健室へと向かおうとしたが、転校生を物珍しそうにしている生徒達に阻まれ結局今日一日いけることは無かった。

いや、行こうと思えば行けた。

私は、風紀と会つのを怖がっていただけ。

最初の学校も遠い遠い場所にした。

けど親が「戻っておいで」と泣きながら言うので仕方なくこっちの街に帰ってきたのだ。

学校も終わり、家に戻る。

親から「おかえり」という言葉があった。

私は「ただいま」と呟き、部屋にこもる。

へなつと力が抜けて座るような形になった。

そして、涙を流す。

…風紀。

今日だけで、心の中で何度呟いただろう？

……。

頬を流れる涙が忘れられないと呟いた。

痛むこの心が今でも好きなんだと呟いた。

「ありがとう亮平」

俺は、亮平に駅まで送ってもらった。

ゆつくりとホームへ向かう。

そのまま電車に乗り、自分の家。明日香が待っている家へと向かう。

そつだ。俺には明日香という支えがあるんだ。

くじけることは無い。

まだ、凜のあの思い出は消えていない。

吐き気さえもする。

だけど、何かしなきゃ前に進めないんだ。

俺は、大きく右手を握り締め405号室のドアに手を掛けた。

ガチャといつも聞いている音が響く。

中は真っ暗。

だけど、明日香の靴は玄関に散乱しているが、一応この家に存在しているようだ。

時計に目を向ける。

只今の時刻 18時3分。

そのままその視線を中へと向けた。

俺の部屋のドアが開きっぱなし。

「…泥棒か？」

そう呟きながら家の中に入る。

リビングに行ってみると、明日香の鞆が放置してあるだけで物をあさった形跡は無い。

その前に明日香は何処に行った？

明日香の部屋の前まで行く。

そこまで行くのに思い足取りだった。

今日は…あまり話していないな。

凜が出てきたせいで、明日香にも迷惑かけた。

「ごめん…」

ドアに自分の頭をもたれさせながら目を瞑る。

コンコンと右手でドア叩く。

その叩いた衝動が、自分の頭にまで響き渡った。

いつもなら明日香は元気良く開けてくれる。

だけど今日は…

音が無い。

誰も居ない。

…呆れて出て行ったのか？ 明日香。

ゆっくりとドアノブに手をかける。

ひんやりと冷たい感触が自分の神経に伝わった。

ドアノブを回す。

そのドアノブを回すという動作だけで全部の筋肉を使い果たしたみたいだった。

ドアを開けようとする俺。

ギギギギギギと音が鳴る。

そのスピードは遅く、自分の心の中を表している模様。

勝手に入ろうとは思わない。

見るだけだ…と、自分の心に言い聞かせた。

完全にドアが開ききるまでは目を瞑ったままだった。

ガチャッと音がして、完全に開いたのを教えてくれる。

ゆっくりと目を開けた。

「…明日香」

明日香はベットの上でうつ伏せになっている。

寝ているのだろう。

小さい寝息が聞えた。

「明日香…」

近くによって見る。

べ、別に襲うとかそんなんじゃないんだぞ!?

ただ、近寄るだけ。

明日香の顔を見たかったのだ。

うつ伏せになっているものの、明日香は顔を右に曲げ、息が出来るようにしている。

また、そこが可愛い。

そつと顔を覗き込んだ。

あまりにもその安らいだ顔に俺は全体の力が抜け、ストツと隣に座り込む。

明日香の寝顔が俺の視界いっぱいに写りこむ。

そしてあの日以来、始めて俺は自ら女の子に触った。

頭を撫でるという行動。

何故か、身体自体は拒否らない。

逆に心が落ち着くようだった。

そのとき、「風紀…」と小さく聞えたような気がした。

誰か呼んだ？

周りを見渡すが誰も居ない。

「風紀…風紀…」

よく聞いてみると明日香の声だった。

「明日香」

自分の名前を呼んでいる。

どんな夢を見ているんだ、お前は。

何故だか笑みがこぼれた。

おかしくて。

何故か笑えて来た。

心から笑えて来た。

その笑い声は、半径2Mぐらいまで聞えない程の笑い声だったが、
久しぶりに笑った感じがした。

「クククククククク」

駄目だ止まらない。

笑いが止まらないんだ。

止まらなさそうだったので、一度大きく息を吸って心を落ち着かせた。

それでも笑えてくる。

明日香の顔をもう一度見ると、幸せそうに笑って寝てやがる。

だから、お前はどんな夢を見ているんだ。

頭を撫でるスピードははるかに遅いスピードだったが、ここにいる時間は永遠のように思えて、短く感じた。

ベットに頭をおく。

明日香との顔の近さ、大体15cm。

最初、会ったときだったら、こんなことは出来なかっただろう。

明日香じゃなかったらこんなことは出来なかっただろう。

そうだな。明日香にはいつか、お返ししなくては。

そう思い、明日香の寝息を聞きながら目を瞑ってしまった。

「う…」

目を擦る。

「朝か？」

そう呟いてその場に立つ。

すると、背中に感じていた重たいものがするっと落ちた。

布団。

明日香か。

また、笑いがこみ上げてきた。

只今の時刻20時。

ガチャッと明日香の部屋のドアを開く。

キッチンからは料理をする音が聞えた。

「あっ！ おはよう！ 今ご飯作ってるから、待っててね！」

と明日香が満面の笑みで俺に言う。

「おう」

といつも通りの返事。

ご飯も出来上がり、ご飯を食べる格好になった。

明日香と向かい合いながら座る。

「風紀？」

そと明日香の口が開いた。

「何？」

「あの…ごめんね？」

……。

何で明日香が謝ってるんだ？

「風紀の力になれなくて…」

…何言ってるんだよ、明日香。

「私…」

そういいながら、明日香の声は泣きそうな声に変わっていく。

「何言ってるんだよ。明日香は、俺の支えだから。お前は居てくれるだけで十分なほどに、力になってくれているから」

少し照れくさい。

そのまま俺はご飯を口に運んでいった。

「明日香？」

そっと思いつく。

「何処に行きたいところある？」

明日香の箸が止まった。

「え？　ん〜と遊園地かな」

遊園地か。

「じゃあ今度の日曜日、遊びに行くか？　いつものお礼ってことで」

…。

「そこまで引かなくてもいいだろ」

俺がそういったのは、明日香の椅子がいつきに後ろへと下がったからだ。

そこまで驚かれると結構ショックなんですけど。

「う、うん」

微妙だって、その返事…。

「行くなってことでいいですか？　明日香隊長？」

「はい。それでよい風紀軍曹よ」

軍曹って何ですか軍曹って…。

心の中でツツコミを入れた後、俺はご飯を食べ終わった。

「…おい。はしゃぎすぎだろ」

只今、明日香と二人で遊園地に。

「だって遊園地だよ！？　すごく久しぶりなんだもん！」

久しぶりって言ったってなあ。

周りの人が注目しすぎなんだって。

何で、くるくる回りながら歩いてるんだよ！

そんなことするのは、せめて小学生までにしとけ！

「ねえねえ！　あれ乗ろうよ！」

明日香は人差し指をその方向へと向ける。

その先には、90Mはあると思われるジェットコースターがあった。

「はい」

今日は、決して明日香に逆らえない。

明日香が俺の何歩か先を歩く。

こう見ると、明日香と俺は彼氏、彼女って言う感じの関係なんだろうな。

「早く〜！」

明日香はいつのまにか走っており、長蛇の列に並んでいる。

…ま、ま、待ち時間1時間。

はつきり言うと、俺は待つ時間が一番嫌いだ。

1時間って何だよ1時間って。

嫌になってくるなコレ。

「風紀〜」

只今列に並んで40秒。

「なんだ？」

「喉、渴いた」

「そうか」

俺と、明日香は見つめ合う。

いや見つめ合うというより、お互いの心を読んでるって感じの風景。

「…う」

「はい！ 私の勝ちね！ ほら、買ってきて！」

「買ってくればいいんだろ」

大きく頷く明日香。

やっぱり、あいつの顔なんて見るんじゃないかと後悔。

「何がいい？」

「ん」とねえ…風紀のお勧め！」

「俺のお勧めだったら、炭酸飲料にしちまうぞ？」

「風紀軍曹、それだけは勘弁してください…」

因みに明日香は炭酸というものが飲めない。

「仕方ないな。明日香二等兵」

意味不明な会話で、周りがクスクスしているのが分かる。

恥ずかしすぎる。

今すぐにでも、ここから逃げなくては。

「じゃあ、お茶でいいな？」

「うん！」

もう、これしかないという笑みで明日香は俺に言った。

周りの男子共の目が光る。

明らかに明日香のその笑みに惚れただろう。

その目を光らした男子共の彼女であろう女子が、目を光らした彼氏に蹴りを入れている。

まあ、明日香のあの笑みを見て振り向かない男子はいないでしょう。

俺は小走りしながらお茶を買いに行く。

売店のおばちゃんに

「お茶！」

と一言。

その5秒後。

「と、アップルジュース！」

因みにアップルジュースは俺が飲む。

こゝ子供っぽいと思うなよ！？

林檎は美味しいのだ。

「合計、400円です」

ポケットから財布を取り出し、銀色のお金を3枚取り出し、他に銀色のお金が無いか確かめる。

…。

仕方なく茶色をしたコインを5枚取り出し、銀色の穴が開いた物を取り出した。

それを店員に渡す。

多分、その店員はどうせ『細か!』とか思っているんだろうな。

お釣りはなし。

やはりA型の特徴なのだろうか。

1000円出して、お釣りを600円もらっておけばいいのに、と思う奴らがいるだろうけど、俺はそういう細かいことは無理だ。

家に帰ると、貯金箱に1円と5円と10円玉を入れるのだ。

それで財布の中身を少なくする。

…俺はなんの話をしているのだろうか。

そんなことは後にして、俺はお茶とアップルジュースを手に取り明日香の元へと戻る。

明日香の前に男二人がいるのが確認できた。

ナンパか？

まあ明日香は可愛いからな。

ナンパぐらい…って。

「明日香！」

「あう、風紀い」

その男二人が俺の方を睨み付ける。

「誰あんた？」

右に居る男が俺に向かってそう言った。

「友達だけど？ あんたは？」

聞き返してやる。

「はあ？ 何で教えなきゃいけないんだよ。まあ、友達ならいつかこの女借りてくぜ？」

…はい、ブツチーン。

はいはいはいはい。

殺しますよこの男。

「駄目にきまつてんだろ？」

笑顔で俺は言う。

「はあ？ やだね」

…。

右手、抹殺準備OK。

左足、抹殺準備OK。

「やめろって」

ビービービービー！

最終警告です！ 最終警告です！

「友達のくせして、なに彼氏面してんの？ うざいよ、おめえ」

左側にいる男がそういった。

…。

ドカーン。

俺は明日香にお茶とアップルジュースを渡し、下を向いてこう言った。

「否無躊躇。右左死簾」

通訳（躊躇するなんてナイナイ。右の奴と左の奴、死す。）

「何、呟いてんだよ？」

右のやつが言った。

その瞬間。

目には見えぬスピードの右の野郎に右フック。

フックを戻す反動で回転し、左に居るやつに肘打ち。

左の奴は一発KO。

右の奴はまだ意識があつたので、左足で上段蹴り。

死亡。

「ふう……」と大きく息を吐いてこの惨劇は終了した。

その場に倒れている奴は放っておくとして、俺たちは順番が回ってきたジェットコースターに乗る。

1時間と言っていたが、15分程度でまわってきたな。

それもそのはず、あの惨劇をした後、前にいた集団ほとんどが消えていったのだ。

明日香は驚いている表情。

「あ、明日香が怖がってたから。そういつときにしかないぞ？俺は」

また明日香の笑みが見れた。

「ありがとう！」と言ったときに。

その日のお遊びは無事終了した。

因みに、今日一日俺の奢り。

所持金がいつきになくなりました。

6 - S (後書き)

更新が遅くなってしまい、申し訳ございません。

読んでくださって、ありがとうございます。

本日も2話更新させていただきました。

ご注意ください。

「起立。礼」

クラス内の誰かがそういい、学校が始まった。

俺はしっかりと教室に居る。

隣には明日香。

まあ、明日香は最初のこの時間に興味が無いのか、俺に色んな話をしてくる。

なんで、こつも話が次から次へと出て来るんだよ。

やっぱり、女は不思議だ。

「風紀と明日香ちゃんは、静かにしなさい！」

…先生に指摘されてしまったではないか。

い、いや、俺は一言も喋っていないのですが。

「話なら後にしなさい！」

だから、喋ってないってば。

教室内からクスクスとか言う、笑い声が聞えてきた。

注意された明日香は、エヘッみたいな感じで先生に謝ってる。

「はぁ……」

…こいつが俺の支えかよ。

そんなことを考えていると、先生の長い説教も終わり、休み時間になった。

ねみい…次の時間は移動教室じゃないしなあ。

そのまま、机の上に伏せてしまった。

「風紀！ 風紀！ 授業始まったよ！」

明日香が俺の肩をグングン揺らしている。

…え。

「う…う…」

…ちょ、待つて。

「うつわぁ！…！」

身体中にひんやりとした汗の冷たさ感じられる。

…。

直ったと思ったんだけどな。

やっぱ、直らないんじゃないか？ これ。

因みに俺の今の状況は、その場に仁王立ち。

今は生物の時間。その教科先生の7割がたは変な思考回路を持つといわれている授業だ。

もうひとつ言わしてもらうと、俺の椅子は後ろの机に当たって果てしなく吹っ飛び、机は前に倒れている。

しかし、誰一人笑うものは居ない。

…逆にそれはそれで嫌なんですけど。

選択肢は、

自ら笑う。

しかし、どうしようものか、この状況を。

ドラ もんを呼び、時間を戻してもらおうとしよう。

…無理だよな。

どうするよ、俺！

「香坂君、怖い夢でも見たのかね？」

生物の頭にあるはずの毛が無い先生が俺にそういった。

しめた！

「いえ、先生。僕は、先生の髪の毛が増える夢を見てしまいました」
どつと、笑い声が上がった。

フツ…先生。

俺のために犠牲になってくださって有難うございます。

みんなが笑っている最中に、俺は前に倒れている机に手をかける。

その次に、椅子を…。

「はい、これ」

ずっと目の間に椅子が出てきた。

「ありがとう」

そう言い、その渡してくれた人の顔を見る。

そして、次の瞬間目をそらした。

「…凜」

さっきまで聞いていた笑い声も、しんとなって聞えなくなった。

「大丈夫？ 風紀」

「う、うん」

本当に、笑い声が聞えなくなった。

「風紀、私ね…」

そう凜がつぶやいたのと同時に、明日香の声が俺の耳に入ってきた。

「風紀。早く座って！」

その言葉でスーと我に戻った感じがした。

「お、おう」

椅子を手に取り、明日香の隣へと座る。

鳥肌がたっている。

吐き気も。

明日香：助けてくれ。

授業も何事もなく始まった頃だった。先生の顔が少し赤かったけど、俺はすっと、周りから見えないように隠しながら、明日香が俺の手をつかんだ。

…明日香？

あの時と同じように、気持ちが安らいだ。

さっきのとは違い、心が安らいだ。

何でだろう。

そして、次の瞬間左手に感じていた感触が消えた。

繋いでいてくれた時間は数秒だろう。

その時間が、長く感じたのは言うまでもない。

次の休み時間。

幸助が俺の元にやってきた。

「風紀？」

「何でしょうか？」

「お前、凜ちゃんとどういう関係なんだ？」

……。

何で、そんなこと聞くんだよお前は。

空気読めよ。

「どういふ……って、どんな関係でもないぞ」

「そんなこと無いだろ。凜ちゃんの自己紹介の時、お前と知り合いだっけ」

「知り合い…それだけだ」

俺は冷たく言い放った。

幸助も俺の殺気に気づいたのだろう。

そこで会話を終わらした。

その日の放課後、明日香と亮平と共に部活へ向かう。

まだ、顔を合わすのは無理だ。

だけど、俺の側には明日香がいる。

大丈夫だ。

亮平が特別教室のドアを「ちわゝす」と言いながら開けた。

目の前には部長。

その後ろに龍先輩が。

今日は、夏休み明けてからの初めての部活。

昨日、俺は早退してしまったが、運が良いのか悪いのか部活が無かった。

「あつ！　こんにちわ亮平君と明日香ちゃんと大根役者」

部長が嫌味ったらしく俺にそういった。

「大根役者なんてここにいらっしゃいますか？」

俺は言い返す。

「あら、自分で分かっているのは馬鹿の証拠なのかな？」

…う。

「はいはい。分かってますよ。今回、映画の主演を務めて、部長を惚れ直させたこの風紀様でしょう？」

「誰が、惚れ直しただって？　私はそんなこと一言も言っておりませんわよ」

…部長、キャラ変わってますよ。

「では皆がそろった所で、今日の部活を始めます！」

みんなの方を向き、部長は言った。

部活も、いつも通り過ぎていった。

何事もなく、過ぎていった。

映画鑑賞もいつものように見ずに帰ろうと下駄箱に向かっていると
きだった。

「風紀！早く」

明日香の声が下駄箱の方面から聞えてくる。

「ご、ごめん！明日香：忘れ物したから！先、行ってくれ」

今、出来るだけの声で明日香にそう言った。

「わかった」

明日香は俺が今、事件に巻き込まれていることは知らないだろう。

「風紀…」

凜の声が俺の後方から、静かに聞えてきた。

部活が終わり、俺は明日香と帰るため、特別棟の前で明日香の帰る準備が終わるのを待っていた。すると、横から聞き覚えのある声が耳に入ったのだ。

「風紀、下で待ってるから」

と。

その声は確かに、俺の知っている声。

凜の声だった。

幻か？　と思っただが、実際明日香と一緒に下に行ってみると凜がいた。

その場で止まってしまった俺。

明日香は、俺が止まっていることに気付かず歩いて行った。

「なんだよ凜」

早いうちに、決着をつけなくてはいけない。

あの日の思い出と。

この気持ちと。

今、吐き気もする。

鳥肌も立っている、胸が苦しい、怖い、逃げたい…。

「私ね…あの時の事、後悔してるんだ」

・・・何が言いたいんだよ、お前は。

「俺は、もう未練はないから」

そう言っつて、その場を立ち去ろうとした。

「私は！」

凜の大きな声が俺の耳に届いた。

「私は…まだ…」

まだ？

何なんだよ。

お前は、智也が好きで、俺のことはどうでも良くてあんな事をしたのだろう。

分かってるよ、それぐらい。

だから、俺はお前らを邪魔しないように今まで過ごしてきたんじゃないか。

なのに、智也とあの後別れて。

意味わかんねえよ。

「まだ…好きなの」

誰をだよ。

智也だろ？

俺じゃないだろ？

おれ自身、本当は分かってる次の言葉を待つまでの間、無言の時間が続いた。

「まだ、風紀のことが好きなの！」

…。

俺は、もう…好きじゃない。

お前の事なんか、好きじゃない！

「だから、どうした」

冷たく言い放った。

「だから…私ともう一度…」

「……」

「付き合って欲しいの」

付き合う？ 俺とお前がか？

一度、あんな裏切りをやられて、俺がもう一度お前と付き合っただと？

「ふざけんな」

「ふざけてなんかない！ 私はまだ風紀のことが好きなの！」

あのとときの残酷な風景が思い浮かんでくる。

もう、あんな思いはしたくない。

本当は、お前とも会いたくなかった。

お前の顔なんて、一生見たくなかった！

心が…痛んだ。

あんな思い、一生ごめんだ。

「風紀！……！」

遠くの方から、明日香の音がする。

「風紀！……！」

ほら、また明日香の音が。

バンつと体に衝撃が走る。

「…明日香あ！？」

衝撃の5秒後に俺はそう言った。

そのときに、抱きつかられていることに気づく。

頭がくらくらする。

必死に俺は明日香の体を俺から離れた。

「ど、どうしたんだよ？」

俺の言葉に泣きながら、首を横に振る明日香。

何で、この状況で俺に抱きついたんだ、お前は。

「す…す…す…」

…す？

「すつごいよ！ 下駄箱の中に、変なのが入ってるのお！！！！すつごい怖いんだから！」

…は？

「ねえねえ、来て！ これ、やばいつて！」

そう言いながら、また明日香は俺の手に触れる。

グヒョオオオオ。

明日香に触れられていることを我慢しながら、明日香の下駄箱の前まで連れて行かれた。

「…なんだコレ」

明日香が驚くのも無理は無い。

男性からと思われる手紙が、下駄箱の外にまで漏れ出しているのだ。

「いつも、こんななのか？」

明日香は一生懸命首を横に振る。

「いつもはもつと少ないよ！！！！」

もっと少ない!!いつも入ってるのか。

「お前、可愛いからな。しょうがないよ。今更気にするな」

すると、横からボン! と何かが破裂した音が聞えた。

それは、明日香方面であり、その明日香本人なのだ。

「どうした?」

顔が真っ赤になっている。

「…まさか、照れてるんじゃないよな?」

さっきより、明日香の顔が赤くなった。

クククク。

これは面白いな。

「風紀…」

後ろのほうから声が掛かった。

「何?」

と言いながら勢いよく後ろを向く。

…凜。

やっべ、存在を忘れてた。

「諦めないから！」

そう言っつて、凜はその場から立ち去っていった。

その凜の姿を明日香が見ると、「どうしたの？」って聞いてきた。

俺は笑顔で「何も」と答えておいた。

7 - 2 (後書き)

読んでくださってありがとうございました。

ご感想をいただけるとかなりの活力になります。

よろしかったら、ちょこつと書いていつてあげてください。

本日も2話更新となりました。

ご注意ください。

大変な事になった。

本当に、大変な事になった。

いつもなら、亮平、幸助と共に優雅な昼休みを過ごすのに、今日は一段と大変だ。

何で、こいつがこんなに言い寄ってくるんだ。

しかも、キャラが変わりやがった。

…女難。

また始まりやがったか。この野郎。

何で神様は俺に意地悪をするのですか！

「ねえねえ、風紀」

鳥肌が立つのは変わらない。

「どう？ それ美味しい？」

吐き気がするのも変わらない。

「もう、どこか行ってくれ」

冷たく接する俺の態度も変わらない。

「風紀！ あゝん」

凜が俺の手元にある弁当から玉子焼きを取り出し、俺の口元まで持ってくる。

「だから、やめろって凜！ もう、中学時代じゃないんだよ！ しかも…なんで、俺にこんな事をするんだ！」

シーンと静まりながら、先ほどから皆が俺を見てくる。

く…この視線は痛いぜ。ガッツ隊長。

『ガッツ隊長って誰だよ！』と、この状況でも自分にツッコミを入れている俺。

「中学の時は、嫌がらずしてくれたのに！！」

凜。お前には罪悪感というものが無いのか？

「だから、中学と今は違うって！」

「でも、私は今でも風紀のことが好きだよ！」

……。

寒気倍増。これ、四文字熟語に使えるだろうか。

「俺は、お前なんか好きじゃない」

はあ…さっきからこの言葉を何度言ったことか。

モテる男は辛いつてこのことか？

俺と、凜以外に食事をしている奴は見当たらない。

弁当は出ているのに、何故皆食べないのだ。

てか、食う寸前で止まっている幸助…何者だ？

そのうち、よだれがこぼれちまうぞ。

「せつかく私が作ってきたのに！」

……。

雰囲気は明日香に似ているんだけどな。

あの明日香でさえ、食べるのを躊躇している。

「誰が、お前に頼んだ。もう、弁当とかいらねえから」

「はい」

本当に分かってるのか？ こいつは。

「分かったから。あゝん」

今度はミニトマトを俺の口元まで持ってくる。

「だから！ やめろって！！！」

はあ…。

俺は凜が俺のために持ってきた弁当ではなくて、自分の弁当を持ち、その場から脱走する。

別に、教室で食わなければならないという校則はないのだ。

その後ろを凜がついてくる。

だが、しかし！

ある作戦があるのだ。

見てろよ、凜。

…別に見なくてもいいけど。

俺はもう一度自分の教室に入った。

その後ろを凜がついてくる。

入ってくるのと同時に、逆の方のドアから出た。

まあ、ここで凜は少し迷うだろう。

ダッシュで3組へ。

そのまま身を潜めて、凜が探し終えるのを待つ。

……。

……。

……。

逃げ切り成功。

2組に戻るのには危ないな。

3組で食事を済ますか。

確か、3組って言ったなら五十鈴がいたっけ？

皆さん、影は薄いですが、五十鈴を忘れないでくださいね。

俺は五十鈴を探すため、周りを見渡す。

「……発ッッ見！」

できるだけ小さな声で言った。

五十鈴は……ん？

一緒に食べていた女の子と、バイバイしているようだ。

弁当を食べきったのか？

俺に近づいてきてる。

「やつほ。風紀君」

「おう、五十鈴」

「どうしたの？ こんな所に一人で」

「いや、2組で色々と会ってな。五十鈴と一緒に弁当を食べようかと」

見つめ合う俺たち。

決して、睨んでいるのではない。

…睨まれてもいないこと祈る。

「罰ゲームじゃないよね？」

「勿論違う」

「じゃあ、食べよう！」

五十鈴は俺の隣に座った。

俺も座る。

「ねえねえ。2組の木村さんって風紀君の元彼女なの？」

…。

何処までその話は届いてるんだ。

俺は無言で頷く。

右手で持った箸で玉子焼きを突く。

そして、一口でパクリと食べた。

「五十鈴も元カレとかいるだろ？」

「う…うん」

誰もが、昔の恋は嫌なのか？

五十鈴の顔が一瞬曇った感じに見えた。

その後も、パクパクと箸が進み、口も進み、楽しい昼食となったのだ。

食べ終わり、2組へと戻る。

ドアをガラッと開けた瞬間、全員が俺の方を向いた。

この視線、何時になっても嫌いだ。

しかし、その視線はなぜかいつも違う。

ある一部の男共の目に、炎が満ち溢れていたのだ。

…何かありましたか？

俺はそういわんばかりの顔で、自分の机に戻る。

すると、先ほどの男共が俺の机を囲んだ。

怖いですよ。

しかも、知らぬ顔ばかりだ。

…2組の野郎はいないらしい。

その中のリーダー的存在の男がこういった。

「ちょっと、顔かせ」

「…。この顔、取り外しできないんですけど」

少し冗談で言ってみる。

「なめとるんか、お前は」

「いえいえ」

挑発はしないで置こう。

言われるままに、俺はその集団についていった。

嫌だなあ。

着いた場所は喧嘩の名場面、体育館の裏！

さっきの、リーダー的存在の男が俺に一步一步近づいてきた。

「お前、しゃしゃってるんじゃないよ」

…は？

しゃしゃってるって何語だよ。

日本語をよろしくお願いします。

「そんなに女にもてたいかよ。その態度がむかつくんだよ。ああ？」

よく、女の子が格好いい子と付き合って、嫌がらせされるというパターンに似てないでしょうか？

こんなこと、男にでもあるんだな。

「なんで、てめえが明日香ちゃんと凜ちゃんと一緒にいるんだよ」

…知るか。

明日香は同じ家だし、凜は勝手に俺についてくるだけ。

「もう、あの子等に近寄るなよ？」

…うぜえ。

凜限定の場合は大歓迎なのだが。

「何だよ？ お前、自分がもてない事の腹いせか？ バカだな」

「ああ？ なんだと！ そんなに分かんないんだったら、身体で分からせてやるよ。やれ！」

そのリーダー的存在の奴が子分の様なやつらに言った。

「やれやれ、あんまり荒いことはしたくないんだが。殴られるのは嫌だしな。仕方ない」

襲い掛かってきたのは4人。

綺麗に、横に並んで俺を殴りに掛かってきた。

まず、一歩下がり、間合いを取る。

右手で、右から二番目の男を殴った。

バコン！

注意

ここからは見るも無残な光景なので、音だけでお楽しみください。

バン！

「っ……」

ズゴン！

「あうっ」

ビビビズズゴゴゴゴーン！

「うぉぁ……」

「おえええ！」

ドカン！

バシ！ ボコッ！

「う……う……」

バン！

俺は4人を瞬殺し、残る一人のリーダー的存在のやつに近寄る。

「ねえ？ 俺ってモテないよね？」

俺は綺麗な笑顔を作った。

「…は、はい」

「じゃあ、もういいかな？」

「は、は、はい」

「あ、俺が殴ったこと言ったら駄目だよ。他の仲間にもちゃんと言っておいてね」

「は…はい」

「じゃあね？」

「は、は…はい」

バゴーン。

失神。

俺は乱れた服装を直した。

よし、戻るか。

体を反転させて、教室へと足を進めた。

教室のドアをガラツと開ける。

さっきと同じように、俺にみんなの視線が集まった。

だから、この視線嫌いなんだって。

「うゝ」と言い、下を向きながら自分の席へ向かった。

まだ、視線が俺にきているのがわかる。

そんなに珍しいか？

この俺が。

教室にドアを開けて入ってくる奴が。

だったらどう入るんだよ…。

窓から入れというのか？

…視線。視線。視線。視線。視線。

だからそんなに見るな。

俺が席へと戻ると同時に幸助が俺の前にやってきた。

すると、俺の顔をじっと見てこう言った。

「お前、大丈夫か？」

「何が？」

「何が？　って、分かってないの？」

…は？

だから早く俺に用件を言え。

「お前を呼んださっきの人、2年生で最強と呼ばれている男の人達だったりするんだよ？」

…？

ああ、さっきのか。

相当弱いのに、あいつが最強とは…。

この世の中も、終わってたりするんだな。

「へえ」>とだけ答えていた。

幸助が俺の元から去っていくときに「無傷かよ」と呟いていった。

放課後。

「風紀く帰ろうよお！」

そう呟いているのは、勿論凜である。

「俺に話しかけるな。よってくるな。俺は部活だ」

凜にそう言った後、俺は明日香を見つけ、そばに寄った。

「風紀、今日大丈夫だった？」が、明日香の第一声。

「…まあ」

明日香は、前に俺の喧嘩を見て強さを知っている。

それほど、心配していないらしい。

その話もその時点で終わった。

特別教室へと向かう。

まあ、簡単に言うと部活へと向かう。

「こんにちは」

いつものようにガラスとドアを開けた。

……。

「ど、どうしたんですか？」

俺がそう言ったのは、まぎれもなく俺に全員の視線が集中している

からだ。

「お前、あの最強の男やっつけたのか？」

びっくりだ。

いつも遅い龍先輩が珍しく早く居る。

…って、驚くべき所はそこじゃない！！！！

「…え？」

何で知ってるんですか？

「今、何で知ってるんですか？　とか思っただろ」

…う。

言い返せない。

「幸助が、みんなに言っているよ」

あいつか。

幸助を0.2秒で探し、呼び出す。

「おい、幸助。カモン」

「あ、あい」

幸助は怪獣を見たかのような顔をしながら俺に近づいてきた。

まあ実際にその顔を見たこと無いんだけど。

その前に、怪獣を見たことはないし…。

「な、なんですか？」

何故か敬語。

「お前に言いたいことがある。ちょっと来いよ」

そう言い、俺は廊下に呼び出した。

「いやああああ！」

何か悪魔にどこかへと連れて行かれていくような悲鳴をあげる幸助。

まあ俺は…いや、話が長くなるからやめておこう。

強制的に廊下へと引つ張り出す。

「ねえねえ幸助君。そのことはもう話しちゃ駄目よ？」

一応、笑顔で幸助に言う。

幸助はビビッて、俺の顔を見ることも出来ない様子。

「分かったら返事」

少し、冷たく言う。

「は、はい！」

……。

なんかそこまで怖がられると俺も嫌なんですけど。

まあ…これも、これでいいか。

笑顔で幸助の顔を見て俺だけ教室に入る。

またもやみんなの視線が俺に集中。

やめてくださいよ…。

「こ、幸助は？」

悠太が俺の顔を見てそう言った。

まあ怖がられるのも無理ないのかな？

「ああ、なんか知らないが、外で魂放浪している」

意味不明な言葉を悠太に返すと、へ？　みたいな顔を作っている。

いつも悪ふざけの挨拶をしてくる部長はというと…。

「おい！　馬鹿風紀！　そんなことして、お前が退学になってみる。続きが撮れないだろう」

が！」

俺の身体をバシバシ近くに置いてある金属バットで殴ってきた。

…部長。

何でそんなものがあるのですか！？

意識朦朧としながらもそんなことを考えていた。

「ふ…き？」

何処からか明日香の声が聞えてくる。

「風紀…風紀…」

しっかりと聞えてきた。

目をぱつとあける。

視界には四角の模様がいっぱい並んでいる。

まあこの風景。

「保健室か」

大きな溜息を着いた俺。

「風紀…」

横で寝息が聞える。

ということは、こいつは今寝ているのか。

「明日香。待ってるなら、ちゃんと起きてるよな」

自分の体を起こす。

う…。

ちくつとする痛みが全身に走った。

「スースースー」

しかし、その痛みは一瞬。

明日香の方を見ると「可愛い顔してやがる」とうっかり呟いてしま
う俺。

「明日香…起きろ」

耳元でそつと呟いてみる。

「ん…あと少し時間ちょうだいよお」

寝言なのか、本当に言っているのかよく分からない言葉が返ってき

た。

「そんな、返事いらねえ」

笑い堪えてそう言った。

その言葉に反応したのか、明日香がむくつと起きて目を擦り始めた。

「ん…風紀？」

「ああ俺、風紀」

「だ、大丈夫なの！？」

「何が？」

そう答えた後、明日香は細かく教えてくれた。

俺が気絶したときのことを。

簡単に説明すると、部長が遊び半分で、金属バットで俺を殴っていたところ、明日香が止めに入って俺は気絶したらしい。

…もっと簡単に言うと、俺は明日香に抱きつかれて気絶したことになる。

恥ずかしい。

「明日香。帰るか」

大きく明日香は頷いた。

ぐ…まぶしいぜ、明日香。

その姿が、憎い位に可愛い。

「クソ～～～！」

無意味に保健室で叫ぶ。

明日香は不思議そうな顔をしていたけど、俺はその顔を見無視することにした。

7 - 4 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。
本日は2話更新となりました。
ご注意ください。

「今更ですが、話し合いをしたいと思います」

文化委員である幸助が教室の前に立ってそう言った。

何を？ という話だと思うが、今俺たちは文化祭でする発表行事を考えている。

「一年生ということもあって、最初はどんな事をするか分からないですよ？」

皆、一斉に頷く。

「展示という手もあるんですけど、やっぱり出店とかがいいよね？」

皆、一斉に再び頷いた。

「で、何がいいか、アンケートをとりたいと思います。今から回す紙に、何がいいか書いてください」

言い終えると、幸助は紙を配りだした。

ん、何にしよう。

漫画喫茶？

…本とか持ってくるのが、面倒だな。

ふと、隣にいる明日香の紙を覗き込む。

「…へ？」

小さな声が、俺の口からポロつとこぼれた。

何故か？

だって、明日香の紙には、猫耳メイドカフェ

そう書いてあるんだもの。

何故、そんなものを書いたのかは不思議だが…明日香のメイド姿。

考えていると、頬の肉がたるんだ。

って、何を妄想してんだ、俺。

まあ、明日香のその格好をしているところを見たいし、俺も猫耳メイドカフェと。

「では、後ろから紙を集めてきてくださーい」

幸助が俺が書き終えた時間を見計らったかのようにそういった。

「では、読んでいきまあす！ 映画、喫茶店、コスプレ喫茶、ドリンクバー、ストラックアウト…猫耳メイドカフェ、じゃんけん大会…猫耳メイドカフェ…」

まわりもザワザワしている。

一番多い漫画喫茶と、猫耳メイドカフェが3票ずつ。

まあ、後一票は誰が入れたというのは置いて、多数決ということになった。

幸助が皆を机に伏せさせ、どちらがいいか手を上げようと命じた。

「漫画喫茶がいい人！」

バツと言つ音が近くから聞えてきた。

7秒後に、「はい下ろして結構です」という声が聞えた。

「猫耳メイドカフェがいい人！」

俺はゆっくり手を上げた。

「はい、下ろして結構です」

早っ！

俺が手を上げてからコンマ2秒ぐらいだろう。

まあ、数える秒数を考えて、漫画喫茶に決定のようだ。

そう思い、俺は顔を上げた。

前の黒板に書いてあったのは、

漫画喫茶1人。猫耳メイドカフェその他。

おお！ 猫耳メイドカフェだあ。

つて、ちょっと待てえ！

一人数えるのに、7秒ぐらいも掛かったのか？

幸助の目はもう老化している…のか？

「というわけで、猫耳メイドカフェに決定です！ 拍手〜！」

パチパチパチと喝采が沸いた。

「やっぱり、女の子がメイドするってことでいいよね？」

男共が大拍手。

やっぱり、明日香のメイド姿。

見たいな〜！

…いかん、いかん。

エロ親父になる所だった。

実はエロ親父になるのに、時間は掛からなかったりするわけだが。

そんなことはどうでもいい。

明日香の猫耳メイド。

萌え~~~~！

って、何を言わしているんだ。

「どうしたの風紀？」

隣にいる明日香が俺に話しかけてきた。

その顔を見ると、一瞬猫耳メイド姿の明日香を妄想。

ブツツ！

鼻血が、たらあと出てきた。

「だ、大丈夫！？ 誰かティッシュ持ってない？」

明日香が俺を心配して、周りを走り回ってる。

「風紀君が持つてるんじゃない？ 名前が風紀だし？」

沙希がそういった。

「名前は関係ない。それに、風紀は持ってないよ。沙希持ってないの？」

「うん。持ってない」

「誰か持ってない？」

大きな声で叫ぶ明日香。

もう少し声のトーンを下げてても宜しいのではないかと。

と言うか、その前に明日香。

「おい、明日香！」

俺が明日香を呼ぶ。

しかし、明日香には俺の声が届いていないらしい。

「明日香〜！」

ピクツと一瞬反応した明日香だったが、そのまま俺を無視したのだ。

「明日香ちゃああん」

少し俺の声のトーンが落ちる。

「な、何！？」

やっと気付いてくれたようだ。

「も、もう止まったから大丈夫」

みんなの視線が俺に集まる。

い、いや、そんな目で見られても困るんですけど。

何でそんなに早いんだ？ 見たいな目をして。

まあ、俺の過去にも色々あるのさ。

「そつか…よ、よかった！」

アハハと言いながら、明日香は自分の席に戻った。

「ありがと。明日香」

優しい声で俺はそういった。

まあ、これが常識というものだろう。

やはり明日香はいつものように照れているようだが。

そこが、可愛くてしょうがない。

「では、誰が買い物しに行くか決めたいと思います！」

は〜いという声が教室のあちらこちらから聞えた。

「まあ、文化委員である俺も参加しますから、安心してください！
男女一人ずつということだ」

また、は〜いという声があちらこちらから聞えた。

その数十秒後。

「では、明日香ちゃんと風紀に決定で」

またまた、教室のあちこちから、は〜いという声が聞えた。

…マジですか。

『何で俺が！？』と言える訳もなく、「う〜」と唸りながら俺は机に伏せた。

某スーパーに男女合わせて6人のグループが居る。

「じゃあ、6人居ることだし、分担して買い物しようか」

当然なのだが、文化委員である幸助が仕切る。

その行動がどうしてか、イライラしてくるのは…気のせいだろうか？

それにしても、最初、買出しする人は三人だったはず…。

俺と、幸助と、明日香。

そう、3人だったはずなのに。

「ねえねえ、どうやって決めるの？」

あの無駄に気が強い沙希が居る。

「やっぱり、じゃんけんで決める？」

…なぜか凜もいる。

「まあ、それが一番だな」

俺達のクラスとは別のクラスなのに何故か亮平もいるのだ。

摩訶不思議な面子だな…こりゃ。

「じゃあ、最初に勝った3人と負けた3人で」

また、幸助が仕切る。

う…仕方ない。ここはやっぱり、文化委員だからしょうがないんだ。

そう、仕方ない！

心に言い聞かせて、俺は右手を前に出した。

「最初はグー！ ジャンケンポン！」

6人の声がそろろう。

「お…綺麗に分かれたな」

幸助がボソツと呟いた。

因みに、

俺、グー。明日香、グー。亮平、パー。幸助、パー。沙希、パー。
凜…グー。

…神様。

あなたはここまでして、僕を苛めたいのですか？

…神様。

どうか、どうか、このメンバーだけは避けて欲しかった。

あなたは、悪魔ですか？

こんな悲しい運では、僕は…もう…生きていけませぬ。

「なに、ボソボソ呟いてんだ？」

隣にいた亮平が俺に向かってそう言った。

知らぬ間に、口に出してしまっていたらしい。

まあ、聞こえてなかったのならよかった。

「いや、別に…」

と、亮平に答えておく。

俺が、妄想癖ということは気付かれない。

…うん。

多分、知っているが。

「私、明日香についてきたのに、何で明日香と別行動取らなきゃいけないのよ!-」

沙希が幸助の胸倉をつかみながらそう言った。

おお！ これは天使の叫びか？

沙希がこのまま幸助を言い負かせて、こっちのグループに来ることがあれば、俺は男子達と行動が出来る。

しかし、幸助はそこで反論する。

いつもはしないくせに。

「仕方が無いことだよ。君が僕と共に行動することは運命だったのさ」

「何であんたと私が共に行動することが運命なのよ！ 気持ち悪い」

沙希の腕に鳥肌が見えた気がした。

本気で気持ち悪かったのだろう。

…まあ、沙希の言い分が正しいと俺は思っておこう。

「じゃあ…」

幸助はそっと、沙希の耳元に口を持っていき、何かこそこそと話している。

その話が終わったと思ったら、沙希の口からとんでもない言葉が。

「そ、それじゃあ仕方ないわね…」

何い！！ 何が仕方ないんだ！

俺は、男子等行動。女子等行動の方が良かったのだが…。

何を言っただ…あの幸助野郎。

「じゃあ、明日香ちゃんと凜ちゃんと風紀は、コレネ」

そう幸助に言われて渡されたのは一枚の小さな紙だった。

中をそつと覗く。

どうやら、買い物品の品物らしい。

「メイド服１８着、猫耳１８個、細長い紙を大量、メニューが載るような紙を大量」

…。

細長い紙って何だよ？

メニューが載るような紙は、まだ分かる。

メイド服、猫耳１８つていうのは、女子の人数だろう。

「なあ幸助。細長い紙って？」

考えるのも面倒なので素直に聞いてみた。

「細長い紙って言うのは、オーダーを取るときに必要な紙さ。分かったかい？ 風紀君？」

「はいはい。分かりましたよ」

やっぱり、仕切られるとむかつく。

あとで一発ぐらい殴っておこう。

「では、行つてらっしゃい！」

幸助が、俺たちに向かってしっしとした。

…今は、我慢我慢。

明日香と、凜を後ろに引き連れ、俺は歩く。

まあ、当たり前のように無言状態だろう。

しかし、そんな俺の考えは甘いということを思い知らされた。

「ねえねえ、風紀いゝ！」

凜が話しかけてくる。

ここ何週間か一緒に居る機会が多いおかげか、大分この寒気にも慣れてきた。

しかし！

気持ち悪くなったりするのは、未だに直らず、やっぱり喋りたくない。

「風紀つてばあ…」

…う。

そんな甘えた声を出すんじゃない！ 凜。

「な、何だよ！」

ぱつと後ろを向く。

すると、服売り場に明日香と凜が仲良く服を選んでいる。

…いや前言撤回。

仲良くって感じではなさそうだ。

「これ、可愛くない？」

凜が俺に向いてニコニコしながらそう言った。

「可愛くない」

と俺は言い放つ。

まあ、その言葉に凜がへこんだのは見なくても分かることだろう。

「おい。明日香行くぞ?」

3秒ほど時間があっただろうか?

その、3秒後に「う、うん!」と言って俺に近づいてきた。

しかし、凜は来ない。

「おい…早く行くぞ?」

手招きする。

俺がそうした瞬間、顔がパアと明るくなったのも…って、言うまでもないか。

「まず、メイド服を探すか」

メイド服なんて、普通売っていないだろう。

あの幸助の馬鹿は、何処で買えというのだ。

それに…このお金の量は何だ?

俺は、今までにここまで大金の金を持ったことは無いだろう。

軽く、50万はあるだろうか?

俺がお金をボーと眺めていると、明日香が俺の心境を察したかのように、このお金の多さの理由を話し始めた。

「予算は、クラスの文化委員でじゃんけんして決めたらしいよ」

どんな学校だよ…。

「勝った順に、値段が決まっているんだってさ。私達のクラスは2番で100万円寄付してもらったんだって!」

自慢げに話す明日香。

…う。

明日香のその可愛さに俺は眼がやられるかと思ったよ。

それにしても、1番のやつらは何万円もらったんだろうか？

「えっと、因みに1番のクラスは500万だって」

…え？

ご、ご、ご、500万!?

なんじゃそりゃああああ!!!

俺等の学校の理事長は、金銭感覚が最早なくなってるのか？

たかが、学園祭の為に500万。

いや、俺たちと、その他大勢のクラスをあわせると、軽く1000万円ぐらいになるのだろうか？

もったいない…。

色々考えていると、大分前方の方から凜が俺の名前を呼ぶのが分かる。

「風紀いいいいい！」

「何だよ…」と言いながら俺は凜に近寄る。

「これこれ！」

凜はそう言って、俺にある物を見させた。

「…」

「ど、どうしたのお？」

凜は俺の顔を覗き込む。

俺が黙ってしまったその理由は…。

「な、何であるんだよ？」

メイド服と思われる物体が凜の手の中にあつたからだ。

それに続いて、猫耳と思われる物体も…。

「そこにあつたよ」

「マ…マジ？」

「マジ」

…あるんだ。

メイド服と猫耳がここに。

おかしい…おかし過ぎるぞ。

8 - 2 (後書き)

昨日、更新をさぼってしまい、申し訳ございません。
どうしても、時間の余裕がなくて…。
読んでいただき、ありがとうございます。

明日香が遅れて、俺たちのところへやってきた。

その足取りは重く、今にも倒れてしまうのではないかといつぐらいにフラフラだ。

「だ、大丈夫か明日香!？」

俺は明日香に駆け寄る。

「う…うん」

言葉に力が無い。

「そ、そうか」

抱き寄せることも出来ない俺。

せめて、肩を貸してあげればいいのだが…。

「ちょっと、あそこで休もう」

俺はそういい、ベンチに座らした。

明日香は、ここまで走ってきたのだろっ。

置いてくるんじゃないかな。

30秒後。

「もう大丈夫！」

すくつと立って、元気をアピールする明日香。

その元気ぶり、まぶしすぎる…。

俺と明日香は凜の所へ。

……。

やはり、凜の手の中にはメイド服が。

信じがたいが、これが真実なんだろう。

すると、俺の頭にある提案が。

「なあ、明日香。それ一回着てみるよ」

冗談交じりで言ってみる。

「うん！！ わかったあ！」

そうだよな…無理だよな。

…って、え？ いいのかよ。本当に着るのかよ。

そのまま、明日香は試着室に入って行った。

数分後。

「ジャーン！」

と言いながら、試着室のカーテンを開ける。

俺の目に飛び込んできたのは、

藍色のひらひらスカートの下に白く、細い足があり、猫耳をつけて秋葉系が見たら鼻血を出すような顔立ち。

俺は、自ら固まっていることに気が付く。

「あ…う…え…と」

俺は、何を言いたいんだ！

何をするでもなく、俺は俯いた。

「ど、どうしたの風紀い？」

凜の心配する声が聞えてくる。

「な、なんでもない」

なんでもないこと無いのに、そんなことを言っている俺。

そして、顔を上げると明日香の猫耳メイド姿が。

「どうかな？」

と言いながら、明日香はくるくる回っている。

率直な感想は、やばいですよ？

育ち盛りの男には、有害ですよ？

「い、いいんじゃない？」

まあ、そんな事も言えず、おれは褒めておいた。

周りの視線が気になるのは…気にしないでおう。

「じゃあ、私も着るう！」

そう言つて、凜は猫耳と、メイド服を持って試着室に入った。
いやいや、もういいですから。

これ以上は耐えられません！

理性を保ちつつ、待つこと2分。

勢いよく、試着室のカーテンが開き、凜が出てきた。

……。

K O

その場で、意識が朦朧とした俺だった。

「だ、大丈夫？」

明日香が俺に近寄ってくる。

「む、無理！」

意味不明な言葉を俺は言う。

「な、何が!？」

明日香がそう聞いてきた。

まあ、当たり前のお返しなのだけど、俺の思考は今ぐっちゃぐちゃ。

自分でも、何を言っているのか分からない。

「お、お前等！　まず、着替えろ！　早く！　20秒以内！」

そう言っつて、その場を逃走した俺だった。

5分後、通常理性を取り戻して、あの地獄の間に戻る。

戻ってみると、明日香と凜は私服にちゃんと戻っていた。

「よ、よし。会計するか」

猫耳18個、メイド服18着を会計所に持っていく。

当たり前のように、店員に変な目で見られ、恥ずかしい思いをして

しまった。

クソッ。

何で、俺がこんな恥ずかしい思いをしなければならないのだ。

涙目の俺に店員は気付いたのだろう。

会計は10秒ほどで終わった。

いや、終わらしてくれた。

大量のメイド服と猫耳を持って、明日香たちが待つ所へ行こうとする。

「はやくう！」と言う凜。

「風紀！」と呼ぶ明日香。

俺は駆け足で明日香たちが待つ場所に行った。

「次は、細長い紙を大量、メニューが載るような紙を大量か」

まあ、簡単に見つかりそうな物だな。

いや、メイド服も簡単に見つかったといってもいいだろう。

探し続けること15分。

…無いぞ？

何で？

1階から7階まであるここに、何故雑貨屋がないんだ？

おかしいだろ。

一度、1階まで降りてみることにした俺は、あることに気づいた。

…地下1階。

エレベーターの横に、ひっそりと書かれていたのだ。

ひっそりと書く理由は、俺にも分からない。

だが、あきらかに地下1階の隣に雑貨屋と書いてあるのだ。

苦労の15分間はなんだったんだ？

「風紀あつたよお！」と凜が叫ぶ。

その発声は、俺がひっそりと地下1階と書いてあったのを見つけてから30秒ほど経ってからだった。

エレベーターで地下1階まで降りる。

その途中、窓ガラスになっているエレベーターで、はしゃいでいる二人。

はあ、と溜息をついたせいにか、エレベーターの動きが変な風になっ

た。

いや、止まった。

「……」

「……」

「……」

「「「え〜!」「」」

3人の声が重なる。

「と、止まったよね!?!」

と言ったのは凜。

一番焦っているように見える。

「うんうん!」

と言っているのは明日香。凜の次に焦っていると見られる。

生憎、他の乗客者は居なくて、俺たち3人だけ。

俺は、冷静を取り戻して、エレベーターにある非常用のボタンに手を掛けた瞬間。

ガタン!と言い出してエレベーターが動き始めた。

「「「へ?」「」」」

と、またもや3人の声が重なった。

地下1階に行くと、何事もなかったような行動をするお客と店員。

いや、何かがあったことを知らないのだろう。

明日香と凜も、先ほどの出来事を忘れたかのように行動している。

どうなってるんだあ！

と、心の中で叫ぶ。

しかし、その心の叫びは無情にも誰の心に響かなかった。

「風紀いいい！」

メイド服の時と同様、遠く離れた所にいる凜が俺を呼ぶ。

しかし、同じ過ちは二度とやらないのが俺。

今度は明日香と一緒に凜の待つ場所へと向かった。

今度は驚かない。と心に誓っていたのに…。

如何にも、メニュー用です！ と、言わんばかりのものがある。

それに続いて、如何にも、注文を取る紙です！ と言わんばかりの

紙もある。

「……………」

「またもや驚いてしまった自分が情けなくて、涙目が倍増した

8 - 4 (前書き)

明日香視点です。

なんだか…変だ。

ずっと先に居る凜ちゃんから「風紀いいいいい！」っていう声が聞えた。

風紀は「何だよ…」と、言いつつも駆け足で凜ちゃんのほうへ行っ
た。

胸が苦しいよ。

何でだろう??

フウキ…置イテカナイデ。凜チャンノ所へ行カナイデ。私ノ側ニ居
テヨ。

フウキ、助けテヨ。

ワタシ…。

ワタシ…。

わたし…。

私、変だ。

今、風紀と凜ちゃんはメイド服らしきものを二人で見ている。

二人で…見ている。

風紀が凜ちゃんと一緒にいるとイライラしたり、胸が痛い。

嫌な気分になる。

…病気だ。

痛さの原因を突き止めるために、この前私立病院へ行った。

優しそうで、ドラマに出てきそうな先生でも

「…分かりませんね」

と言われた。

私はその言葉にがっかりすると、先生がふと、思い出したかのようにこう言った。

「周りを見てみるのもいいかもしれませんね。もしかしたら、何か分かるかもしれませんよ？　けど、このことは人に言っては駄目です。勿論、仲のいい友達や親にもね」

ニコッと先生はそこで笑ってくれた。

けど、先生。

原因不明の病気ですよ？

危ないじゃないですか！見逃したら、生命の危機に陥る病気かもしれないんですよ！

風紀はこのことを知らない。

勿論、沙希や他のみんなも。

もしかしたら、私の人生はあと少しなのかもしれない。

風紀の所へ行こうとしても行けない。

ピタツと足を止め、いったん休憩。

その休憩時間を利用して、風紀たちのほうを見た。

ドクン…

と大きな音がしたのが聞えた。

その音と同時に、あの痛みが襲ってくる。

う…今度は。

い、い、息が出来ない。

走っていないのに、息が出来ない。

し、深呼吸だ。

ヒューフューミュー。

あれ？ ミューっていったっけ？

まあ、いつか。

ヒューフューミュー。ヒューフューミュー。

…もう！

胸の痛みが治まらない。

深呼吸をしたせいで、何故かもっと苦しくなってきた。

涙が出ちゃう。

意識も…。

「だ、大丈夫か明日香！？」

ふと、意識を正常状態に戻すと、目の前には風紀が居た。

「う…うん」

実は私、原因不明の病気で、あと何日命が耐えられるか分からないの！

と、言いたかったが、先生の言葉を守り、嘘をついた。

「そ、そうか」

心配そうな顔をしている風紀。

「ちょっと、あそこで休もう」

風紀のその言葉に従って、ベンチへ向かって歩き出した。

ベンチに座っても、話す言葉が見つからない。

ここに来て、頭の中が真っ白だ。

一応…回復。

「もう大丈夫！」

すくつと立って、今私ができる元気を体中で表現してみた。

その表現の仕方では風紀は納得した模様。

二人で凜ちゃんの待つ場所へと向かった。

「なあ、明日香。それ一回着てみるよ」

へへへ、と笑う風紀を見て、断ることも出来ない私。

何でだろうか。

「うん！！ わかったあ！」

凜ちゃんの手中にあったメイド服と猫耳を取り、試着室へと向かう。
中に入り、着替え終えた。

…私があ場所を離れたことによって、今凜ちゃんと風紀は二人きり。

出にくいなあ。

よし、ここは勇気を振り絞って…

「ジャーン！」

…コメント無しですか！？

もしかして、出るタイミング間違えた？

「あ…う…え…と」

風紀が言葉に迷ってる。

やっぱり、タイミング間違えたんだあ

けど、このままコメントを貰わないのは、余計に恥ずかしい。

「どうかな？」

と、そつと風紀に聞いてみた。

「い、いいんじゃない？」

お！

好印象だ〜！

けど、風紀の顔が引きつってる…。

まあ、そこは気にしないで置こう。

「じゃあ、私も着るう！」

凜ちゃんは、そう言ってメイド服と、猫耳を持って試着室へ入って行った。

その後、凜ちゃんが出てくるまでの2分間。

風紀と色々な話を話した。

その時間がとっても長く感じて、安らぎに感じた。

凜ちゃんが出てきて風紀の顔はさっきより、引きつってる。

心配で心配で、私が風紀に言った言葉が「だ、大丈夫？」だった。

「む、無理！」

と、風紀は意味不明な言葉を言う。

「な、何が！？」

私は、大丈夫かと心配したのに…無理とは何だあ！

「お、お前等！　まず、着替える！　早く！　20秒以内！」

風紀はそう言っで、出て行った。

そうか。風紀は…照れているだけなのか。

何故か分からないけど、頬の肉が落ちそうぐらい、ニヤけることになった私だっ

8 - 4 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。
本日も2話更新しました。
ご注意ください。

「いらつしゃいませえ」

1年2組の中で複数の声が重なる。

約40人の1年2組は午前と午後を半分、半分で仕事をこなしている。

因みに、俺と、明日香と、凜と、幸助と、沙希は同じグループ。

そして、今は文化祭なのだ。

俺たちの文化祭は全部で4日。

木、金、土、日曜日と休日が二日も入っているという、この悪状況。そのおかげか何かはさっぱりだが、次の週の月、火、水曜日が休みなのである。

今日は一日目、木曜日。

4日もあれば、グループは一日一日違うはずなのだが、さっきあげた4人は4日とも同じという。

男たちは厨房で料理を。女たちはウエイトレス、まあ猫耳メイドつてことだ。

今日の俺のグループは前半組み。

8時〜12時と、昼食を外しているから人は少ないと予想していたのだが、それは全く違った。

全校生徒のアイドルでもある、計算違いの女が俺のグループに入っているわけで…。

カランカラン。

幸助が何故か買ってきた、教室のドアを開けるとなる鈴が鳴った。

「いらっしゃいませえ」

厨房で、必死に働いている俺の耳にでも、彼女の声が聞えてきた。

「あら！ 明日香ちゃんじゃない！！ その服、似合ってるねえ。そう言えば、風紀野郎と同じクラスじゃなかったっけ？ あいつは？」

…。俺のことを風紀野郎と呼ぶ奴は、あいつしかない。

訂正、あの人しかない。

そう、部長だ。

「え…あ、風紀は今、厨房で頑張ってますよ」

学校一押しのスマイルで、明日香は部長に受け答える。

部長が「ふうん」と言っている間も、周りからは「明日香ちゃん！これ頼む」などの客からの注文が絶えない。さすがは人気者といえようが無いな。

「は、はい！」と答える明日香も大変そうだ。

1年2組は大混雑と、放送が流れたのはそのときだった。

「風紀野郎って何担当？」

部長が、近くのウエイトレスに聞く。

「ふ、風紀野郎ですか？ ああ、彼はクレープでしたっけ？」

また部長は「ふうん」と言った。

大繁盛しているわけで、殆どの人が席待ち。

先ほど入ってきた部長も、席待ちなのだ。

「ねえ、ここの責任者って誰？」

またもや、部長の声が聞えてきた。

先ほどのウエイトレスに聞いているようだ。

「山田幸助ですけど」

ウエイトレスがそう答えると、部長はニヤリと微笑を作り、

「呼んで」

と、一言。

俺の隣の隣の隣にいた幸助の顔が強張り、さっきまで部長と話していたウエイトレスが来た。

「女の人がお呼びです」と…。

幸助は恐る恐る、部長の下へと歩み寄る。

「な、何ですか部長？」

「クレープ一つ。まあ風紀野郎のお任せで」

周りの人は沈黙。

「けど、やっぱりここは待ってもらわないと…」

幸助は少し言葉に力が無い感じがする。あの部長相手だ。強気に出れるわけが無い。

「私の言うことが聞けないの？ 幸助君？」

必殺、悪魔の微笑みが幸助を捕らえた。

「ハイ〜〜〜！」

幸助が、キーキー吠えながら俺の近くへ寄ってきた。

「部長の命令だ。従え」

…部長に従うのはいいとして、俺はあんたに従うのが一番嫌いなんですが。

まあ、部長を怒らすと怖そうだし…。

「お任せって言ってた」

親指だけを立てて、幸助のグットポーズ。

少し、顔に活力がない。それほど部長とのやりとりがきつかったのだろう。

「まあ、いつか」

そう言つて、風紀オリジナルクレープ、チョコとイチゴと、ヨーグルト和えを作った。

因みに、この風紀オリジナルクレープ、チョコとイチゴと、ヨーグルト和えは、未公開である。

だつて、たつた今考えたんだもの。

美味しいか、不味いかも分からないという優れものだ。

これを、凜に持たせ部長の所まで行かせた。

部長は満足した顔で、俺たちの猫耳メイドカフェを出て行った。

明日香は、何時になっても大変そうだ。

鼻血を出している男の割合は8割3分6厘も居たという情報だ。

あの服で、明日香の微笑を見たら……まあ男ならそうなるだろうな。

分かるよその気持ち！

俺だって同士だから！

そして、仕事終了の12時がやってきた。

「はい、交代です〜！」

と、一番忙しい時に交代をさせる幸助。

明日香が、着替える部屋に入っていくと、客足は殆ど途絶え、席待ちなんて無くなったと言う。

俺も着替えて、外へ行く。

文化祭の一番の楽しみが、他のクラスの行事を見ることだ。

早速、一人で行こうとする俺を、呼ぶ声が後ろのほうから聞いた。

「風紀〜〜！」

後ろを振り向くと、明日香の姿が。

「何？」

質問をすると、明日香は頬をポリポリと掻きながら、

「一緒に行動しようよ」

と、最高の照れ笑いを見せた。

学校一美人と共に行動しようといわれて、拒否する奴はそう居ない。

「おう」

と俺は、了知した。

「何処行きますか？」

明日香にそう質問されて、戸惑う。

…さて、どうする？

どうする？

どうする俺！

って、どっかのCMの真似を試みたり…。

「何してるの？」

と明日香に不思議そうな顔をされたが、まあ放っておこう。

「それで、何処行く風紀？」

…何処にしましょうか。

亮平のクラスは、『笑うの堪えて』だったような気がするし、

悠太のクラスは、ストラックアウトだっけ？

先輩達のクラスは何やっているか忘れた。

「風紀？」

質問攻めだ。

「ど、どうするア・イ・ル」

「私、アイ ルじゃないよぉ！」

もぉ、と言いながらも笑ってくれる明日香。

いい奴ですね本当に。

俺はどうしてか、笑みがこぼれた。

9 - 1 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

本日は一話だけの更新とさせていただきます。
申し訳ございません。

「よっしゃあ、ビンゴ!」

俺は、悠太のクラスで雄叫びを上げている。

「ふ、風紀…すごすぎ」

係員である悠太は啞然の表情。

全部で9個の的がある、その的にボールを投げて当てるというゲームだ。

持ち玉は10球。

俺はノーミスで、全ての的を落としたのだ。

「風紀すごい!」

隣で俺の集中力を上げてくれた明日香がいる。

こいつが居なかったら、俺はこんな曲芸出来なかっただろう。

女の前ではいい格好を見せる。

これ、男の基本ね。

8ビンゴを取ると豪華景品のはずなんだが…。

これは、豪華といえるものであるのだろうか？

「あ、明日香これ俺からのプレゼント！」

貰った景品を明日香へ渡す。

「ありがとう！」

と、すごく喜んでいるのだが、直ぐその後に、

「え…」という言葉が。

「風紀コレって…？」

そう、その景品とは

「まあ、どっからどう見ても、洗濯バサミだな」

「風紀が持って帰ってよ」

「はあ…、分かったよ」

明日香は大量にある洗濯ばさみを俺に渡してくる。

因みに6ビンゴは図書券10000円分らしい。

俺は一步、一步、悠太の下へ歩み寄る。

「ゆう〜た〜君！ これ、10000円分の図書券と交換して欲

しいなあ〜」

少し笑みを作り、悠太に話しかける。

「風紀、洗濯ばさみを持って帰りな」

この可愛い笑顔を持った、悠太には負けるね。

高校1年生とは思えない顔立ち、愛らしい顔立ちの悠太は結構もてているという情報が亮平から入ってきた。

そのせいか、明日香の時と似た感じで、このクラスの客は女が結構多い。

明日香の場合は…男の客だったけど。

「風紀いいいい！早く行くよー!」

明日香は教室のドアの前で手招きをしている。

「はいはい……」

心の中で言つつもりが、ついつい声に出してしまった。

「何よお、その嫌そうな返事は」

「いやいや嫌じゃないよ、明日香ちゃん」

優しい笑みを作る俺。

その顔に免じてか許してくれた。

何気に2年生の教室の階に降りていくと、光雄先輩が。

「あつ光雄先輩…」

「……」

黙りこむ先輩。

「えっと…」

「何も言っなや」

そう言つて、光雄先輩はその場を去つていった。

「ねえ風紀…さっき光雄先輩、会話したよね!？」

いや、明日香そっちに驚くのか。

「俺は2度目」

「へへ、関西弁なんだあ…」

つて、俺の話は無視かい!

「…じゃなくて、あの光雄先輩の格好は？」

俺が明日香に聞く。

「え？ 確か、光雄先輩のクラスは女装フリーマーケットって書いてあったよ」

「そ、そうか」

だからあんな格好をしていたのか。

ビックリド キー並みにビックリしたぞ。

「あっ！」

「ど、どうした風紀！？」

「写真撮っておけばよかった！」

明日香からの冷たい視線が俺に浴びせられる。

「っていうのは冗談でえ……」

そんな熱々？ トークをしていた俺たちに誰かが割り込んできた。

「実は冗談じゃねえだろ」

「うん。実はね。……って何で亮平がここに居るんだ！？」

いつの間にか俺の隣に居た亮平。

「お前が悠太のクラスで、全部の的を落とした瞬間から一緒にいた」

亮平は自慢げにそう言う。

あんたは忍者ですか？

「あなたは忍者ですか？　とか思っただろ？」

俺の心を勝手に読むのはこの人しかない。

「龍先輩！　前から言ってるじゃないですか！　人の心を勝手に読まないでください！」

「心って言うか、顔に書いてあるから」

亮平はうんうんと頷いている。

明日香は、何処に書いてあるの？　みたいな顔をしているし…。

「龍先輩の所は、何やっているんですか？」

亮平が、スポーツ的敬語を使って聞いた。

「俺たちは…なんだっけな？　忘れた」

龍先輩。

忘れた…は、ないでしょう。

「まあ、4人で初の文化祭楽しんでこいよ」

「は…い…って4人？」

固まる俺。

いや、多分この状況にいるのは明日香と、俺と、亮平だけのはず。

他に誰が？

「え？ その後ろに居る子ってお前等の友達じゃねえの？」

俺達3人は、朝鮮民主主義人民共和国も驚くタイミングのよさで、後ろを向いた。

「「「凛！^{ちゃん}」」」

「エヘ！ ばれちゃったか。さすが龍先輩ですね」

凛は龍先輩にニコニコして話しかけている。

「って、何でお前が居るんだよ」

俺は凛に冷たく聞いた。

「何でって、私、風紀と一緒に居たかつたし？」

「文末に『？』入れなくていいから」

またもや、エヘみたいな行動を取る凛。

はあ、先が思いやられる。

そこで、見捨てることも出来ない俺達。

仕方なく、凜と共に今日一日行動した。

「風紀〜！ 朝だよ〜！」

自分の部屋のベッドの上で、伸びをする。

いつものように、明日香の可愛らしい声で目覚めた俺は幸せものだ。

「ふあ〜」

大きくあくびをして、パジャマのままドアを開ける。

「おはよ…」

目を擦りながら言う俺。

「おつはよおお〜！」

いつものように、元気よく言う明日香。

「今何時？」

明日香が時計の方に目をやった後、

「10時過ぎ」

と、言った。

「へえ、10時過ぎか…って10時過ぎ!？」

因みに今日は、学園祭2日目。

「お前、完璧遅刻じゃん!」

キョトンとしながら俺の話を聞く明日香。

服装は、まだパジャマのよう。

グツ…いつになっても、明日香のパジャマ姿には慣れないぜ。

「大丈夫風紀？」

「大丈夫も何も、お前全く焦ってないよな! 10時過ぎだぞ!？」

まだ、キョトンとしている明日香。

俺の言葉が理解できないのか!？

「分かってるよ? 私たち、今日後半組みだよ?」

「ああ! 後半組みだよ! …ああ、後半組みか」

納得する俺。

その理由は、俺たちの学校は、文化祭は何時に行ってもいいという。
だから、仕事が無い人は、家で休んでいてもいいし、文化祭を楽しんでもいいのだ。

それで、後半組みの俺たちは、12時から猫耳メイドカフェに入らなければならない。

逆に言うと、12時までゆったりとしていいわけだ。

「おっけえ…理解した」

俺がそういうと、明日香は「そっか!」と言って、いつもの満面の笑みを俺に見せてくれた。

「やっぱこれが俺の朝!」

明日香は不思議そうな顔をしたが、放っておこう。

ドアを閉め、パジャマから制服に着替える。

一応、文化祭でも制服で登校なのだ。

着替えてリビングへ行くと、明日香の制服姿がいつも拝めると言うわけだ。

分かるかいジョニー? (そんな登場人物は存在しません)

昼過ぎに登校するという、いつもと少し違う今日だった。

「おはよぉ」

12時1分。

俺と明日香は、着替えて店に出る。

「また仲良く二人で登校か？」

幸助が俺たちと同時に店に入ってそうやってきた。

「まあ、そんな感じ」

「いいねえ、アツアツカップルは」

「いや、カップルじゃねえし」

ニヤーと笑う幸助。

「気持ち悪い」と俺は言っても、その表情は変わらず鼻歌まで歌い出すと言った感じだ。

幸助が自分の持ち場の飲み物を継ぎ終えると、

「沙希ちゃん！」と呼んで、コーヒーを渡した。

それにしても、沙希の猫耳メイド姿。

明日香たちとはまた違う見所があるな。

だって、いつも口悪いあの沙希がだぞ？

あんな格好…。

「プッ」

思わず笑いがこみ上げてしまった。

「何、笑ってるんだ風紀？」

沙希が俺の方を向いて睨み付ける。

「いや、何でもナイツ」

心の中では大爆笑。

「そう」と、言ってコーヒーを運んでいった。

猫耳メイドの格好をした2組のクラスの女が厨房の前にやってきた。

「イチゴジャム&プリンの盛り合わせのクレープ一つ」

クレープ…俺の番か。

「ういっす」

そう返事をして、俺はイチゴジャム&プリンの盛り合わせのクレープを作り始めた。

また、猫耳メイド姿の2組の女がやってきた。

「ヨーグルトと、ミカンのかき混ぜクレープ2つ」

またか…。

「ういつす」

と、またも返事して俺は、ヨーグルトと、ミカンのかき混ぜクレープを作り始める。

「風紀オリジナルクレープ4つ」

「ういつす…って何だよそれ！」

注文を受け取った人は「さあ？」と言いながらその場を去った。

現在抱えているクレープの量、7つ。

明日香が店に入ったせいかな…。

クソッ！ どうしてこうも、明日香は人気なんだ！

俺の仕事を増やすなよ…全く。

溜息をつきながら、俺はクレープを作り始める。

それにしても、風紀オリジナルクレープを知っているのは部長だけのはず。

チョコとイチゴと、ヨーグルト和えは昨日考えたんだけどなあ。

疑問に思いながらも、ひとつ、ひとつと作りはじめた。

「やっと終わった〜！」

俺は厨房で倒れ中。

何故か今日は異常にクレープの注文量が多かったな。

「お疲れさまあ〜」と言いながら、殆どの男共が俺の上を跨って行く。

まあ、その状態で大体20分ぐらいジーとしていると、ドアが開く音がした。

「大丈夫風紀？」

その声の持ち主は、明日香じゃなく…凜だ。

「ああ、普通」

いや、普通じゃないんだけど。

体が動かないわけで、大丈夫なわけが無い。

「お疲れ様」

そういい、凜がスツとしゃがんだ。

その瞬間、俺の唇にやわらかい感触が。

「……………」

「エへ」

「……………」

「ふ、うき？」

「……………」

「あのお」

何故、俺が黙るのか教えてやろう。

理由は簡単。

女に触られ、その場所がマウス トウ マウス。

口と口というわけだ。

この俺が失神しないのが奇跡だろう。

なんとか、まだ意識は保とうとしている。

そこまで必死に俺の脳が頑張っている理由は、俺の眼に映る人物が二人いたからだ。

一人は、俺にキスした凜。

もう一人は、その悲劇的な場面を目撃した明日香。

悲劇的な場面を目撃した方は1秒も立たずに、俺の視界から消えていった。

その後に、廊下を走る音。

ドテン！ と、誰かがこけた大きな音がしたが、それは気にしないでおう。

その後また、パタパタと廊下に響く音がした。

その音が、何故か俺の心に響いた。

9 - 3 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。
毎回、へんな時間に更新となっています。
もうしわけありません…。

私は、今まで色々なものを見てきた。

その見たもの全て、信じられる物…だと思う。

何故、『だと思っ』なのか…。

心、すごく揺れてる。

何で、私は逃げたの？

何で、こんなに苦しいのだろう。

「凜ちゃんと風紀が…」

キスしてた。

心、すごく揺れてる。

何で、私はこんなに動揺してるの？

何で、私は涙流してるんだろう？

何故。

気付かなかったの？

今まで、この気持ちに気付かなかったのだろうか。

原因不明の病気？

そんなんじゃない。

先生の言葉がようやく分かったような気がする。

人に言っでは駄目なんだって。

自分で気付かなくては駄目なんだって。

私、

風紀のことが好きなんだって事を。

廊下を思いっきり走る。

息切れをしようが構わない。

涙を拭く瞬間、バランス感覚を無くしてこけた。

それでも、風紀は私を追いかけてきてくれない。

私は、また立って走り出す。

涙は…永久に出てくる感じ。

悲しみが沸き起こってくる。

胸が痛くなって、心のはち切れそうで。

風紀を見ていられなくて。

どうしようも無く、急に一人になりたくなって…。

走りながら家まで帰った。

マラソン大会でも出したこと無い記録が出たのは間違いないだろう。

自分の部屋に駆け込む。

風紀が帰っても、この顔じゃ話す言葉が見つからない。

風紀…のことが…好きなの？ 私。

もう…男の子を好きになるなんて、認めたくなかったのだろうか。

非常識かな？

私は、愛することが出来ない女の子だった。

大和君の事件があつて…。

涙が止まらなくなった。

そして、あの時風紀に出会って、変わった自分が居る。

それは、お母さんにも言われた。

「明日香、変わったね。いいことでもあったのかしら？」と。

そのときは、特に変わったと思ってなかった。

あの時、風紀が私の話を聞いてくれたとき。

あの時には、もう好きだったのだろう。

気付いてた、自分も居た。

だけど、それを心から否定していた自分の方が大きかった。

気付くのが遅かった。

もう、凜ちゃんと風紀は。

元の関係に戻っただけなのだろう。

そのうち、凜ちゃんも私が風紀と同居しているって言うことを知ることになるだろう。

邪魔…。

私は、また邪魔者だ。

あの時と同じ、邪魔者なんだ！

もう…邪魔者扱いはもう勘弁だ。

そうならないうちに家を…。

ガチャ。

玄関のドアが開く音がした。

そして、ボタンと閉まる音。

パタパタと音がして、私の部屋の前でその音が止まった。

コンコンと誰かがノックする。

「明日香居るか？」

風紀の声だ。

「う、うん」

力ない返事をする。

「ば、晩飯どする？」

こんなときに…そんなことかい！

もうちょっと、違う言葉は無いの？

こんな私を気遣ってくれはしないの？

「……………」

無いのね。

「じゃ、ご飯作ってない……」

「じゃあ、俺が奢ってやるから、どこか食べに行くか？」

風紀の声からありえない言葉が聞えた。

「……………」

「……………」

「…うん」

「よし、行くうー！」

「けど、ちょっと待ってて！ ちょっと、顔が……じゃなくて、服装が駄目なの！ 制服じゃまずいでしょ？」

「別に、まずくないけど……」

「私は駄目なの！」

そう言うと、わかったよと言って風紀も自分の部屋に入って行った模様。

私服に着替えて、深呼吸する。

風紀の邪魔者にはならないからね…。

心の中で呟いて、自分の部屋のドアを開けた。

9 - 4 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

もうそろそろ第一章もクライマックスを迎えました。

あと数話で、第二章へと移ります。

最後までどうかよろしくお願いします。

「うまいな？ うまい。うまい」

何かを誤魔化すために俺は「うまい」を連発。

その間、明日香はだんまり状態。

……。

俺たちは今、某ファミリーレストランに居る。

美味くて、値段が安い。

学生のカップルには丁度いい場所だ。

俺達は、カップルじゃないんだけど。

「なんと言つか…あれは」

と、俺が言い出すと、明日香は「やめて…」と聞えるような聞えな
いような声で俺にささやく。

店に入ってから、この行動をとったのは、3度目だ。

この状況を簡単に説明すると、

気まずい。

別に悪いことをしたわけではない。

ただ単に、明日香が俺と凜のキスシーンを目撃したというだけのことである。

明日香は、フライドポテトを一つフォークで刺し、口へと運ぶ。

その行動は、何故か寂しげに見えた。

俺はというと、ハンバーグを一口サイズに切り、パクパクと口に運びつつ明日香を見る。

心の中で溜息。

本当に気まずいなあ。

はあ。

某ファミリーストランに入って30分。

やっと、明日香が話しかけてきた。

「ふ、風紀？」

突然の出来事。

当たり前のように、俺の反応が遅れる。

「…え？ ああ、な、何？」俺がそう言った後、明日香の返答は無かった。

また、明日香はフライドポテトを口に運ぶ。

俺は、次いつ話しかけられても大丈夫のように、ハンバーグには手をつけない。

フライドポテトを二つほど摘んだ後、明日香はまた口を開いた。

「凜ちゃんと…付き合ってるの？」

……？

いやいや、凜とは『付き合っていた』という過去形であって、決して『付き合ってる』という、現在進行形ではない。

明日香は、俺の返事を待たずに

「私、邪魔かな？」

と、聞いてきた。

ここは俺も即答。

「邪魔なわけ無いだろ」

明日香は俺の言葉の後の間をあけずに、

「いいの。邪魔なんですよ？」

と言って、明日香は店を飛び出す。

「あ、明日香！？」

俺は、追いかけた…が、店からは出れなかった。

ドラマみたいに、追いかけていって「待てよ！」とかいえる状態ではない。

このまま飛び出していけば、「お客さん！ お勘定は？」

と言われ、俺は食い逃げをしたことになる。

いや、なってしまう。

俺は、会計所で勘定を済ませる。

その後、大急ぎで店の外に出た。

右方面、自転車に乗ってる小父さん。

左方面、誰も居ない。

「…馬鹿が。勘違いしやがって」

情けないな。

思いつくのは自分の家しかない。

猛ダツシュで家まで向かった。

約5分。

息を切らしながら、俺は家に着いた。

しかし、ここで疑問。

俺は明日香を抜かしていない。

俺は猛ダツシュできたんだ。

あの、数メートルしか走ることの出来ない明日香を、抜かせないわけが無い。

「置いてきたか？」

一瞬、不安がよぎる。

只今の時刻、7時過ぎ。

明日香の可愛さと美貌で、男に襲われたのか？と。

家の前で息を整える。

1%の確率も無いと思うが、家のドアを開けた。

鍵は…掛かっていない。

マジかよ…。

明日香の靴がある。

電気はついていないが、明日香がいる気配。

明日香の部屋をノックする。

「明日香…いる？」

なんだか、今日の某フリーレストランに行く前と同じ光景。

「いない」と、明日香の部屋から聞えてきた。

「いるじゃんか」

と俺は言う。

…漫才やってる場合じゃないし！

俺は、無理やり明日香の部屋を開けることが出来なかった。

誤解は解きたい。

そう思う自分が居る。

「明日香？」

もう一度、ノックした。

「いないって！」

だから、漫才やってる場合じゃない！

「じゃあ、独り言。俺は凜と付き合ってない。決して、明日香のことを邪魔とも思っていない。あと、今日の出来事は不意を衝かれただけのことだから」

俺が言った後、明日香の返答を待つのみ。

5分経過。

「私も、独り言」

いや、居ないんじゃないのか？

「私…私、風紀が好き。大好き。死ぬほど好き。だけど…いや、だから風紀の幸せを一番に考えたいの。」

何も…答えられなかった。

何も…言葉が出てこなかった。

明日香が、俺を好き？

そんなことがあっていいのか？

その日一日、何も喋れなくなっていた。

次の日の朝、

明日香は

俺を起こさなかった。

ボタン！

朝、8時。

俺は家の異変に気づいた。

「明日香：？」

明日香の部屋の私物がなくなっている。

所謂、夜逃げ。

って、違う。

明日香は、昨日の夜に何処かに行った。

全く音はしていなかった。

俺に気づかれないために、そこまでするか。

「だから、違うって言ってるだろ」

無性に寂しくなり、俺はテレビや筆筒等以外無い明日香の部屋でそう呟いた。

今日は学園祭3日目。

土曜日。

俺は、何をするでもなく、制服に着替えて学校へ向かった。

外はいつも通りの朝。

人は殆どいなくて、時々通る車を避ける。

たかが数分の道のり。

俺の中ではいつも通りではなかった。

明日香がいなくて、この道が何時間も長く感じた。

準備中という看板がかけられた、猫耳メイドカフェに着く。

もしかしたらここに、明日香がいるかもしれない。

会ったらなんと言おう？

「戻って来いよ」とか、人前では絶対いえないし、他に言う言葉も見つからない。

けど、勘違いしたまま明日香は飛び出した。

まずその誤解を、とかなくては。

店の中に一步踏み入れた。

「風紀遅い！！」

幸助が右手に持っている物体で俺を殴ろうとする。

ぱつと見ハリセンだな。

俺は、その場を冷静に判断し、ハリセンの軌道からずれハリセンを避ける。

そして、そのまま幸助の右手をつかみハリセン没収。

体制を崩している幸助の頭に、そのままハリセンを振り下ろす。

バシコーン！

と、言う音とともに「痛えー！」という幸助のさび声が上がった。

「ハ、ハリセンってそんなに痛かったのか…」

幸助の痛み具合によると、HPが97減っただろう。

「ごめんごめん！ ちょっと、寝坊してな」

痛みを抑えながら、幸助が俺の方に向き周りを見渡す。

「あれ？ 明日香ちゃんは？」と、言った。

俺は、何も答えることができずに、着替える部屋へと歩いていく。

勿論、ハリセンを持って。

俺が部屋に入るときに「ハリセン！」という幸助の叫ぶ声がしたような気がしたのは、気のせいだろう。

着替えが終わった俺は、厨房に入る。

開店まではあと少し。

そのとき、沙希が俺の所までやってきた。

顔が少し曇っていた。

そして、紙が一枚握られていた。

「風紀」

その一言だけ俺に投げかけて、紙を一枚俺に渡す。

ピンク色の紙。

ラブレターという言葉は一切思いつかない。

文化祭終了後、校門前で。

達筆で書かれていた。

言っちゃ悪いが、あいつが書くと恐いな。

今日は一日、厨房に入らなければならない。

明日、一日休みという条件付で。

何故、明日一日休みなのかというと、映画公開日。

一日限定。

一回限りの大イベント。

右手にあった紙をポケットに突っ込み、大きな一息着く。

何故大きな一息つくかというと、明日香が居ないからだ。

いつものあの笑顔が無い。

不思議がっているやつ等も居る。

明日香は、仕事をサボるような奴じゃないから。

クレープ仕事に、手がつかず今日一日ボロボロだった。

注文は間違えるし、クレープの生地を焦がすし、火傷はするし。

泣きそうだった。

明日香が居ないだけで、俺はこんなにもボロボロに。

明日香が居ないだけで、俺は、泣きたくなるほどに。

今日一日の仕事が終わり、着替えて校門前へ行く。

そこには沙希が待っていた。

「おっす」

俺は沙希に近づき挨拶をした。

だけど沙希の顔は曇ってる。

沈黙の風が流れた。

「何だよ？」

まだ、沙希の顔は曇ってる。

「それは、こっちのセリフ」

…へ？

「明日香に何したのよ？」

「いや、明日香には何もしてない」

「嘘付け！ 明日香は昨日私の家に来て、ずっと泣いてたんだ！
朝まで泣いてたんだ！」

沙希が勢いで俺の胸倉をつかむ。

「何したんだって聞いてんだよ」

沙希さん？ 少しばかり…。

いや、少しどころじゃない、すごく恐いんですけど。

俺は、昨日の出来事を一字一句間違えずに沙希に説明した。

数秒置かれた後、沙希は一言、言って俺をその場に置き去った。

「…馬鹿」

と。

「馬鹿ってなんだよ。馬鹿って」

俺は学校の校門前に一人残された状態でそう呟く。

赤い太陽も沈み、今は暗闇と化す。

満月が俺の目の先にうつすらと写っており、俺は何をするでもなくその場にたっている。

沙希の話を簡単に言っていると、明日香がものすごく泣いているということだ。

俺が、凜に不意を突かれたせいで明日香が悲しんでる。

そう言いたいんだ。

だけど、もう一つ分かったことがある。

明日香の居場所。

沙希の家だ。

細かい所までは知らないが、多分……いや、絶対亮平に聞けば分かるだろう。

あいつの情報力は半端じゃない。

学年全員の家と電話番号、家族構成まで知っているだろう。

知らぬ間に、俺の手には現代の科学の発展を見せ付けている携帯電話というハイテクな物が握られていた。

亮平に、沙希の住所を。

だけど、今の俺には明日香に合わす顔が無い。

一度告白されて、即答できなかった俺だ。

今、このまま行っても同じ結果になるだろう。

しかし、この状態のままで居るのは駄目ということも分かっている。

明日香を傷付けた事も分かっている。

だけど、どうやって前に進めばいいのか分からない。

俺は、明日香のことが女として好きなのかさえ分からない。

言い訳になるが、俺は女性恐怖症だ。

そんな俺が、女を好きになるということはもう無い。

と、思う。

だけど、明日香は別…のような気がする。

彼女が居なくなったらボロボロの俺になる。

「好き」が分からない。

これを好きというのなら、これを恋だというのなら、

俺は何をすればいい？

俺はどうすればいい？

携帯電話を開き、亮平に電話する。

彼に、相談するのは情けない。

分かってる。

だけど、一番の友達だ。

プルルルと着信音が鳴る。

虚しすぎるほど、響き渡る。

友達さえも、俺のコールをとらなかった。

「亮平…何してんだよ、こんなときに」

何をするでもなく、俺は家へと足を進めた。

長い長い道のりだった。

ピリリリリリリ！

10時25分、いつも聞かない目覚まし時計が耳元で鳴る。

その目覚まし時計に手を伸ばし頭にあるポチを押す。

一度押すと止まるのだが、5分経つとまたなるといって、ウザイ品物だ。

そのウザさが朝起きの秘訣なんだろう。

いつも通りではない、いつも通りで制服を着て家を出る。

明日香が居ない事がいつも通りではない。

明日香が居ない朝は厳しい。

いつもの明日香の笑顔が、妄想と化して幻覚を引き起こす。

いくらなんでも、今日は明日香が来るだろうと…。

やっぱり、学校への道は長く感じた。

部活は12時集合。

11時20分に特別教室に着いたのだが、どこかに遊びに行くのも中途半端な時間だし、待つのも面倒だけど、結局待つことにした。

一人孤独に、教室で待つ。

昨日、明日香のことを考えすぎて、よく眠れなかったのも事実。

特別教室で、眠気が一気に襲ってきた。

腕を枕にして、机に伏せて眠りという安らぎに浸った。

「ふ……お……ろ！」

何かが聞える。

「ふう……お……ろ」

まだ聞える。

「風紀、起きろー!!」

そして、はっきりと聞えた。

「は、はいー!!」

俺は、一気に眠気が飛び、先ほどの声の持ち主である部長に顔を向けた。

「やっと、起きたか風紀野郎」

周りを見渡すともう、皆集まっている。

いや、訂正。

ほとんど集まっている。

一人を除いては。

隣には昨日、俺のコールを取らなかった亮平。

左にはいつも居るはずの明日香が居ないだけのこと。

ただ、それだけである。

「明日香は？」と、隣で暢気に聞いてくる亮平。

「お前でも知らないのか」

俺は冷たく言い放った。

「おいおい、昨日の電話のことで起こってるのか？」

俺は、無視する。

無視したい気分だった。

「ごめんって！ あの時間は少し用事があってな」

言い訳にならない言い訳を亮平は言う。

「それで明日香は？」

俺は冷たい目で亮平を見た後、細かい事情を亮平に話した。

なにより情報が欲しいため。

言いふらされてもいい、明日香の居場所に対する情報が欲しかった。

「お前…馬鹿か」

最近聞いたことのあるような言葉を聞く。

「うるせえ」

馬鹿なのは知っている。

だけど、もう終わってしまったことだ。

何をしても過去には戻れない。

「それにしても風紀。凜にやられたな」

「ですね」

短文で言い返す。

「それで、お前は何の情報欲しいんだ？」

亮平がいきなり、本題に触れてきた。

さすが、これだけ一緒に居る事だけあって、俺の考えは分かっているんだな。

「沙希の住所を知りたい」

少し沈黙があったあと、亮平は「知ってどうする？」と聞いてきた。

「明日香に会いに行く」と、俺は正直に話した。

「会ってどうする？」

亮平のその言葉が俺にダメージを与えた。

そう、俺は明日香に会ってもどうしようもない。

何をすればいいのか分からない。

「それが、分かったら教えてやる」

今日、最初に会った亮平とは違う雰囲気を感じた。

何か重たい空気が。

これは、智也が発していた空気だった。

「俺は、誤解を解きたい」

亮平が俺の方を向いていないときにそういった。

亮平は俺の方を向かずに「何で？」と聞いて来る。

…なんで？

俺は何で明日香の誤解を解きたいのだ？

しばらく考えていると、「自分に素直になれ」と言う痛い言葉が聞えた。

9 - 7 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。
次の話で、第一章は終わりとなります。

最終話

「俺は素直だ！！！」

部活中の出来事である。

俺は、大きな声を出した。

「風紀野郎！ 静かに！」

部長に注意され俺は、やるせない気持ちでいっぱいだった。

「お前は素直じゃない。女性恐怖症ということを理由に、恋を恐がっているだけだ」

それは、言い返せなかった。

確かに、怖い。

凜の時のような辛い思いはしたくない。

「昨日からおかしかったら？」

亮平が問いただしてくる。

無言で頷く俺。

「何でか分かってるよな？」

無言のまま俺は頷きはしなかった。

首を横に振りもしなかった。

亮平が、シャープペンシルと小さな紙を取り出し、何かを書き始める。

「全てが決まったときに、ここに行け」

渡されたのは、沙希の住所と思われる数字と文字。

全てが決まったとき…。

一通り部活も終わり、映画公演の準備にかかる。

映画研究部の俺だって完成している映画を見るのは初めてだ。

緊張している。…だけど、明日香のことが気になって仕方が無い。

時刻、1時30分。

映画が始まる。

最初、フレームに映し出されるのは俺だ。

なんだか恥ずかしい気持ちがある。

そして、どんどん話も進んで行き、クライマックスに。

波の音が二人を包む。

二人は崖の端に座り抱き合う状態である。

「死にたくないよ」

白い服を着た女がそう呟いた。

男はその女を強く抱きしめる。

「大丈夫」

落ち着かせるためにそういったのだろう。

コホコホと女が咳をするたびに心配そうな顔をする。

「ここで、3度出会った男と女は永遠の愛を手にするんだろ？」

男が女に質問する。

女は無言で頷いた。

波の音が止まり、女が口を開く。

「大好き」と。

男はさらに強く抱きしめ、

「俺もだ」と呟いた。

俺は、その光景を見た瞬間思った。

この男の言葉は偽りじゃないんだと。

ようやく分かった。

いや、分かっていたけど、認めたくなかっただけなんだ。

亮平の言うように、俺は恋を怖がっていただけ。

今なら言える。俺は…明日香が好きだ。

女として、この世の女性として、

明日香が好きだ。

俺はその場を出た。

大きな音が出ようが構いなし。

ある紙を頼りに、沙希の家を目指す。

学校の敷地内を出るのは簡単だった。

そして、沙希の家の周辺と思われる場所までは着いた。

しかし、肝心の沙希の家が見つからない。

確か沙希は、昨日俺たちと同じで一日だったから、今日は店にはいないはず。

ということは家にいる確立が高くなる。

俺は走る。

力の限り、走る。

沙希の家が見つからない。

10分ほどろろろしていると、『水谷』という文字が目に入った。

その近くに、沙希という名前も記入されている。

「ここか」

そう呟き、俺はインターホンを鳴らした。

ピンポン

ガチャとドアが開く。

沙希だ。

「ふ、風紀？ どうしたのこんな所に。と言うか、何故お前が私の家を知ってるんだ？」

不思議そうな顔で俺を見つめる沙希。

「そんなことはどうでもいい。明日香はいるか？」

息を切らしながらも一生懸命聞く。

「明日香は、今日の朝出て行った」

おいおい。本当かよ。

行方不明…って言うことか？

クソッ。

こんなときに、明日香とは巡り合わないのかよ。

他に、明日香が行きそうなところを思いつかない。

今まで、何ヶ月も一緒に居るのに、明日香のことを全く知らないんだな。

仕方なく、家に戻る俺だった。

明日香が行きそうなところを考えながら、トボトボと家に帰ると、人影がある。

誰だ？

と、思いつつも不思議と気持ちが舞い上がってくる。

期待しているのだ。

明日香ではないかと。

俺は走って駆け寄る。

案の定、明日香だった。

「ふ、風紀…」

明日香が、俺たちが初めて会った時のこの場所、家の前で再び会うことに。

「明日香…」

俺たちは互いに互いの名前を呼ぶ。

「あの、風紀…私」

そう言って、明日香は俺の隣を通り抜けようとした。

俺は、その明日香の手をつかむ。

「明日香」

再び、俺は明日香を呼んだ。

腕をぶんぶん振って俺から逃げようとする明日香。

「やめて！ 風紀には、凜ちゃんが…幸せがあるんでしょ？」

泣きそうな声で、訴えてくる明日香。

俺は、何も答えられない。

だけど、手は離さない。

明日香の顔をじっと見る。

何度も言う。俺はこいつが好きだ。

だから俺はここにいる。

俺は明日香の手を離さない。

俺は、重たい口をゆっくりと開いた。

「明日香。俺はお前には二つ言わなければならないことがある」

明日香は、腕を振るのをやめ、俺の話しに耳を傾けている。

「ひとつは俺のこと。俺は女性恐怖症だ。ずっと黙っていたが、女に触れることは出来ない体質だ。喋ることもある意味苦手だ」

驚きの表情。

だけど、俺は話すのをやめない。

「そしてもう一つは、幸せのこと。明日香がいなくて俺の幸せはない。お前をなくして、笑える日々が送れるはずが無い…だろ。馬鹿が」

そういった後、俺は明日香の腕を引っ張り、抱きしめていた。

強く抱きしめた。もう、明日香を離したくなかった。

「痛いよ…風紀」

力ない、明日香の声が聞えた。

耳元にふわっと聞える明日香の声。

久しぶりのような気がした。

涙が出て来た。

明日香が恋しい。

明日香が愛しい。

そして、俺は

「明日香が好きだ」

明日香は、その言葉を聞いた後、腕を回し抱きつく状態に。

そして、

「私も大好き」と言った。

二人の生活が再び始まる。

今日は、文化祭4日目、最終日。

日曜日の出来事だった。

最終話（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

とりあえず、第一章はこれで終了となります。

おまけも色々ありましたが…公開するかどうかは分かりません。

Double Life 読んでいただき、ありがとうございます。
た。

番外編1 部長編 (前書き)

自分のPC内を漁っていたら、面白いものを見つけてしまいました。本日、読者様から感想を頂きましたし、公開してみようかなと思います。

本日公開した番外編は、二つとも部長視点となっております。どうかお楽しみください。

色々と、ご迷惑、ご心配をおかけしました。また、何かありましたら、感想等気軽にください。お願いします。

番外編1 部長編

コンコンコンコンコン。

廊下の歩く音が響く。

周りには、たくさんの人がワイワイ騒いだり、パクパク食事を楽しんでいる。

そう、今は文化祭。

私は明日香ちゃんと、幸助と、風紀野郎がいると思われる1年2組の実習場所へ向かう。

手ごろで、美味しいと評判のある店らしい。

特に、風紀野郎が作るものが上手いと聞いたが、それが何かは定かではない。

店まで、残り3ヤード。

もう目の前だ。

しかし、ここに来て入ろうか、入らないか迷う。

それは、この人数。

ぱっと見た感じでは、満員以上である。

店の前で躊躇。

残り3ヤード残して、私は一步が踏み出せない。

すると、後ろの男の人から「早くしてくれませんか？」と声をかけられた。

後ろを振り向くと、そこはなんとも言えぬ行列。

私は焦りながらも、店の中へと入っていった。

「いらっしやいませえ」

予想通り、席待ち。

私は、席待ちという面倒な事が嫌いだ。

だから、入るのを躊躇した。

しかし、先ほどの「いらっしやいませえ」という声に聞き覚えのある声だ。

よく見渡すと、明日香ちゃんがいた。

「あら！ 明日香ちゃんじゃない！！ その服、似合ってるねえ。そう言えば、風紀野郎と同じクラスじゃなかったっけ？ あいつは？」

私は、明日香ちゃんに聞く。

その瞬間、風紀野郎のおびえる雰囲気が一瞬感じ取られた。

「え…あ、風紀は今、厨房で頑張って働いていますよ」

明日香ちゃんの、可愛らしい笑顔。

久しくこんな近くで見たね。

そのまま明日香ちゃんは、どこぞの誰かに呼ばれ、何処かに行ってしまった。

このままでは風紀野郎の作るものを食べられない可能性が出てきた。

そんなことを考えると近くのウエイトレスと目があった。

ちよいちよいと手でこちらに呼ぶ。

为什么呢？ みたいな目で私を見るウエイトレス。

「風紀野郎って何担当？」

直球で聞く私。

「ふ、風紀野郎ですか？ ああ、彼はクレープでしたっけ？」

「ふん」

クレープか。

よりもよって、私の好物を…。

こりゃ楽しみだ。

今すぐ食べたい。

やばい…^{よたれ}涎が。

席待ち？ そんなの関係ない。

いつのまにか、この言葉を発していた。

「ここの責任者って誰？」と。

数秒たった後、先ほどのウェイトレスはこういった。

「山田幸助ですけど」

幸助…か。

これは、戦略立てるまでも無い。

ありのままで行けば落とせるだろう。

そう考えると、笑みがこぼれた。

「呼んで」

と一言呟くと、ウェイトレスは厨房らしき方向へと歩いて行った。

数秒待つと、幸助が暗い顔をして現れた。

重い足取り。

幽霊でも見ているかのようなスピードの遅さ。

「な、何ですか部長？」

恐れるものを見たかのような目。

そんなに私が恐いかあんたは。

「クレープ一つ。まあ風紀野郎のお任せで」

風紀が、クレープ作っていることは知っている。

風紀野郎のお任せというわけで、どんなのが出来るかが楽しみだ。

「けど、やっぱりここは待ってもらわないと……」

私の言葉に、反抗する幸助。

お前の命、なくなるぞ？

最後の忠告のような声で幸助に言った。

「私の言うことが聞けないんですか？ 幸助君？」

すると、幸助の顔が見るも無残な顔に。

「ハイ~~~~！」といい、その場を立ち去った。

席待ちの場所で待つこと247秒。

明日香ちゃんにあと一步の可愛さを持つ女の子がクレープを運んできた。

「おまたせしましたあー!!」

なんと言っ可愛らしさ。

「あなた、名前は？」

そう聞くとその子は不思議そうな顔をして、

「木村 凜です！」

木村 凜：覚えておこう。

今日は、収穫があつた。

その気持ちでいっぱいになり、猫耳メイドカフェを出た。

風紀野郎が作ったクレープを片手に。

外にあるベンチに座り、クレープを一口かじる。

ここは、可愛らしく、小さめの大きさで。

パク。

……。

……。

う、うまい…よ。

中身は、よく分からない構成。

風紀野郎、特製クレープか。

その美味しさに、私は周りへと言いふらした。

「1年2組のクレープ、『風紀オリジナルクレープ』を頼め」と。

その日、風紀野郎のクレープが売れたかどうかは定かではない。

番外編2 部長編 (前書き)

番外編2となっております。

今回も部長視点、お楽しみください。

番外編2 部長編

映画上映中。

ボタンと大きな音がした。

それは、ドアを閉める音であり、風紀が出した音である。

みんなの注目が、一瞬その方向に向いた。

映画という、メインを差し置いて。

「風紀野郎め」

私は、ひっそりと、そう呟いた。

上映中のため、今現在、風紀を追いかけることは出来ない。

しかし、追いかけたい。

捕まえて、大きな音を出したことを後悔させてやる。

不敵な笑みがこぼれた。

「クククククク」

「おい、美保。その微笑と言うか、悪魔の笑い声と言うか、どうとも言えぬ雰囲気醸し出すのは、やめておいた方がいいぞ」

「龍。私は、風紀を追いたいんだけど」

アイコンタクトで脅す私。

龍にはこの技はあっさり避けられるのだが、今の私は最強なり。

「ああ、あとは俺が仕切っというてやる」

面倒臭がりの龍が仕切ることに決定。

何故、先輩も龍を副部長にしたのかが未だに謎なのだが、最近分かってきたような気がする。

彼は天才。

映画の中ではね。

他の場所では、なんとも言えぬ人物だ。

彼は、私の極秘ブラックページに入っているほどの奴だからな。

「ありがとう」

女の色気という武器を使い、龍に御礼をする。

龍は、気持ち悪がっていたような素振りを見せたが、実は嬉しいのだろう。

恥ずかしがって…初心だね。

そういうところは、可愛い男の子だな。うん。

何故か、心から笑いがこぼれそうになった。

だけど、今は映画上映中。

なんとしても、音は出してはいけない。

大きく息を吸って、笑いをとめる。

しかし、また笑いがこみ上げてきた。

あの龍が、恥ずかしがっている。

その気持ちを考えると、笑いが止まらないのだ。

……？

いや、私自身の主旨がずれている。

風紀野郎を追いかけてはいけない。

ゆっくりと、入り口へ近づきドアを開けた。

そして、ゆっくりと閉める。

音が出ないように、笑いがこぼれないように。

外に出ると、先ほど中にいたむさ苦しさとは違ってかわり、涼しい風が吹き荒れる。

今から、誰かの一大事が起こるような風が流れる。

風紀野郎を見つけること。

それが、最初の任務でもあり、最後の任務でもある。

私は、周りを見渡した。

風紀野郎が出てから、私が出るまでの間の時間は、

だいたい、4分37秒。

コンマ7秒ぐらい間違っているかもしれないが、そこらへんは『だいたい』という言葉を用いて誤魔化す。

「風紀野郎……」

そう呟いてから、風紀が行きそうな場所へと向かった。

まずは、1年2組の教室。

猫耳メイドカフェがやっている部屋である。

50M6秒3の実力をいかし、ダッシュで向かった。

教室のドアを開けると、ほぼ空席ともいえる猫耳メイドカフェが。

一件見てみると風紀の姿は無い。

近くにいる1年2組のことと思われる子に「風紀野郎は？」と聞いた。

「香坂君は、今日はいないですね」

糞。

糞糞糞。

私のこの鬱憤は何処で晴らせばいいんだ。

廊下をゆっくり歩き、他に行く場所も無く、映画上映中の場所へと向かう。

その途中で、便所に行っていたと思われる、いじられ役である山田幸助が居た。

「おーい！」

私は、幸助を呼んだ。

私に呼ばれ、頭の上に『？マーク』をつけながら駆け寄ってくる。

ストレス発散道具として扱われることも知らずに。

「ククククク」と笑いがこぼれたが、これは先ほど龍に注意されたばかり。

ふと思い出して、笑いを堪えた。

右手に力を入れ、拳を固めた。

そして、来た瞬間に腹を思いっきり殴る。

ドスツツと鈍い音がすしたが、そこは心配ないと思われる。

そのまま幸助は私の足元に倒れ、気絶した。

起きた頃には、何が起こったかは覚えていないだろう。

幸助を殴ったおかげで少しは気が晴れた。

幸助の気絶姿を、見ているともっと殴りたくなってくる。

しかし、そこは可愛そうなのでとめた。

このままの状態じゃ、少し危険状態に入る。

誰かにこの姿を見られたときには、私の素がばれてしまう恐れがある。

ぱつと、周りを見渡すが、私たちの光景を見た人らしき影はない。

… 幸助を隠さなければ。

幸助の袖を持って持ち上げる。

体格からすると体重は55Kgぐらいだろう。

両手で軽々上がる程度だ。

近くに掃除用具入れがある。

そこに投げ入れ、はい終了。

パンパンパンと自分の掌をたたき、一息ついた。

そのまま上映中の場所に入って行き、風紀のことをさっぱり忘れ映画を鑑賞した。

番外編2 部長編 (後書き)

Double Lifeを読んでくださってありがとうございます。

そして、Double Life 2を削除してしまい、本当に申し訳ございません。

楽しませてくださった方々も、いらっしやると思います。メッセーじもたくさん貰いました。

諸事情等、色々な関係がありまして、大分前に削除させていただきました。

楽しみにしていただきった人たちには、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

どうか。Double Lifeを見捨てないで頂いたら、本当に嬉しいです。

番外編、読んでくださってありがとうございます。
また、いつの日か会いましょう。

番外編3 強さの秘訣 (前書き)

この話は、昔に書いたものです。

ひょっこり、自分のサイトから拾ってきたので

昔見た人は懐かしく思いながら読んであげてください。

始めてみる人は何故風紀が強いのか知るときが…。

番外編3 強さの秘訣

ある日のことである。

今は昼休み。

教室で俺の豪華な豪華なご飯？とはいえないが、ひと時の休みと言
う時間に浸っているときに、幸助が俺の目の前に来た。

そして、俺の顔をじつと見る。

その視線のせいで、せっかくの豪華なご飯？ は不味いご飯になり
そうなのだ。

俺は、幸助を睨み付ける。

その視線にビックリしたのか、ちょっと怖気づいた感じがた。

だが、それでも俺を見続ける幸助。

俺は、睨みつけるのも疲れ、箸を止めて口を開いた。

「何だよ？」

隣にいる明日香は、パクパクマイペースにご飯を食っている。

「いや、何で風紀はそんなに喧嘩が強いのかと」

……？

「いや、それほど強くないぞ」

なんだそんなことが。

俺は、箸を再び動かした。

「いや、強すぎ。2年生で最強と呼ばれている男の人を瞬殺したと言っ噂だしな」

あああのことが。

「出来れば、何でそんなにも強いのか教えてくれないかな？」

……。

え〜！

「面倒だから。嫌」

そう、面倒なのだ。

「教えてくれって！お願いだよ！！」

幸助は、お願いお願いと連発しながら言う。

彼がこの行動を取ると1時間じゃ済まされない。

殴っても殴っても襲ってくるからな。

糞。

面倒くせいが教えてやるか。

「はあ、分かったよ。じゃあ、長くなるがいいか？」

頷く幸助。

そのスピードは半端なものじゃない。

往復するのにコンマ1秒も立っていないのでは？と思わせるような動きだ。

「じゃあ…話すぞ？」

俺がそういうと、先ほどよりスピードが上がった頷くという行動をとった。

面倒だな。

「あれは…」

俺は、ゆっくりと話し始めた。

あの時は、小学校入ったとき、いや、入学式の日だ。

俺は、ずっと居た幼稚園から離れている小学校まで来た。

うちの親は物好きで、名前が変だからこの学校に決めたらしい。

因みに名前は「西京小学校」

え？ 変じゃないって？

この学校の読み方は「さいきょうしょうがっこう」

そう、最強なのだ。

だけど、そこはごく普通の小学校。

そのことに呆れたのか、俺の親父は俺に喧嘩と言つものを教えた。

西京で、最強になるために……らしいが。

それから、俺は苦痛といえる訓練を受けてきた。

これが普通なのだと思って、強制的に思つて。

「おいおい、風紀。そんなんじゃないや西京で最強になれないぞ？」

俺を、顔が変形するんじゃないかって思うぐらいに殴り、拳句の果てに投げ、その上から、のしかかりしてきた親が言う言葉だったのかは、その頃は分からなかったが、俺は泣かなかった。

その修行を中学校2年生の時にまでやっていた。

中学校2年生になり、やっとのことで親に勝てたのだ。

まずは、即効で殴りに掛かる。

それを避けられるのは、最初から分かっていた。

だから、次の攻撃を受け流す準備をしていたのだ。

親父は、その罠に引っかかり、俺の後頭部を肘で殴ろうとした。

俺は、作戦通り受け流し、下に倒れる。

そのまま、親父の足に自分の足を絡め倒した。

親父は勢いよく転び、無防備状態に。

その上に寝たままのかかと落とし。

だが、その攻撃は避けられた。

親父は間一髪のところまで横に転がったのだ。

そして、二人はゆっくりと合間を取りながら立った。

ゆっくりと、親父を見て次にどんな攻撃が来るのかを、予測する。

一発は、仕方ない。

そう思い込んだときだった。

親父が俺に突っ込んできたのだ。

そして、俺の腹に一発蹴りを入れる。

その攻撃が、結構効いた。

だが、親父も片足で攻撃したせいか、少しバランスを崩しながらも俺に右手のフックを顔面にくらわそうとした。

親父のいつもの速さのフックなら普通にくらっているのだが、今は親父のバランスが崩れてスピードが落ちている。

その攻撃を受け流し、その受け流した勢いで頭に回し蹴りをくらわした。

バランスが崩れているので、攻撃は効果抜群。

そのまま親父は、床にうつ伏せになり気絶した。

俺は、一通りこの話をした。

そのときには既に幸助の顔は真っ青。

「まあ、こんな感じだ」

俺がそういうと、その数秒後に幸助はこう言った。

「お前の親父…変」

そういつた瞬間、俺は幸助を殴ってしまった。

無意識的に。

「あ…あと言っの忘れてたけど、親父は昔俺にこう言っただ。『俺の悪口を言うやつは、殺せ』と。まあ流石に俺も殺人者になりたくないからさあ。強制的に殴ることをとめる事を出来ないが、殺さない程度なら何とかなるから」

俺はそういいながら、気絶している幸助の顔を覗いた。

「まあ、催眠術って言うやつだな」

フツと俺は鼻で笑い、食べ終えた弁当を自分の鞆へと片付けた。

隣では明日香はまだ、ご飯をマイペースで食べていた。

番外編4〜1月11日〜（前書き）

新作？ です。

こう言っちゃ恥ずかしいのですが、11日が作者の誕生日でした。皆さんにお礼のつもりで新作も公開でき、嬉しく思っています。そんなこんなで、思いついたのがこのネタ…じゃなくて、作品です。ちよっぴりシリアルなDouble Lifeも楽しんでもらえたら嬉しいと思います。

番外編 4 ～ 1月11日 ～

雪が降る季節。

新しい年を迎えて、二度目の土曜日。

俺はある物音で目が覚めた。

「ん…明日香？」

ドアの向こうにいるであろう明日香の名前を俺は呼んだ。

明日香と付き合い初めて約2ヶ月。あれからは前以上に俺は毎日が楽しくなった。

「え、あ…風紀？」

俺を見たとなんに明日香は慌て出す。

…何、隠してんだ？

「どっか行くの？」

明らかに外に行く格好。

明日香が俺に何も言わずに、出て行くななんて珍すぎる。

「え、あ…ちよつとね」

あはは、とあきらかに何かを隠しているような笑い方。

…怪しすぎる。

「明日香あ？」

俺はニコツと笑って明日香に一步近づいた。

「え！？ いや、何も隠してないって！ うん、大丈夫！ じゃ、じゃあ行ってくるね！」

明日香は俺から逃げるように、すばやく家から出て行った。

「……………」

なんだ？

気になる、とっても気になる。

もしかして、あの日以来俺が明日香に触れてないから、あいつ拗ねて他の男を好きになったのか？

…考えたくも無いな。

明日香は二股できるほど器用な奴じゃないと思っし、今まではあんな動揺した明日香はそうそう無かった。

今日だけ？

強引に男に言い寄られて、断れ切れないからほいほいデートに付き合う。

…ありそうだ。

何かやましいことでも隠しているに違いない。

俺は明日香が出て行ったドアを見つめた後、すぐさまに服を着替えた。

「さっむ！」

外に出てみると、思った以上に寒かった。

今にでも雪が降るんじゃないかって思うぐらいに。

「…明日香はどこいったんだ？」

明日香が家を出てから10分ぐらい。あいつの足と体力を考える限

り、そう遠く行っていないはずだ。

チラッと周りを見渡す。

家を出て右に行けば学校の方面なのだが、明日香の好きそうな場所はない。

左に行けば、皆が行くショッピングモールやゲームセンターなどがある通りに出る。

「左か」

直感だが、俺は左方向へ進んだ。

軽く走りながらその道を走っていると、早くもマフラーを巻いて可愛らしい手袋をはめている明日香を見つけた。

「〜」

なんか上機嫌だ。

ニッコニコ笑ってるし。あんな楽しそうな明日香、俺もたまにしか見ることが出来ない。

「…もしかして、マジで二股か？」

俺は軽く恐怖を覚えた。

トラウマ。もうあんな思いは味わいたくないというのに。

大きく一息をついてから、再び歩き始めた。

歩くこと15分。

いつも俺達がよくいくショッピングモールが見えてきた。

俺が追跡していることなんて知る由も無く、明日香は何かを見つけたかのように走り出した。

それは明日香にとっては早いといえるスピードで。

遠くから、わずかだが明日香の声が聞こえた。

目で明日香が走る方向へ目を向けると、そこには疑いたくもなるような人物が立っていた。

「…亮平？」

まさか、亮平と俺を二股？

いやいや、まさかな。

あいつは毎日のように俺達と遊んでいるが、明日香とイチヤイチヤしているところなんて見たことがない。

……。

でも、どうして二人で？

俺を誘わなかった？

疑問に思いながらも、俺は追跡を続けた。

中をぐるぐる回ること1時間。

明日香たちは昼食をとるために、どこかの料理屋へと入っていった。

さすがに、俺も一緒に！ というわけには行かず、外にあるハンバーガーショップで軽く昼食を済ませたとき、俺のポケットに入っている携帯が鳴った。

「明日香？」

表示されていたのは明日香という文字だった。

内容は、机の上にお昼が置いてあるということ。

それだけだった。

何故、出かけたのか。

どうして、亮平と二人なのか。

そんな内容は一切入っていなかった。

ご飯を食べ終え、明日香たちは笑いながら店を出てきた。

そして、再び店内をぐるぐると回る作業に移る。

ある服屋に入っていったのを俺は見えて、物陰に隠れながら亮平たちを見ていると、明日香は思いがけない行動に出た。

なんと、亮平に服を合わせ始めたのだ。

しかもとても楽しそうに。

「明日香…」

俺はここにいるのが悔しくて、悲しくて、足は明日香たちの方へは向いていなかった。

そして、俺はそのまま帰宅する。

家の中で一人、明日香の帰りを待った。

明日香が帰ってきたのは、俺が家に着いてから3時間後。

第一声は明日香の元気な「ただいま」という言葉だった。

「どこに行っていた？」

やるせない俺は、冷たく明日香にそう言葉を投げかけた。

明日香はいつもと違う俺に気付いて、体をびくつと震わせる。

「だ、だから、ちょっと友達と買い物に行ってたの！ 風紀は今日なにしてたの？」

あはは、と誤魔化すように笑いながら明日香はキッチンへと入っていく。

俺は明日香を見ることが出来ない。

あんな現場を見かけてしまったのだから。

「今日、ショッピングモールに行ってた」

「え？」

明日香が固まる。

「…明日香、正直に答えてくれ！」

俺がそういうと、明日香は諦めたかのようにため息をついた。

「なんだあ、ばれてたのかあ」

「ば、ばれてたって、お前な！」

「ちょっと待ってて！」

明日香はテクテクと走りながら、自分の部屋へと戻っていく。亮平に電話をする気か？

しかし、戻ってきた明日香の手には携帯というものはなかった。

代わりに、大きな袋が一つ。

「え？」

意味の分からない俺は、明日香に手渡されたその袋を持つ。

そんなには重くない。言うならば服の重さ。

…服？

「こ、これって？」

俺は明日香に聞くと、明日香は顔を真っ赤に染めながら笑って「誕生日プレゼントだよ」と答えた。

「…誕生日？」

「もうっ！ ご飯の時まで隠そうと思ったのに、風紀にばれてただなんてショックウ…」

「え、ちょっと待って」

俺は頬を膨らませた明日香に制止の言葉を投げかけた。

「誰の誕生日？」

「え？ 風紀の誕生日、今日でしょ？ 1月11日じゃない」

「え、俺の誕生日11月1日なんだけど…」

「え〜〜！？」

「今年は色々と忙しかったから、明日香がすっかり忘れてると思っ
て…」

「え、私111って覚えてて…その、風紀ごめんね！」

パンパンと神に祈るかのように手をあわせ、俺に頭を下げてきた。

「いや、俺こそ疑ってごめん！」

「疑うって？」

「…いや、なんでも」

こいつはどこまで鈍いんだ。

「そつかあ、11月だったのかあ。ごめんねえ、じゃあこれ、大分
遅れたけど誕生日プレゼントってことで！」

ニシシと笑う明日香を見て、俺も一緒に笑顔になった。

「じゃあ風紀、私の誕生日知ってる？」

明日香の誕生日？

「当たり前だろ」

俺はニツコリ笑って、3月28日と呟いた。

そして、約1年の時が流れる。

高校三年生になった俺と明日香。いつもと変わらない二人の生活。

そんな静かな幸せが続いていけばいいと思っていたのに…。

やっぱり俺達を待っていたのは、ドタバタ生活だった。

Double Life } After Story } へ続く。

番外編4〜1月11日〜（後書き）

最後に書いたとおり、1月11日に新しくDouble Life
〜After Story〜という作品を公開しました。
Double Lifeの続きとなっております。

1年ほど前にDouble Life2というものを書かせていただきましたが、色々と事情が重なり削除という形にさせていただきました。

その後のメッセージなどを読んでいると、楽しみにしていてくれた人が少なからず居たということを知り、大変申し訳なく思っております。

今回は最後まで書き上げます。プライベートの事情もあり、更新ペースが昔ほどではありませんが、読んでくださったら嬉しい限りです。

T o k i

番外編「ホワイトデー」

「ん」

…さつきから、なんだか明日香の上機嫌な鼻歌が俺の部屋まで聞こえてくる。

多分、この距離からしてキッチンなのだろうが…。

「こゝして、こゝすると」

こいつ、何言ってるんだ。

俺は何か恐怖を感じて、布団の中に包まっていた。もしかして、今日はご馳走…？

それなら全然いいのだが…。

今日はなんの記念日だって言うんだ？ 3月14日？ 一ヶ月前はバレンタイン、一カ月後は…特に何も無いな。

そういえば世間一般ではホワイトデーってやつをやっていたはずだ。俺も先月のこの日に、明日香からチョコレートを貰ったからな、一応お返しするのは用意している。

しかし、なんだ。

明日香はなんで今日はこんなに上機嫌なのだ？ いや、上機嫌なことは決して悪いことじゃないんだけどさ。

いつも元気がいいあいつが、ずっと黙っていたらそれはそれで気持ち悪い。

だけど、今日は何かおかしいのだ。

この一年居る俺が言うんだ。間違いない。

いつそのこと、このドアを開けて「明日香、なんか上機嫌だなあ！」なんていつてみようか。

もし、他に好きな人が出来たの…。とか言われたら、俺は立ち直れないけどな。

さて、どうしたものか。

…よし、腹をくくろう。

俺は心の中でそう呟いて、布団から勢いよく飛び出した。

「いくぞ！」

キッチンには聞こえないほどの声で、俺は部屋の中で両手をあげながらそう言った。

いざ、出陣！

俺は自分の部屋のドアに手をかけると、右にドアノブを回し飛び出る。

結構の音が出たのだろう、明日香の小さい悲鳴のようなものが聞こえてきた。

「明日香、どうした!？」

俺は小走りで明日香のところへ行くと、明日香はおろおろしながら俺の目の前に立ちはだかった。

「えっと、なんでもない! その、寝てたんじゃ…?」

「いや、今さっき目が覚めてさ」

30分も自分の部屋でこもっていたなんて言えない。

「あ、あのね! ちょっと買出しに行って欲しいなあって…?」

「買出し?」

珍しい。明日香が俺に買出しを頼むなんて。

「…何してるの?」

俺は目の前に立ちはだかる明日香を避けるように、奥のほうを見た。ここからじゃ明日香に丁度視界をさえぎられてキッチンのほうが見えないからな。

「な、なあんにもだよお！」

「…何も？」

明日香は高速といえる早さで首を縦に振った。

「…まあ、いいや」

そこまで見て欲しくないのなら、と思い俺は一步下がる。

そこで明日香の安堵の息が漏れたのが聞こえた。

怪しい！！

「明日香あ？」

明日香の顔をちゃんと見て言うが、明日香はちよつとうつろたえるだけ。なんか「うう、」とか言っていて可愛いんだ、これが。

「…分かったよ。何買ってきたらいいの？」

「え、えつとね、えつと…マヨネーズ？」

「最後にハテナをつけるな」

「マ、マヨネーズ！」

「はいよお」

俺は手を上げて、部屋から財布を持って玄関から近くのスーパーへと向かった。

マヨネーズを買って、家に戻ると、明日香はいつものようにリビングのソファアールに座りながらテレビを見ていた。

さっきのはいったい何だったんだ？

あまり追求して欲しそうではなかったし、前みたいに明日香を疑うのも正直嫌だ。

し、信じてみよう！

俺は心の中で大きく頷くと、明日香が座っているソファアールへと向かった。

「よっ」

「あ、マヨネーズありがとうね　えっと、お金お金」

「いいよ、俺が持つとく」

「そう?」

「ああ」

「ここはいつちよ男らしいところを見せておかないとな。」

「そついえば、今日のご飯は?」

「ん、野菜いためにしようかなあって。嫌だった?」

「ううん、俺野菜好きだし大歓迎だよ」

「ありがとう、と感謝の言葉を言つと、明日香は照れながらどういたしまして、と答えてきた。」

さて、本題に戻ろう。

なんだこの異様な雰囲気は。

明日香がご飯を作り終わって、俺が席に着くと、明日香が急にそわそわとした。

「ど、どうした？」

「え、え、な、なんでも！ ほらほら、早くご飯食べよ！」

「あ、ああ」

俺は明日香の言うままに、ご飯へと手をつけた。

いったい、何だって言うんだ？

ご飯中も明日香は落ち着く様子を見せないし、俺はといえばそんな明日香を見て会話をする余裕もなかった。

何か言われるんじゃないかって怖くて。

…いやいや、信じるって決めただろ。

「明日香、なにかいいことでもあったの？」

明日香は俺がそう聞くと、待ってましたといわんばかりの笑顔を見

せる。

「え？」

その表情にビックリして、俺はおもわずだらしのない声をあげてしまった。

「ご飯、食べたら言うね！」

顔が赤くなっているのは気のせいじゃないだろう。

俺は明日香の意図を全く読めずに、ただご飯を早く消費することだけを考えていた。

そして、二人はご飯を食べ終わる。

「じゃじゃあん！」

明日香は冷蔵庫から、可愛く包装された何かを取り出してきた。

「何これ？」

「今日は、ホワイトデーでしょ？」

「ああ」

だからね、と呟きながらニッコリ笑った明日香の口から思いもよらない言葉が出てきた。

「だから、逆クッキー!!」

「え？」

「ほら、今年のバレンタインは逆チョコってのがあったでしょ？だからこれ、逆クッキー！」

ニツコリ笑っている明日香を見て、俺はあっけに取られていた。

「あれ、面白くなかった？」

多分、明日香の中では最大級のボケだったのだろう。いや、もしかしたら本気なのかもしれない。

「あ、ありがとう」

俺は目の前に突き出されたそのクッキーを手にとった。

「初めてクッキー作ったから、上手に出来てるかわからないけどね」

アハハと照れるように頭をかく明日香を見て、思わず手が伸びてしまった。

ずっと明日香の頬に指が触れる。

「え？」

「すっげえ可愛い……」

心の底から出た言葉に、俺ははっとなって手を離れた。

やっべえ、耳が痛い…。

「あ、ありがとう」

明日香は顔を真っ赤にしながら、俺に笑ってそう言った。

…そうだ。

「ホワイトデーで、俺が渡すんだろ？」

俺は隠していた、明日香のために買ったプレゼントを部屋から持ってきた。

「ん、渡す順番が多分逆だとは思うが」

ニッコリ笑って、プレゼントを明日香へと渡した。

「開けていい？」

「もちろん」

俺は椅子に座りなると、楽しそうに包装を開ける明日香を見る。

「マフラー…」

「俺のセンスで選んだからな…。まあ、明日香の容姿なら何つけても似合うと思うが、嫌なら言ってくれ。返品してくるからさ」

明日香は部屋の中だというのに、そのマフラーを俺の前で巻いてくれた。

「ありがとう、とっても嬉しい！」

明日香の声は今にも泣きそうなぐらい震えていた。

「喜んでくれて、マフラーも安心してよ」

マフラーを頬に擦り付けたりする明日香を見て、俺は思わず頬が緩んでしまった。

「ねえ、風紀」

「ん〜？」

「今日、一緒に寝よつか？」

「ば、馬鹿いつてんじゃねえよ！」

俺は恥ずかしくなって顔を背ける。

お前の寝顔なんて見たら、俺どうなるかわかんねえつつの。

顔が真っ赤になるのを隠したくて、俺はトイレに立った。

番外編〈ホワイトデー〉（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。

思いつき思いつきの作品です。

さて、ギリギリ14日に公開できました。

こっそりこっそり更新、更新

ちょっとした宣伝？ ですがDouble Life 〈After

Story〉もそろそろ中盤ですね。

では！

皆さんもいいホワイトデーでありましたことを…。

111111アクセス記念（前書き）

Double Lifeのユニークアクセスが…111111アクセスを超えました！

皆様、ありがとうございます！

というわけで、感謝の気持ちをこめて…今回は

キャラに質問というのをやらせていただきますw

当然、何かいつもとは違う話も書かせていただきます。

では、グダグダ感を楽しんでいただけたらなと…。

111111アクセス記念

Toki「さあて、Double Lifeのユニークアクセスが
111111アクセスを突破しました！」

適当にその辺りにいる一同「おー!!」

Toki「みなさん、本当ありがとうございます！ Tokiは読んでくださる皆さんや、こんな小説に感想を書いてくださる皆さん、そしてアドバイスをしてくださる皆さんに感謝してもしたりないぐ
らいの気持ちでいっぱいです！！ と、言うわけで、1111111
アクセス記念として、ちょっとしたサプライズ的な話や、変わった
話を書きたいと思います！」

適当にその辺にいる一同「おー!!」

Toki「今回はDouble Lifeのキャラに質問を、作者である私がしていきたいと思います。こういう書き方をあまりしたことないので、結構困惑していますが…」

風紀「前振りなげえよ。さっさと始めようぜ」

Toki「そうですね、じゃあさっさと質問しちゃっていきましょ
う。では、まず始めに…」

沢部長「おい糞作者、私からにするんだ！」

Toki「…まあ、あまりサブ的なキャラに質問しないでおこうと思っただんですけど、沢部長ですしいつか」

沢部長「私がサブキャラだと？」

Toki「え？ い、いやとんでもない。ではさっそく質問をさせていただけようかと…」

沢部長「ん？ 私に彼氏はいるかつて？ …も、もちろんいないぞっ」

Toki「（そんなこと全然聞いてないんだけど…）」

沢部長「何か思ったか？」

Toki「いえ！ では、次に苦手なものはありますか？」

沢部長「私に苦手なもの？ あゝ、龍のお姉さんだ。とっても美人で、尊敬する人物でもあるんだが、どうも調子がくるってしまう…」

Toki「龍先輩にお姉さん？ あゝ、詳しくはAfter Storyを見てくださっている、宣伝のための答えですね。とりあえず、沢部長ありがとうございます！ 何か最後に一言あればどうぞ」

沢部長「糞作者め」

トコトコとTokiの前から沢部長は去っていった。

Toki「え？ あ、なんだかよく分かりませんでした。次に移りたいと思います。では、主なキャラに戻したいと思いますね。全員に質問していたら時間がなくなっちゃうんで」

風紀「Double Lifeの主なキャラって俺と明日香と亮平ぐらいか？」

Toki「Double Lifeでは沙希がいたでしょう？」

風紀「あゝ、あの凶暴でクマのような女が」

沙希「誰が凶暴でクマのような猛獣の雰囲気をかもし出している微妙なキャラだつて？」

風紀「そ、そこまで言っていないし！」

Toki「え、えっと沙希さん、拳を握る音が凄まじいのですが…」

沙希「黙ってる糞作者」

Toki「はい、すみません…」

沙希「After Storyで、もっと私の出番を増やして欲しかったのに…」

Toki「そんなこと言われましてもね…。それにしても、沙希さんは好きな人とか？」

沙希「私より強い人がもし居るなら、多分その人のことを好きになつてゐるわよ」

Toki「噂によると、風紀はものすごい強いんですけど」

沙希「風紀？ あんな恐怖症の持ち主に負けてたまるもんですか」

Toki「そ、そうですよね」

沙希「もういい？ ちょっと風紀ぶっ飛ばしたいんだけど？」

Toki「あ、どうぞどうぞ」

風紀「待てってー!!」

Toki「えっと、あの二人は放っておきましょうか。では、亮平でておいで」

亮平「なんかあった？」

Toki「いや、特になにもないですけど…。それにしても亮平君、最初は女好きのキャラ設定だったのに、全然女の子と絡まないですよね」

亮平「まあ、な」

Toki「なんかあったんですか？」

亮平「特に何もないよ。それにしても作者よ、どこからの情報で、作者は色々大変な恋沙汰があったらしいな？」

Toki「いや、このコーナー俺に質問する設定じゃないですよ」

亮平「まあ、そうなんだけどな。ちょっと気になってさ」

Toki「心配してくれるのは嬉しいんですけど、亮平は大丈夫なんですか？ 恋のほうは。全く亮平の恋について触れていないですけど」

亮平「大丈夫、ちゃんと付箋は立てた！」

Toki「え、どこに！？」

亮平「あんたが見てないときに、読者だけに分かるように付箋を立てておいたんだよ。これが情報の力って言う奴だ」

Toki「…それは好きな人がいるっていうこと？」

亮平「まあ、可愛い女の子は全て好きだけどな」

Toki「結局女好きなだけかよ」

亮平「まあ、そう言わずに。そういえば今日、明日香の姿が見えないけど、作者はどこにいるか把握してないの？」

Toki「いや、もう来ているらしいんだけどさ」

明日香「おまた〜」

Toki「噂をすれば、どうちゃらこちゃらってやつですね」

亮平「そこはちゃんと勉強しておこうぜ」

Toki「…まあ、最後に亮平、なんか読者に一言があれば？」

亮平「是非、映画研究部へ！」

Toki「はい、ありがとうございました！ んじゃ、次はだいぶ昔に行ったランキングでなんと、亮平を差し置いて3位に入った凜に来てもらいましょう！」

凜「へ、私！？」

Toki「うん、おめでとう！ まあ、上位二人とはかけ離れた投票数だったけどね」

凜「あの二人には勝てないでしょう？」

Toki「そうだね。まあ、とりあえず質問させていただきませうね。凜は転校してきたんですけど、その前までどこにいたんですか？」

「その前まではちよつと親の都合で、隣の県にいつていたんですけどね。親がこっちに戻るって言ったから、私もこっちに戻ってきたんですよ。高校の転入試験に合格して、大好きな風紀の名前を見つけたときは、とてもなく興奮しましたね」

「そ、そうですか…」

凜「他に、質問あります？」

Toki「え、いや、結構です。よろしければ読者の皆様に一言を」

凜「え、えつと…風紀は絶対渡さないんだかねっ！」

Toki「はい、ありがとうございます！では次は、圧倒的なランキング投票数で1位を獲得した二人を登場させましょうか」

明日香「ふ、風紀が居ないっ！」

Toki「…あ、すっかり忘れてた」

明日香「何を？」

Toki「…な、なんでもないよ！じゃあ明日香からでいいですよね？」

明日香「うん、よく分からないけど、よろしくおねがいします！」

Toki「自分の名前は気に入ってるの？」

明日香「私の名前、結構気に入ってるんですね。ほら、風紀の苗字が入っているじゃないですか？」

Toki「そういわれれば…。じゃあ結婚したら、香坂明日香になるんですね」

明日香「うんっ！風紀となんか繋がっているみたいで嬉しいんですよねえ…」

Toki「風紀、羨ましすぎる…。あ、それとですね、明日香は今、高校で一番美女という名を持ってるんですが、このことについてど

う思います?」

明日香「私が高校で一番!? そんなお世辞要らないですよ」

Toki「…え、お世辞じゃないんですけどね。だってほら、昔にやった人気投票では「かわいい」という文字が多かったんですよ」

明日香「可愛いと美女はまた違う意味になるんですよ?」

Toki「…すみません、一生の不覚です」

明日香「どうしたの、作者さん! そんな落ち込まないで、ね?」

Toki「…癒される」

明日香「え?」

Toki「い、いや、なんでもないですよ。では、風紀君を呼んでもらっていいですか?」

明日香「風紀、どこに居るんですかね」

Toki「明日香が呼べば来ると思いますよ」

明日香「そう? じゃあ、風紀いい!」

風紀「あ、明日香!」

Toki「ほらね? 風紀は明日香にベタばれですから」

風紀「ちょ、作者！ 何言ってるんだよ！」

明日香「風紀、顔あかい」

風紀「……」

Toki「ま、まあ、質問しますね。風紀君は明日香ちゃんの学校
—美女と言われることについてどう思います？」

風紀「そりやもう、こんなに可愛かったら」

明日香「だから、美女と可愛いは同義語じゃないんだよ？」

風紀「それは作者のミスだろ？ 作者に言ってくれよ」

Toki「さっき言われました……」

風紀「そ、つか」

Toki「とにかく、風紀君は確か明日香ちゃんと同じ人気を読者
様から頂いているんですよ」

風紀「そりや嬉しいことだな」

Toki「まあ、『強いのがいい』とかいうコメントが一番多かつ
たんですけど」

風紀「よく、最強というキャラ設定にしてくれた！」

Toki「別に最初はするつもりなかったんだけどね……」

風紀「…まあ、感謝してるよ」

Toki「あ、それよりもですね、お二人から読者様に向けて何かコメントしてもらってもいいですか？」

明日香「確か1111111アクセスだっけ？ ユニークアクセスだからすごいんでしょう？」

風紀「ああ、亮平が言っていたんだが、作者の他の作品は、5万いいくないそうだな。もっと頑張っ欲しいもんだな」

Toki「いいんです！ 僕はマイペースで頑張るんで！」

風紀「そっか」

明日香「えっと、読者様にコメントだよな？ 私からいくよ？」

Toki「どうぞ」

明日香「えっと、皆様！ このたびはDouble Lifeをこんなにも見てくださってありがとうございます！ 私、とても嬉しくて泣きそうなんですよお？ それに可愛いなんてお世辞でも言ってもらえるなんて、感動もんです！ 作者さんは、こんな結構おっちょこちよいで頼り無さそうですけど、頑張っって小説書いているところを私は毎日見えます。出来れば今後とも、作者さんとお付き合いいしていつてあげてください。では、本当にありがとうございます！ またねえ」

Toki「あ、ありがとうございます！ って僕が言っているのか

な？　じゃあ次は風紀よろしくおねがいします！」

風紀「えっと、明日香にほとんどいわれちゃんだけど、11111111アクセスだっけ？　とりあえず作者におめでとう。だけど、作者は読者様にこんな作品へ足を運んでもらっているんだ。作者はもともと読者様に感謝をするべきだと思う。まあ、俺の意見だからな。とにかく、読者様であろうが、なんであろうがコレだけは言うておきたい。明日香は、渡さないからな！」

Toki「え、あ、なんか熱い言葉ありがとうございます。では、これで主なキャラへの質問終わりましたね。こんなグダグダなのを誰が見てくれているのだろうか。本当に、ここまで読んでくださった方々ありがとうございます。最初にも書いたとおり、11111111アクセス記念として、色々と書かせていただきます。あまり慣れない書き方ですから、内容がグダグダになるかもしれません。そのところ見逃してほしいです。どうかよろしくおねがいします。では、また会いましょう」

山田幸助「あれ？ 俺の出番は…？」

Toki「君の出番は沢部長に取られちゃったんだ、ごめんね」

幸助「そんなあ！！」

111111アクセス記念（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

色々な話しを書こうと思っているので、待っていて下さったら嬉しいです。

では、また会いましょう。

もしも がDouble Lifeの主人公だったら（前書き）

全て、第一話の話で構成されています。

香坂風紀ではなくて、その他のキャラ視点で書くことがあまり少ないので、ちょっと変かもしれません。

でも、楽しんで欲しいと思って書きました。

では、どうぞ！

もしも がDouble Lifeの主人公だったら

*** もしも、清水亮平がDouble Lifeの主演だったら

「ふう、今日は暑いってテレビでやっていたからな、一応冷ピタ持
つてきて正解だったぜ」

春というのに、30度という熱を浴びている俺は清水亮平だ。

なぜか親に言われて、今日から親の元を離れて暮らすことになった。
どうやら、親は俺を放って旅行に行つて来るらしい。

あの親は、勝手に何もかもを決めてしまつから困るんだよな。

「さて、この地図を見れば…」

じつと俺は地図を覗きこんだ。そこには、細かすぎるほどに記入さ
れた地図がある。

「俺は親に似たんだな…」

よく分かる。こんなにも、この周辺の情報が書いてある地図なんてないだろう。

ん？ なになに？ ここから54歩歩いたところを右に曲がると。

「こんな細かく書かなくても分かるんだけどな・・・」

そういえば、俺が今日から住む場所には『しっかりものの、頭の良い、優しい男の子』がいるらしい。

一人暮らしでも全然よかったのだが、そんなお金はなかったようだ。まあ、ルームシェアすれば、家賃も半分で住むし、色々と助け合えることが出来る。

その点においては、便利だったことだな。

「お、あそこか」

俺は目的地を発見すると、ポケットにしまっていたタオルで汗を拭った。

「401か」

ボソツと呟いて、エレベータに乗ると、俺は4階へと向かった。

親の話によると、俺と一緒に住んでくれる人はもう部屋に着いているらしい。

俺はインターホンに手を伸ばした。

ピンポン。

「はい！」

お、中から可愛い声が聞こえてきたぞ。

…え？

ガチャリの音と共にドアが開く。

そこには美少女という言葉にふさわしい美女が立っていた。

「つて、男！？」

「女です！」

「ですよねえ…」

なんだ、なんで女がここにいるんだ？

地図を見る限り、ここで間違いない。なんたって写真まで貼っているのだ。…親の情報が間違っていたのか？

いやいや、あの親がこんなミスをするわけない。

もしや、俺はめられたのか？

「…あのお？」

「何？」

目の前の美少女はあきらかに困った様子を見せる。そりゃそうだ、インターホンを鳴らしたのに、俺はこの人に向かっていきなり「男？」など聞いてしまったのだから。

「どちらさまでしょうか？」

やっぱりそう聞くだろう。

「自分はここに今日から住む予定なんですが、貴方はもしや僕と一緒に住んでくれる人の彼女ですか？」

そう考えるしかないもんな。

「ち、違います！ 私、彼氏いませんし……」

「じゃあ貴方はなぜここに？」

「だって、今日からここに住むんですもん。もしかして、貴方も？」

「そうですけど……」

「男の方ですよね？」

「ですね」

「私、女の人と一緒に住むって聞いたんですけど……」

「……そうですか、部屋間違えたみたいですね」

俺はんぐと言つと、笑顔でその家のドアを閉めた。

さて、どうするものか。

考えた挙句、俺は小さいころからの友達である風紀という名の男の家に転がり込んだ。

それが俺の、高校入学前の思い出。

そして、これから始まるドキドキ生活の始まりでもあった。

*** もしも、山田幸助がDouble Lifeの主人公だったら ***

「暑い！ 暑い！ 帰りたい！ もう家に帰りたいよお！」

なんだ、この暑さ！ 今、春だろ！？ 花粉症の時期だろ！？

俺の親はなんで、いきなり旅行に行くって言い出したんだよ！ 意味不明だろ！

「それにしても暑すぎる！」

コンビニで涼しんでから、俺が住むであろう家に向かうか。

俺は目に付いたコンビニに飛び込んだ。

「涼しい！！」

やっぱりこんな暑さのときはコンビニが一番でしょ！ 俺の家は厳しくてクーラーなんて付けてくれないからなあ…。

「…あれ、そういえば地図どこに置いてきたっけ？」

鞆の中か。

俺はそう思い、右手に持っているはずの鞆に目を向ける。

…あ、どこかに忘れてきた。

で、電車の中！

「やば、どうしよう…」

マンションの場所なんて全く覚えてねえよ…。

「親に電話だ！」

ポケットから携帯を取り出し、親の電話番号にかけた。

「現在、この番号はお客様の都合により、おかけすることは出来ません…」

……。

「なんでやねん!!」

俺はどうすることもなく、公園で泊まることとなる。

これが俺の刺激ある高校生活の始まりであった。

…って、俺の扱いひどくね？

*** もしも、香坂風紀が秋本明日香より先にマンションについていたら ***

「緊張するう…」

どうやら、私がこれから行く家には、私と一緒に高校生活を送る女の子が住んでいるらしい。

「どんな子だろうなあ…」

私は、ちょっとした理由で離れた場所からこの高校を選んだ。

そして、私は人生初の一人暮らしのために、部屋を探しているところに、あの優しそうな男の人が話しかけてきたの。

「よろしければ、うちの娘と同居してあげてくれませんか？ ずいぶんと寂しがりやなんです。その高校手帳を見る限り、同じ学校に通うみたいなんで…」

その男の人は悪意のない笑顔で私にそう言ってきた。もちろん、家賃は向こう持ちだというらしい。

私の我侭で、家に余計なお金をかけすぎていた私は、その甘い話に乗ってしまったのだ。まあ、一緒に協力して住むことは悪くないんだけどね。

「ここかな…？」

私は自分の住む部屋へと向かった。

不動産の話によると、向こうの人はもう家に着いているらしい。

ピンポンと私はインターホンを鳴らした。

ドキドキと心臓が鳴る音が聞こえる。

「はい」

ガチャリとドアが開く。

「こんにちは！」

私は第一印象をよくしようと、思いつきり笑って見せた…のだが、そこには私が思っていた人物像とはまた別に人が立っていた。

「おと、こ？」

「だ、誰です？」

目の前の人は軽く震えながら、私に話しかけてきた。

「え、えっと、秋本明日香と申します。私は、今日からここに住む予定で来たんですが…」

「え！？ その話は聞いていたんですけど、俺は男の人と一緒に住むって聞いてたんですけど…」

「私は女の人だって！！！」

しばらく、私たちは見つめあったまま固まっていた。

どちらからというわけでもなく、私たちは息を噴出して笑い出す。

「くく、すいません、おかしくって」

「よく話の事情が読めないんで、とりあえず上がってもいいですか？ ここじゃ、人目に付きますし…」

私はそういうと、男の人はビクツと体を震わせてから、どうぞと私を招き入れてくれた。

それから、少し色々あったのだが、どうやら私はここですむことになりそう。

この人も楽しそうな人だ。お父さんと会話しているとき、この人いきいきと喋っていたもの。

私はニツコリ笑って、よろしくおねがいしますと言葉を放った。

彼は軽く私に笑いかけてきて、そういえば名前をまだ言ってませんでしたね、と呟く。

「香坂風紀」

この名前を私は、これから一生心に刻み込む名前となることを、まだ知ることはなかった。

高校生活はきつと楽しくなる。

風紀君の笑顔を見て、私はそう思った。

もしも がDouble Lifeの主人公だったら（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

どうでしたでしょうか？

亮平と幸助を書こうとは思っていたのですが、そのほかが思いつかなくて、明日香をちよろつと書きちゃいました。

まだまだ記念小説は続きます。

楽しんでいてください。

秋本明日香 中学生Life!!!（前書き）

今回の話は、秋本明日香の中学時代のお話。

Double Life 3章（詳しくは3・5）で出てきた、明日香と大和君の付き合いまでのお話です。

明日香は昔から可愛かったのですが、この人の存在のおかげで誰からも告白されていなかったみたいです。

*** 明日香視点です。

秋本明日香 中学生Life!!!

「ほら、また大和君ってば明日香のこと見てるよお？」

弥生は毎朝、私をそうやってからかってくる。

「ち、違うよっ！」

それは弥生が、私は大和君を好きだって知っているから。

中学生になって、もう半年が過ぎていった。

ちなみに、大和君とは私たちの幼馴染の男の子だ。昔から何でも出

来て、いつだってみんなの中心にいる人。

「明日香」

ニツコリ笑って、大和君は私に近寄ってきた。

「や、大和君！」

大和君が近づいてくると、私の鼓動は早くなる。これが恋なんだなと気付いたのは、小学生の高学年になったころだった。

「今日も一緒に弁当食べようぜ。4限目が体育だから、着替えが終わったらいつものところに来てくれよ」

「う、うん！ 分かった！」

「あまりラブラブしないでね？ 私がいるってこと忘れちゃ困るんだから」

そうそう、この弥生って子は、2組にいる私の大の友達なの。いつも学校では一番に近い成績をとっていて、将来が有望なんだってさ。それに美人だし、いつだってモテてるの。よく男の子と話しているのを見かけるし、きっと弥生にも彼氏っていう存在がいるんだろうなあ。

「お前のことなんか気にしねえよ。それより明日香、もう今日は弥生連れてくるんじゃないぞ？」

「なんでえ？」

「な、なんでつてな…。ほら、弥生も彼氏とかと一緒にご飯食べたに決まってるだろ？」

「あんたが、明日香を食べただけでしょうが」

弥生のその言葉に、大和君はうつとろたえていた。

「私は食べ物じゃないんだけどな…」

そう呟くと、大和君と弥生は一瞬見合わせて、ぷつと笑い出した。どうやら、私はまたおかしなことを言ったらしい。

よく、こういう場面がある。昨日だって、プリンに醤油をかけて食べると、いくら味がするんだよって言ったら、今日みたいに笑われたの。

「ま、まあ、明日香待ってるからな」

大和君はニツコリ笑うと、友達のところへ戻っていつてしまった。

「あんた達、いつになったら引っ付くのよ？」

弥生は私をじろつと見て言う。

「え！？ 引っ付くなんて恥ずかしいよ」

「はあ…、いつになったら付き合っのよって言ってるの」

弥生は呆れたように頭を抱え、再びそう言った。付き合っのと引っ付くのは、ちょっと意味が違っんだと思っただけだな。

「付き合うなんて、絶対じゃないよ？　なんたって、大和君はカッコイイんだし、私とじゃ釣り合わないよ。弥生ぐらい可愛くなきゃ、絶対に付き合うことなんて出来ない」

弥生はまた、頭を抱える仕草を見せた。

「どうしたの？」

「いや、あんたって言う奴は、いつになったら自分の素晴らしさに気付くのかなって思って」

「私？」

「あんた、すごい可愛いだよ？」

「そんな、お世辞はやめてよ！　けど、弥生からそういわれたら嬉しいな、ありがとね」

小さな声で、もういいやって言ってたけど、気にしちゃいけないのかな。

あれからも私と弥生、そして大和君とはずっと一緒にお昼も食べていたし、よく大和君と二人で遊びに行っていたりもした。

そして、私たちが中学校2年生になると、大和君が少しずつ私避けていくようになった。

「大和君、どうしたの？」

たまに一緒に帰宅するとき、私は大和君に問い詰める。一緒にいられないのが寂しかったから。

「べ、別に何もねえよ」

これが、最近の大和君が使うお気に入りの言葉。

「そればっかあ」

むすっと拗ねた不利を見せると、大和君は慌てて何かを言い始めた。どうやら謝ってくれているらしい。早口すぎて、よく何を言っているか分からないけど。

「なあんちゃって」

笑って見せると、大和君は安心したのかほっとした顔になった。

「ねえ、私にかしたかな？」

ちよつと不安になった私は、大和君に聞いてみた。だけど、やっぱり返事はない。

「ねえ、大和君！」

ちよつと声を張り上げた。私はそんなことを、あまり大和君の前ではしなかったから、大和君は驚いていた。

「私が、何かしたならはつきり言つて！　じゃないと、私、私・・・」

そつやって言っているうちに、どんどんと視界が涙でゆれていった

「あ、明日香・・・」

いきなり、歩道で立ち止まる大和君。

「ど、どうしたの？」

怒っちゃったのかな。そう思った瞬間、私のゆれていた視界は真つ暗になった。

「や、大和君！？」

どうやら私は、大和君の腕の中にいるみたいだ。ビククリして、涙も止まってしまった。

私、すごい心臓がバクバクいってる！　これ、大和君に聞こえちゃうかな？

「ドキドキ言ってる…」

「え!？」

聞こえちゃってたの!？

「俺の心臓の音聞こえるか？　ドキドキ言ってるだろ？」

な、なんだ大和君のか。

私はふうと息をはいて、大和君の心臓の音を聞くと、確かに早く動いている気はした。

「どうしたの？　走った？」

「お前、ずっと一緒に居ただろうが」

「そうだよねえ」

アハハ、と私が笑うと、私を包んでいる腕の力が一層に強くなった。ちよつときゆうってなりすぎて痛い。

だけど、幸せ。

「や、大和君？」

「明日香、好きだ」

「え？」

「付き合ってくれないか？」

「や、大和君？」

「つ、付き合うつて？ その、彼氏、彼女の関係になるってこと！？」

「俺、ずっとお前が好きだったみたい……」

「や、大和君」

大和君の一言、一言がしっかりと私の耳に入り込んでくる。何よりもそれが嬉しかった。

その言葉が嬉しかった。

「私も大好きだよ」

両手でしっかりと大和君の背中を包み込んだ。そしてゆっくりと顔を、大和君を見るように上へ向けた。

「初恋、叶っちゃった」

ニシシ、と笑うと大和君は俺もだよ、と呟いてくれた。

きつと、このまま幸せに暮らしていけると思ったのに、現実はその甘くなかった。

それからまた、数ヶ月たったある日、あの事件が起きる。

大和君に、新しく好きな人が出来たのだ…。

秋本明日香 中学生Lief!!! (後書き)

読んでくださってありがとうございました。

今回の話は楽しんでいただけたでしょうか？

凜と風紀の話はあまり思いつかないんですね。

では、また会いましょう。

風紀と明日香のLove x 2 Life!! (前書き)

風紀視点です。

今回は、Double Life の最終話の次の日に当たる話しを書いてみました。

ということは！ もう付き合った後の二人が見れるって事です！！
…その、まあ！ 詳しくは見てからのお楽しみということ。
Tokkiを嫌いにならないでください…。

風紀と明日香のLove x 2 Life!!

「ねえ、風紀」

「ん？」

「あのね、ちょっとお願いがあるんだ」

高校1年生の文化祭が終了した次の日、俺達の学校は休みだった。休日ということもあり、俺はゆっくり明日香と過ごそうと決めていたのだ。

そんな俺の気持ちを知ってか、どうかは知らないが、まだ朝の8時だというのに、明日香はいきなり俺の部屋へと入り込んできた。

そうそう、昨日俺と明日香は彼氏、彼女という関係になった。けど、そういうことを、あまりおおぴらにすると、俺の生命に関わってきてしまう。だからと言って、否定するつもりはないけどな。

「お願いって？」

「あ、あのね…」

モゾモゾと体を動かしながら、明日香はカァッと顔を赤くした。何か可愛らしいことでも考えているのだろう。

「なにになにい？」

俺はそんな明日香を見て嬉しくなって、ついついからかってしまう。

「あ、あの、だからね？」

明日香は真っ赤に染まった顔で俺にニコツと笑って見せた。

「その、ね？」

「ん〜？」

はつきり言いにくいことなのだろう、俺はそつと明日香を理解しようとしてしまった。

それでも、明日香は何も言おうとはせず、ただモゾモゾと動いているだけ。

「まあ、あまり顔見ないでっ！」

手で顔を隠すが、全てが隠しきれているわけではない。指と指の間から、俺の様子を伺っているのが丸分かりである。

「…も、もう一度、昨日の言葉を言って欲しいんだけど」

「昨日の言葉？」

分かっている。俺が昨日言った言葉。多分、明日香のことだから、昨日のことが本当なのかどうか落ちていた今日、もう一度確かめた

いのだろう。

なんたって、昨日あとの明日香の言動全てがおかしかったから。しかし、俺はあえて知らない振りという選択肢をとった。どうしてそうしたのかは、この後直ぐに分かるだろう。

「ふ、風紀ってば！」

さつきよりも顔を真っ赤にした明日香がそこに居た。

ふてくされながら、明日香は俺の部屋へと入り込んで、俺がさつきまで寝ていた布団へと腰を下ろす。

そんな明日香を見て、俺はニツコリと笑った。

昨日のことが信じられないのは俺も一緒だ。あの学校一美女と言われた女の子と付き合えるのだ。

だけど、それを真実だと実感するには相応しすぎる状況が、今まさに起きている。

あんなに顔を赤くした明日香を見るのは初めてだ。

「ね、ねえ？ 風紀い」

甘えた声で俺にささやいて、俺が言ってくれるのを待っているらしい。

「昨日の言葉って、どんな言葉だったのかなあ？」

悪戯しているような気分になって、俺はニシシと声を出して笑ってしまった。

「ふ、風紀い…」

いじけたのか、明日香は布団の中へと潜り込んでいってしまった。

「どうしたあ？」

「……」

何も反応がない。

「俺、もう部屋でちやうよお？」

「……」

そう言っても反応がなかった。じゃあ、コレでどうだ？

「そっかあ、明日香は俺の顔が見たくないのかあ」

「み、たい！」

ちよろつと布団のわずかな隙間から、明日香のいじけている顔を拝むことが出来た。

「あゝすかつ」

俺は布団越しに明日香に抱きつく。

今までの俺じゃあ考えられない行動だ。だけど、こんな可愛い明日香を見て、こうしちゃいられなかった。

本当に俺は明日香が大好きなんだって、もう一度分かった気がする。

「風紀のいじわるう、ばかあ、いくじない」

今にも泣きそうな声で、明日香は口を尖らせながらそう言った。

「明日香」

わずかな隙間から明日香の名前を呼ぶ。そうすると、明日香は口を閉ざした。

「俺、お前に二つ言わなきゃいけないことがあるんだ」

小さな声で、俺は目を瞑りながら語るように口を開いた。

「ひとつは俺のこと。俺は女性恐怖症なんだよ。ずっと黙っていたけど、女に触れることが出来ない体質なんだ。喋ることも、ある意味苦手だよ」

その後に、明日香は例外だったよ、と笑って呟く。

「もう一つは、明日香。お前無しに俺の幸せがあるわけないだろ…」
それだけを言うと、布団の中にもぐっている明日香から泣き声が聞こえてきた。

「明日香、大好きだ」

「私も…だ、大好きだよお」

泣きながらそう言ってくれる。そんな明日香を、心から愛おしいと思った。

「明日香？」

「うう…」

「泣くなよ」

「だ、だって、嬉しいんだもん」

「俺も嬉しいよ、明日香が好きって言ってくれて」

「ほ、んと？」

「ほんと」

「私も嬉しいよ、風紀が私の事、その…だ、大好きだって言ってくれて」

きつと布団の中で顔を真っ赤にしているのだろう。

そう思うと、ふっと笑顔がもれた。

「何度でも言ってるよ。明日香、大好きだよ。愛してる」

「私も愛してる」

「俺のほうが愛してると思うよ?」

「私のほうがもっつと愛してるもん!」

「そっか」

布団越しに、明日香の頭を撫でた。

「可愛いな」

「あ、ありがと...」

「世界一可愛いぞ」

「も、もう」

「本当にそう思ってたんだよ。...こんな可愛い明日香が、俺の彼女でいいの?」

「風紀じゃなきゃ嫌なの」

むすつとした声が返ってきた。

「もう、俺は明日香以外に考えられない」

「私も風紀以外に、こんなこと言えない」

「こんなことってえ?」

再びからかつてみる。明日香は口を尖らして、いじわるうと呟いた。

「だ、大好きとか、愛してるとか」

また顔が赤くなったのか、明日香の体が少し丸まるように動いた。

「当たり前だ。他の男にそんなこと絶対言っなよ」

「当たり前だよっ！」

「だよな」

俺はクククと笑いながら、明日香を抱きしめる力を強めた。

「風紀い？」

何か不振に思ったのか、明日香は俺の名前を呼ぶ。

「泣いてるの？」

「ないてねえよ」

「なあんだ」

正直、幸せすぎて、ちょっと泣きそうだ。

「明日香」

「何い？」

「結婚、しような」

「っ……!!」

「愛してる」

俺はそっと目を瞑って、明日香の返事を聞く前に眠りの世界へと入り込んでいった。

こいつのためなら、俺はなんだって出来るから。

風紀と明日香のLove x 2 Life!! (後書き)

さ、さて、どうでしたでしょうか？

自分で書いていてなんですが、正直背中が痒いです。顔が真っ赤なのは俺だっつつ話ですよ（つ　。　、　）うう…

風紀ってあんなキャラと違ったんだけだな。

それにしても、明日香ってどう書いてもかわいいです。さすがは…
ってなんか親ばかみたい。

それはさておき、読んでくださった皆様、ありがとうございました。
まだまだ続くと思われるこの記念小説。

どうか最後までお付き合いのほどお願いします。

彼、皆の人気者Life!! (前書き)

さて、今回はある人気者の話です。

神様視点というか、なんというか…ちょっと変わった書き方をしたつもりです。

では、楽しんでいてください。

彼、皆の人気者Life!!

「やあ、おはよう！ 皆の衆！」

朝、彼が教室に入って第一声にいう言葉はこれだ。最初は誰もが、その台詞に笑っていたが、1年も一緒にいた今となつては、それが普通になってしまった。

「山田君、日直だぞよあ？」

ドアの前で、片手をあげた状態で止まっている彼の頭をコツンと叩く先生。

「あ、先生おはようございます！」

「おはつようっ！」

ちなみに、この先生はよく分からない人だ。テンションがおかしいというか、頭がおかしいというか。

彼はそんな先生のことが大好きらしい。というか、女と聞けば好きになるらしい。この彼こそが、無類の女好きというやつだ。

「あ、おはよう！ 風紀、亮平！」

彼のその言葉に、目の前の二人は全くの無視である。ビクリともその彼の言葉に反応する素振りは見せなかった。

「おはようだっていつてんだろおお!!」

ちなみに、彼は無視をされることが大嫌いである。そのため、どんな人にも絡んでしまうのだ。

「あ、幸助いたのか」

そんなことを呟くのは、彼の友人であろう風紀。であろう、と書いたのは、そう思っているのは彼だからだ。風紀にとって彼の存在は、あまり大きくないらしい。

「亮平っちもおはよう!」

彼は風紀の隣に座っている亮平にも絡み始めた。亮平はウザそうな顔をして、はいはいお早う。と答える。だけど、彼はそれで十分なのだ。無視さえされなければ。

そんな彼はクラス全員に挨拶をする。その日、その日でテンションが全く違うが、いつだってクラスを明るくさせようと頑張っている。

授業が始まると、彼はいつものように必死にノートを取り始めた。勉強は出来ないほうだ。正直なところ、成績は学年では下から数えたほうが早い。

そんな彼にも長所がある。

それは決して心が碎けないことだ。…いや、ごめん。これも嘘かも

しれない。毎日のように女の子に振られては、そのたびにショックを受けている。

まあ、女のこの方は相手にもしてないのだが。

「あ、明日香ちゃん！」

休憩時間になると、とりあえず女の子のところへ行く。明日香とは、この学校で一番の美少女と言われている女の子だ。もちろん、彼の中でも明日香の可愛さはTOPクラス。

「今日も可愛いねっ！」

そんなことを恥ずかしがらずに言えるのは、もしかしたら長所なのかもしれない。

「ありがとー」

そして、明日香は満面の笑みで返事をした。だけど、彼は知っている。明日香の彼氏は風紀ということ。だから、明日香にはあまり深く関わらない。偉大な鑑賞物という認識が強いのだ。

休憩時間が終わると、授業が始まり、またノートをとる作業に戻る。

彼がこの学校で楽しみにしていることといえば、一年に一度ある文化祭、体育祭、映画の撮影だ。

そして、毎日の楽しみは、昼食の時間。いつもは映画研究部仲間の悠太とご飯を食べている。

悠太は優しい。こんな彼をいつも笑って、全ての話しを受け止めてくれる。もしかしたら、受け流しているの間違いかもしれないが。

大変な授業が終わると、次は映画研究部の活動時間に入る。

彼はこの時間も大好きだ。

この映画研究部には美女が揃いに揃っている。明日香はもちろんのこと、学校で明日香の次に美女と言われている、ひとつ学年が上の由美、その妹の静香。そして、大人しそうに見えるのに、本当はとっても強い五十鈴。

しかし、彼にも怖いものがあつた。それは、部長の沢美保という存在。

何かあるごとに、彼をストレス発散道具として使ってくるのだ。その痛みに毎度のごとく、彼は耐えている。

この前の文化祭のとき、彼はその沢美保に色々と嫌がらせに近い何かをされた。

その苦痛のせいか、次の日は下痢で大変だった。

しかし、それももう終わった。

文化祭が終わり、三年生の二人が引退したのだ。今年からは由美が部長になる。

不気味な存在として、光男という男をあげておこう。まあ、そんな光男にも彼は、当たり前障りなく接していくのだが。

「今日は何見るのお!!」

ドキドキしながら、彼は特別教室の一番前にあるスクリーンに目を向ける。

「今日は…」

そして、今日の映画の説明を部長になった由美が始める。彼はその言葉一つ、一つをしっかりと聞いていた。

なんたって映画が大好きなのだ。

小さいときから、親と一緒に映画をよく見に行く。最初に見た映画は、ホラー映画だった。

ものすごい印象深い作品で、その作品はどうやら何か大きな賞を取ったらしい。

彼は食いつくように映画を見ていた。物語を楽しむ。それが映画を見る側にとって大事なことらしい。

彼が前に語っていた。

映画も終わり、部活が終わると、あとは流れ解散となる。

映画が始まる前に帰宅する人もいるが、彼は決してそんなことはしなかった。

家に帰っても何もすることがないからだ。

帰り道は寂しい。そんな表情をしながら彼は毎日歩いている。たまに、寄り道をしてゲームセンターに寄るが、毎回のようにお金をはたけだけで、とくに何も得るものはない。

帰ると、家の机の上には今日の晩御飯が用意されていた。

親は共働きで、あまり会話をする機会が無いらしい。そんな寂しい家に一人でいるのは悲しいのだ。

ご飯を食べて、お風呂に入ると、次の日に備えて、いつも早めに寝る。

そして、彼は朝登校する。

教室のドアの前に来ると、いつものように笑顔を作った。

そして、あの言葉を言う。

それが彼、自称、皆の人気者山田幸助の一日。

彼、皆の人気者Life!!（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

どうでしたでしょうか？

楽しんでいただけましたでしょうか…。

感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5680d/>

Double Life

2011年4月1日03時15分発行